

## ことばの定義と本書のねらい（まえがきにかえて）

定義とは意味を定める説明です。そのまま覚えてください。確認のために□にチェックするといいでしょ。

- 英語ということばは、a, b, cなどのアルファベットの〈文字〉のほかに、  
ピリオド（.）やクエスチョンマーク（?）、コンマ（,）などの記号や、数字から成り立ちます。
  - 1つ以上の文字がつながって意味を持つとき、それを〈(単)語〉といいます。  
語はふつう、文の中では空白（スペース）で区切られます。
  - 2つ以上の語が1つの意味のまとまりを持つとき、それを〈句〉や〈節〉といいます。
  - 語や句、節などの意味のまとまりがつながって、1つの〈文〉が成り立ちます。  
文とは、大文字で始める語から始まり、ピリオドやクエスチョンマークなどで終わる、意味のまとまりです。
  - 文が1つ以上つながって、比較的小さな内容のまとまりである〈段落〉が成り立ちます。
  - 段落が1つ以上つながって、筆者の主張や報告のまとまりである〈章〉や〈文章〉が成り立ちます。
- 以上から、英語のことばの単位は、その大きさをおおむね次のように定義できます。

□ 文字 < (単)語 < 句・節 < 文 < 段落 < (章・)文章

本書のねらいは、このうちの〈文〉を、「構造的に」正しく理解できるようになることと設定します。  
正確に言う、文の構造を正しく見定めるために必要な考え方、文の意味のとり方を身につけることです。

文の構造を正しく理解し、意味を正しくとれるようにするには、文を構成する句と節の理解が必要です。  
句と節を正しく理解するには、「意味のまとまり」と、その〈品詞〉としての働きの理解が必要です。  
句と節とを、意味と品詞のまとまりとして理解することによって、〈文の要素〉が理解できます。  
文の要素とは、英文が正しく成立するために必要な、品詞的な意味のまとまりとその順序のことです。  
以上のことが理解できれば、理論上、あらゆる文の構造を正しく見定めることができるようになります。

英文法とは、英文が正しく成立するための法則のことで、学習の観点から大きく2つに分類できます。  
1つは英文を読むときに常に念頭に置くべきもの、もう1つは項目が現れたときに対処すべきものです。  
前者は、品詞、文の要素、順序、接続、修飾・被修飾関係などの、文の構造にかかわるものです。  
後者は、例えば関係代名詞やto不定詞などの、個別の文法項目です。  
本書で扱うのは前者とします。ただし、その見定め方に則して、後者の項目についても説明を加えます。

\* \* \*

私たちがことばを使うとき、品詞や文の要素などの文法を意識することはありません。  
しかし、これらは確かに私たちのことばの根底にあって、意識下できちんと機能しています。  
私たちが目指すものは、最初のうちは文の構造や個別の英文法をいちいち確認していても、  
それを繰り返すことで、やがて意識下に追いやることです。

言語習得は、端的にいうと、勉強というよりスポーツです。  
ルールを学び、繰り返すことによってルールに則した動きを身につけ、その上で相手と対戦するのと同じように、  
文法を学び、繰り返すことによって文法に則した読み方を身につけ、その上で文章や会話に向き合います。

繰り返して練習することで、英語力は必ず、だれでも、向上します。少しずつでもわかるようになれば、  
きっと英語が好きになれるはずです。いちど、本気を出してがんばってみてください。

## 本書で学ぶ内容

本書の目標は、あらゆる英文の構造を正しく理解するための考え方をルールとして身につけることです。

これは、**英文を、文の要素と副詞の「意味のまとまり」で単純化できる**ということです。

具体的には、次の内容が理解できれば、基本的な英文の構造を正しく理解できることになります。

本書で身につけていく内容ですので、今はまだ、よくわからなくてもかまいません。

### 文の要素と副詞

- 英文の構造は、〈文の要素〉と〈副詞〉で説明できる。
- 文の要素とは、主語 (S)、述語動詞 (V)、目的語 (O)、補語 (C) のこと。
  - 主語とは、日本語の「～は、～が」にあたる、文の主体となる名詞のこと。
  - 述語動詞とは、日本語の「～する、～である」にあたる、主語の動作や存在を表す動詞のこと。
  - 目的語とは、日本語の「～を、～に」にあたる、主語の動作の目標 (目的) となる、主語とは異なる名詞のこと。
  - 補語とは、主語や目的語の内容を補う、名詞あるいは形容詞のこと。  
内容的に〈主語 = 補語〉あるいは〈目的語 = 補語〉が成立する。
- これらを文の要素と呼ぶのは、これらを正しい順序で並べることで文法的に正しい英文が成立するから。  
逆に、これらが欠けたり順序が違ったりすると、文法的に正しい英文や意味の通る英文は成立しない。
- 他方、副詞は文の要素ではない。なくても文法や文意は成立し、比較的自由な場所に置ける。

### 品詞

- 名詞は「人、もの、こと」を表し、動詞は名詞の動作や存在を表し、  
形容詞は必ず名詞を形容 (修飾) し、副詞は名詞以外のあらゆるものを修飾する。
- これら4つの品詞は、複数の語からなる「意味のまとまり」の、〈句〉や〈節〉の形をとることもある。
- 文の要素と副詞は、文の構造の「役割」としての品詞に分類できる。すなわち、上でも述べたが、  
主語と目的語は必ず名詞、述語動詞は必ず動詞、補語は名詞あるいは形容詞である。

### 句と節

- 句とは、〈主語 + 動詞 (SV)〉構造を中心とし、<sup>●●●</sup>1つの「意味のまとまり」のこと。
    - 複数の語で1つの名詞の意味となる名詞句、同じく1つの動詞の意味となる述語動詞 (句動詞を含む。\*動詞句とはいわない)、同じく形容詞句、副詞句などがある。
  - 節とは、SV 構造を中心とする、1つの「意味のまとまり」のこと。
    - 文の中心となる内容の〈主節〉と、主節に従う〈従属節〉に大別できる。  
※なお、従属節を持たない主節は、そのまま〈文〉といえる。
    - 従属節は、接続詞に導かれて、名詞節や副詞節になることが多い。
- ※その品詞的役割として、例えば副詞句や副詞節を慣用的にただ「副詞」と呼ぶこともある。

本書では、上記の内容を実際に英文で確認し、文の構造を理解するための考え方を学んでいきます。  
この考え方は基本的で最小限の原則ですが、「構造を単純化できる」ようになるには必須のものです。  
もちろん例外はあります。ただ、基本原則を身につけなければ、例外には気づくこともできません。  
まずはあせらず、その考え方とルールを徹底的に身につけることを心がけてください。

## もくじ

### 〈句〉と〈品詞〉

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| ルール 01：句は 2 語以上の意味のまとまり .....    | 6  |
| ルール 02：形容詞は必ず名詞を形容（修飾）する .....   | 8  |
| ルール 03：副詞は名詞以外のあらゆるものを修飾する ..... | 10 |
| ルール 04：〈前置詞＋名詞〉は副詞句と考える .....    | 12 |
| ルール 05：動詞は名詞の動作や存在を表す .....      | 14 |
| まとめ 1：品詞の性質 .....                | 16 |

### 〈文の要素〉と基本 5 文型

|  |    |
|--|----|
| ルール 06：英文は、文の要素を正しい順序で並べることで、文法的に正しく成立する .....       | 20 |
| ルール 07：主語は必ず名詞の意味のまとまり .....                         | 22 |
| ルール 08：（述語）動詞は主語の動作や存在を表す意味のまとまり .....               | 24 |
| ルール 09：目的語は、動詞の動作目標（目的）を表す名詞の意味のまとまり .....           | 26 |
| ルール 10：補語は、主語か目的語の内容を補う、名詞か形容詞の意味のまとまり .....         | 28 |
| ルール 11：副詞は文の要素ではない意味のまとまり .....                      | 30 |
| まとめ 2：文の要素と副詞の品詞的役割 .....                            | 31 |
| ルール 12：動詞は目的語を 2 つとることがある（第 3 文型と第 4 文型） .....       | 32 |
| ルール 13：動詞は目的語も補語もとらないことがある（第 1 文型） .....             | 34 |
| ルール 14：補語は主語や目的語の内容を後ろから補って説明する（第 2 文型と第 5 文型） ..... | 36 |
| まとめ 3：基本 5 文型 .....                                  | 38 |

### さまざまな句のかたち

|  |    |
|--|----|
| ルール 15：過去分詞（-ed 形）は受動を意味する形容詞のように働く .....  | 44 |
| ルール 16：現在分詞（-ing 形）は能動を意味する形容詞のように働く ..... | 46 |
| ルール 17：to 不定詞は名詞句と副詞句を作る .....             | 48 |
| ルール 18：動名詞は名詞句を作る .....                    | 50 |

## もくじ (つづき)

### 応用的な文型

|  |    |
|--|----|
| ルール 19: 目的語が意味上の主語になることがある               | 54 |
| ルール 20: 使役動詞の基本的な語法 (make O do)          | 56 |
| ルール 21: 使役動詞の応用的な語法 (be made to do)      | 58 |
| ルール 22: 知覚動詞の基本的な語法 (see O do)           | 60 |
| ルール 23: 知覚動詞の応用的な語法 (see O doing / done) | 62 |
| ルール 24: Yes / No 疑問文は 〈(助) 動詞→主語〉 の順序    | 64 |
| ルール 25: 疑問詞にも名詞と副詞がある                    | 66 |

### 〈節〉と〈品詞〉

|                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| ルール 26: 節は 〈主語 + 動詞〉 を中心とする意味のまとまりのこと | 70 |
| ルール 27: 名詞節は名詞の性質を、副詞節は副詞の性質を持つ       | 71 |
| ルール 28: 従位接続詞は従属節 (名詞節と副詞節) を導く       | 72 |
| <b>まとめ 4: 従位接続詞と従属節</b>               | 73 |
| ルール 29: 句読法 (コンマ・コロンのセミコロン・ダッシュ)      | 76 |
| ルール 30: 関係詞は文を名詞節に変換するときに使う記号         | 78 |
| ルール 31: 関係詞は先行詞の内容を含むことがある            | 86 |
| ルール 32: 間接疑問は名詞節                      | 88 |
| <b>まとめ 5: 名詞節</b>                     | 90 |
| ルール 33: 分詞の副詞用法                       | 92 |
| ルール 34: 付帯状況は、主節と異なる状況を付け足す副詞         | 94 |

### 構文

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| ルール 35: 主語や目的語を代用する代名詞 it | 98  |
| ルール 36: 強調構文              | 100 |

### 付録

|                      |     |
|----------------------|-----|
| さまざまな構文や語法 (1) ~ (4) | 102 |
| 比較表現の総まとめ            | 110 |
| 動詞のかたちの総まとめ          | 118 |

# 〈句〉と〈品詞〉

ルール 01：句は2語以上の意味のまとまり

ルール 02：形容詞は必ず名詞を形容（修飾）する

ルール 03：副詞は名詞以外のあらゆるものを修飾する

ルール 04：〈前置詞＋名詞〉は副詞句と考える

ルール 05：動詞は名詞の動作や存在を表す



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 〈語句〉とは、〈語〉と〈句〉を合わせた意味のことばです。

□ ひとつひとつの語を単語ともいいます。

□ 2 つ以上の語がつながって 1 つの意味のまとまりとなるものを句といいます<sup>\*1</sup>。

次の例文を見てください。

□ I have many friends. 「私にはたくさんの友人がいる。<sup>\*2</sup>」

□ 語は、1 つ 1 つの単語のことなので、この文の中には 4 つあります。

□ 句は、2 つ以上の語がつながって 1 つの意味のまとまりとなるものなので、この文の中には many friends 「たくさんの友人」の 1 つだけあります。

□ 【重要】英文は、語句から成り立っています。

英文を読むときには、意味のまとまりである〈句〉にとくに注意しましょう。

ほかにいくつか例文を見てください。

□ This meat is very tough. 「この肉はとても硬い。」

□ 句は、This meat 「この肉」と very tough 「とても硬い」の 2 つです。

□ My daughter studies before breakfast. 「私の娘は朝食前に勉強する。」

□ 句は、My daughter 「私の娘」と before breakfast 「朝食の前」の 2 つです。

□ My father gets up at nine every Sunday morning.

「私の父は毎週日曜日の朝は 9 時に起きる。」

□ 句は、My father 「私の父」、gets up 「起床する」、at nine 「9 時に」、every Sunday morning 「毎週日曜日の朝」の 4 つです。

□ 最後に、上の 4 つの例文を、和訳を念頭に置き、繰り返し音読して暗記してください。コツは、

□ 繰り返すうちに、ひといきで、全速力で読めるようにする。そのために、

□ 小さな「ツ」を使わず、伸ばす音「ー」を伸ばしすぎない

□ 単語のアクセント部分をとくに強く読んで、英文に強弱のリズムを与える —— ことです。

※実際の発音の目安を注に載せておきます<sup>\*3</sup>。ゴチック体のアクセントをとくに意識してください。

□ 【重要】以降に現れる例文についても、同じように、繰り返し音読することを徹底してください。

## 注

\*1：この定義では〈節〉のことも含まれるが、節についてはのちに触れる（ルール 26 以降を参照）。

\*2：本書では、例文には基本的に「和訳」を載せる。和訳や「意訳」とは、英文を「自然な日本語」になおしたものとす。一方、本書では「直訳」や「意味」ということばを使うことがあるが、これは「英文の構造を意識した内容」を表し、自然な日本語とは限らないものとする。この文の直訳は、例えば「私は多くの友人を持っている。」

などとなる。

\*3：I have many friends. [アイハヴメニフレンツ]

This meat is very tough. [デスマーテズヴェリタフ]

My daughter studies before breakfast.

[マイドータスタディズビフォブレイクファスト]

My father gets up at nine every Sunday morning.

[マイファダゲツアップアットナインネヴリサンディモーニング]

ルール 01：句は 2 語以上の意味のまとまり

演習 句の部分に下線を引き、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. This book is heavy.  
「  
」
2. This is a heavy book.  
「  
」
3. In America, school buses are yellow.  
「  
」
4. His favorite sport is baseball.  
「  
」
5. My school doesn't have a swimming pool.  
「  
」
6. I met a friend of mine in front of the station this morning.  
「  
」
7. My mother and I looked for her wallet for an hour last night.  
「  
」 (名詞 wallet 「財布」)

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. This book is heavy. 「この本は重い。」 ※ This book 「この本」が、2 語で 1 つの意味のまとまり (句)。
2. This is a heavy book. 「これは重い本だ。」 ※ a heavy book 「(1 冊の) 重い本」が句。
3. In America, school buses are yellow. 「アメリカでは、スクールバスは黄色い。」 ※ In America 「アメリカで」と school buses 「スクールバス (複数形)」が句。
4. His favorite sport is baseball. 「彼のお気に入りのスポーツは野球だ。」 ※ His favorite sport 「彼のお気に入りのスポーツ」が句。
5. My school doesn't have a swimming pool. 「私の学校には水泳プールがない。」 ※ My school 「私の学校」と doesn't have 「持っていない」、a swimming pool 「水泳プール」がそれぞれ句。
6. I met a friend of mine in front of the station this morning. 「今朝、駅前で、私は友達 (の 1 人) に会った。」 ※ a friend of mine 「私の友達 (の 1 人)」、in front of the station 「駅前で」、this morning 「今朝」が句。
7. My mother and I looked for her wallet for an hour last night. 「母と私は、昨夜 1 時間、彼女の財布を探した。」 ※ My mother and I 「(私の) 母と私」、looked for 「探した」、her wallet 「彼女 (母) の財布」、for an hour 「1 時間」、last night 「昨夜」が句。My mother も句だが、ここではより大きな 1 つの意味のまとまりとして、My mother and I も句と考えた。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_  
実施日 年 月 日

□  
/ 7



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 語句には〈品詞〉としての役割が割り振られます。

- 品詞とは、小さな意味では、語句の「性質」を表し、
- 大きな意味では、文の中で果たす「役割」を表すものです。

まず、2つの品詞、〈名詞〉と〈形容詞〉の関係を見ていきます。次の例を見てください。

□ beautiful flowers 「美しい花」

- これは文ではなく、句です。大文字で始まっていませんし、ピリオドなどもないからです。
- この句において、「beautiful は flowers を形容（修飾）している」といいます。
  - このときの単語 flowers を〈名詞〉<sup>\*1</sup>といいます。
  - 名詞とは、「人、もの、こと」を表すことばです。花は「もの」を表すので、名詞です。
  - また、このときの単語 beautiful を形容詞といいます。
  - 形容詞とは、名詞を形容（修飾）<sup>\*2</sup>することばです。これらは定義です。
- **【重要】名詞とは「人、もの、こと」を表す性質のことばです。**

**形容詞とは名詞を形容（修飾）する性質のことばです。**

それでは、次の例を見てください。

□ She grows beautiful flowers. 「彼女は美しい花を育てる。」

- これは、大文字で始まり、ピリオドで終わっているので〈文〉です。  
では、この文において、beautiful flowers 「美しい花」という句の品詞は何でしょうか。
- 正解は、「もの」を表すので名詞です。正確には〈名詞句〉といいます。
- つまり、単語で見ると beautiful は形容詞、flowers は名詞なのですが、この文においては、beautiful flowers という句が、1つの名詞の意味のまとまりになっているということです。
- **【重要】複数の語からなる1つの意味のまとまり（句）は、文の中で1つの品詞の役割を果たします。**

最後に、次の例を見てください。

□ Her flowers are beautiful. 「彼女の花は美しい。」

- これは、大文字で始まり、ピリオドで終わっているので、文です。  
では、この文において、形容詞 beautiful は何を形容（修飾）しているのでしょうか。
- 正解は、文頭にある Her flowers 「彼女の花」という名詞句です。意味を考えればわかりますね。  
この形容詞 beautiful は、名詞 Her flowers を後ろから「説明」して形容していると考えます。
- **【重要】形容詞は必ず名詞を形容（修飾）しますが、前から後ろからも形容（修飾）できます。**

## 注

\*1：名詞には、数えられる〈可算名詞〉と、数えられない〈不可算名詞〉がある。「花」は数えられるので可算。可算名詞が2つ以上（複数）のとき、原則として、名詞の語尾に -s/-es などを加える。これを〈複数形〉という。

\*2：「形容する」とは、「(名詞の) 形や容姿などを表す」という意味。形容詞は、日本語では、例えば「高い(山)、

長い(川)、重い(車)」など、主に「～い」で表される。一方、「修飾する」とは、もともとは「飾りつける」の意味だが、ことばの学習においては「あることばが別のことばに係っている」ことを意味する。つまり、「修飾する」とは「形容する」を含むことばで、形容詞以外の品詞でも使うことができる。

ルール 02：形容詞は必ず名詞を形容（修飾）する

演習 例を参考に、形容詞と、それが修飾する先の名詞を指摘し、さらに全体を和訳しなさい。

例 heavy books  
 「 重い本」

1. much water

「

2. a funny movie

「

3. something special

「

4. These movies are funny.

「

5. He has many difficult books.

「

6. This anime is popular around the world.

「

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. much → water 「たくさんの水」 ※形容詞 many 「たくさんの、数が多い」は数えられる名詞を修飾し、形容詞 much 「たくさんの、量が多い」は数えられない名詞を修飾する。many と much は対比して覚えておくとよい。
2. (a) funny → movie 「(1つの) 笑える映画」 ※形容詞 funny 「笑える」が、名詞 (a) movie 「(1つの) 映画」を形容（修飾）している。この a は、初めて話題になる 1つの可算名詞に使われるもの。名詞を修飾する点で形容詞ともいえるが、ふつうは冠詞（かんし）と呼ぶ。
3. something ← special 「何か特別なもの、特別な何か」 ※ something 「何か」はとても漠然とした名詞で、ふつう何らかの形で修飾して絞り込む必要がある。some- や any- や no- などで始まる語は、後ろから修飾するのがルール。例：somebody else 「だれか他の人」（※形容詞 else 「他の」が名詞 somebody を修飾している）

4. funny → These movies 「これらの映画は笑える。」 ※文になってはいるが、考え方は 2. と同じ。この文において、形容詞 funny は These movies を形容（修飾）することで「説明している」と考える。
5. many, difficult → books 「彼は多くの難しい本を持っている。」 ※ many も difficult も形容詞で、名詞 books を修飾している。1つの名詞を複数（2つ以上）の形容詞で修飾することもできる。
6. popular → This anime 「このアニメは世界中で人気がある。」 ※ 4. と同様、形容詞 popular 「人気がある」が、名詞 This anime 「このアニメ」を形容（修飾）することで説明している。なお、around the world はこの 3語で「世界中で」の意味だが、名詞を修飾していないので、形容詞（句）ではない（※これを副詞句というが、次のルール 03 で学ぶ）。

年 組 番

氏名

実施日

年

月

日



検印

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 形容詞は必ず名詞を形容（修飾）します。

ルール 02 では、

- 形容詞が名詞を形容（修飾）して名詞句となる場合と、
- 形容詞が名詞を説明する場合 を学びました。

では、名詞以外を修飾するものは何でしょうか。形容詞の復習も含めて、次の例を見てください。

- This meat is very tough. 「この肉はとても硬い。」

- これは文です。句は This meat と very tough の 2 つです。

- まず This meat の句について、This 「この」は meat 「肉」を修飾しています。

meat は「もの」を表すので名詞、This は名詞を修飾するので形容詞<sup>\*1</sup>と考えます。

また、This meat の句は、「この肉」という「もの」を表すので、名詞（句）<sup>\*2</sup>となります。

- 次に very tough の句について考えます。

- まず、tough の品詞は何でしょうか。

- この文において、tough 「硬い」は、This meat を形容（修飾）しています。

等号を使って表すと、This meat = (very) tough ということです。

このとき、名詞（句）を形容（修飾）して説明すると考えるので、tough は形容詞です。

- 例えば、tough meat 「硬い肉」を考えれば、tough が形容詞だとわかりやすいでしょう。

- **【重要】形容詞は、前から後ろからも、名詞を形容（修飾）したり説明したりできます。**

- では次に、very tough の、very の品詞は何でしょうか。

- この very 「とても」は、形容詞 tough 「硬い」を修飾していると考えます。

このときの very を〈副詞〉といいます。

- 簡潔にいうと、名詞（句）以外を修飾するものは、すべて副詞です。これは定義として、

- **【重要】副詞は、名詞（句）以外<sup>・</sup>のあらゆるものを修飾すると覚えておいてください。**

- very tough の句は、副詞 very が形容詞 tough を修飾していますが、

この句全体では「とても硬い」という意味の形容詞（句）になります。

- また、この句は、文全体から見れば、名詞（句）である This meat を、

説明することで形容（修飾）する役割を担っている、ということです。

最後にもう一度、形容詞と副詞の役割の違いをまとめましょう。しっかり覚えてください。

- **【重要】名詞を形容（修飾）するのは形容詞、名詞以外<sup>・</sup>を修飾するのはすべて副詞です。**

## 注

\*1：この this 「この」は、名詞を修飾するので形容詞といえる（ふつうは〈指示形容詞〉という）。例えば、This is my pen. 「これは私のペンです。」という文においては、This 「これ」は、これだけで「もの」を表しているのが名詞となる（〈指示代名詞〉という）。一方、This pen is cheap. 「このペンは安っぽい。」という文において、This

「この」は名詞 pen を修飾しているので形容詞（指示形容詞）となる。同じ this という語であっても、その役割によって、名詞にも形容詞にもなるのである。

\*2：複数の語からなる名詞は、正しくは名詞句だが、役割としての品詞を慣用的にただ「名詞」と呼ぶことも多い。他の品詞も同様である。

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 副詞とは「副（そ）えることば」、つまり、「文の主要な部分に付け足すことば」を意味します。  
もちろん、副詞が重要ではないということではありません。
- 副詞は名詞以外を修飾し、〈とき〉・〈場所〉・〈程度〉・〈頻度〉・〈理由〉・〈様子〉などを表します。  
具体的に例文で説明していきますので、副詞がどの部分を修飾しているかを確認してください。
- This meat is very tough. 「この肉はとても硬い。」
  - very 「とても」は形容詞 tough 「硬い」を修飾する副詞で、「硬い」の〈程度〉を表し、very tough 「とても硬い」の2語で1つの意味の形容詞（句）と考えます。
  - 【重要】ある語句がどの語句を修飾しているのかは、最小限の語句を直接つなげてみればわかります。  
上の例では、「とても」を形容詞「硬い」に直接つなげた「とても硬い」は、意味が通じるので、修飾関係にあると判断できます。一方、「とても」を名詞「この肉」に直接つなげても意味が通じませんから、修飾関係にはないと判断します。
- I skipped breakfast today. 「私は今日、朝食を抜いた。」
  - today 「今日」は〈とき〉を表す副詞です。では、どの部分を修飾しているのでしょうか？  
少し時間をかけて、考えてみてください・・・・・・・・
  - today 「今日」は、最小限の語句では、動詞 skipped 「抜いた」を修飾すると考えます。  
「今日」を「私」や「朝食」に直接つなげても意味が通じないからです\*1。
- She stayed home. 「彼女は家にいた。」
  - home 「家に、家で」は〈場所〉を表す副詞です。では、どの部分を修飾しているのでしょうか？
  - 「家に」は、動詞 stayed 「留まっていた」を修飾します。「家に留まる」と考えます。
- My sister eats soba noodles quietly. 「姉（妹）はそばを静かに食べる。」
  - quietly 「静かに」は〈様子〉を表す副詞です。
  - 「静かに食べる」から、動詞 eats 「食べる」を修飾しています。
- I did not sleep very well last night. 「昨夜はあまりよく眠れなかった。」
  - not 「～ない」、well 「よく」は〈程度〉を表す副詞で、それぞれ「眠らない」、「よく眠る」で意味が通じるので、動詞 sleep を修飾していると考えます。
  - very 「とても」は、ここでは副詞 well 「よく」を修飾し、〈程度〉を表すと考えます。  
副詞は名詞以外を修飾しますから、他の副詞を修飾することもできるのです。  
very well 「とてもよく」は、2語で1つの意味の副詞（句）で、動詞 sleep を修飾しています。
  - last night 「昨夜」は、上の today 「今日」と同様、ときを表す副詞（句）です。  
最小限の語句では、動詞 sleep 「眠る」を修飾していると考えます。

## 注

\*1：とくに〈とき〉や〈場所〉などを表す副詞は、動詞だけでなく、その副詞を除く他のすべての部分を修飾していると考えられることも多い。ただ、今の時点では「できるだけ最小限の修飾する語句を探す」意識を持つとよい。

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 副詞は名詞以外を修飾し、〈とき〉・〈場所〉・〈程度〉・〈頻度〉・〈理由〉・〈様子〉などを表します。もうすこし詳しく見ていきましょう。次の例を見てください。

□ My daughter studies before breakfast. 「私の娘は朝食前に勉強する。」

□ これは文です。句は My daughter 「私の娘」（名詞句）と、before breakfast 「朝食前」です。

□ before breakfast の句について考えましょう。

□ まず、breakfast 「朝食」の品詞は何でしょうか。

□ 答えは、名詞です。焼き魚やご飯などの「朝食べるもの」として考えれば「もの」ですし、「朝食を食べる行為」として考えれば「こと」です。ここでは後者があてはまるでしょう。

□ では次に、before 「～の前」の品詞は何でしょうか。

□ この品詞を〈前置詞〉<sup>\*1</sup>といいます。「名詞の前に置くことば」という意味で覚えましょう。

□ つまり、前置詞はそのあとに名詞を伴って、1つの意味のまとまり（句）を作ります。

□ このときにできる句は、原則として副詞句と考えます。

□ before breakfast 「朝食の前に」は、動詞 studies 「勉強する」を修飾し、

□ また、句全体として〈とき〉を表す副詞ということです。

□ **【重要】〈前置詞＋名詞〉の意味のまとまりは、原則として副詞句と考えます。**

いくつかの〈前置詞＋名詞〉の例を見て、解説を終わりにしましょう。

□ A tall tree stands in the park. 「1本の高い木がその公園の中に立っている。」

□ in the park 「公園の中」は、〈前置詞 in ＋名詞 the park〉からなる〈場所〉を表す副詞句で、動詞 stands 「立っている」を修飾していると考えます。

□ He goes to school by bicycle. 「彼は自転車で通学する。」

□ to school 「学校へ」は、〈前置詞 to ＋名詞 school〉からなる〈場所〉を表す副詞句、

by bicycle 「自転車で」は、〈前置詞 by ＋名詞 bicycle〉からなる〈手段〉を表す副詞句で、どちらも動詞 goes 「行く」を修飾していると考えます。

□ He bought a bunch of flowers for his mother. 「彼は母親に一束の花を買った。」

□ for his mother 「彼の母親のため」は、〈前置詞 for ＋名詞 his mother〉からなる、

〈理由〉を表す副詞句です。動詞 bought 「買った」を修飾していると考えます。

解説が続きました。演習で理解できたかどうかを確認してください。

## 注

\*1：前置詞には、before 「～の前」、after 「～の後」、in 「～の中」、for 「～のため」、to 「～に向けて」、on 「～に接触して」など数多くある。その多くはイメージでとらえられ、同じ前置詞であっても、使い方によって例えばときを表したり、場所を表したりする。例：I was born in 2005. 「私は2005年に生まれた。」（※前置詞 in はとき

を表し、副詞句 in 2005 は「2005年の中に」のイメージがある）I have my money in this box. 「この箱の中に私のお金が入っている。」（※前置詞 in は場所を表し、副詞句 in this box は「この箱の中に」のイメージがある）前置詞は共通するイメージでとらえ、訳を工夫するよう心がけるとよい。

演習 例を参考に、副詞と、それが修飾する先の部分を指摘し、さらに全体を和訳しなさい。

例 very tough  
 「とても硬い」

1. I saw a lot of carp in the river. (名詞 carp 「コイ (魚)」)  
 「  
 」
2. Thank you very much.  
 「  
 」
3. Bears run very fast.  
 「  
 」
4. Bears are very fast.  
 「  
 」
5. My grandfather goes to work once a week.  
 「  
 」
6. Now I am studying English here in Hawaii.  
 「  
 」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. in the river → saw 「私はその川でたくさんのコイを見た。」 ※ in the river 「その川の中に」は〈前置詞＋名詞〉の場所を表す副詞句で、動詞 saw (see の過去形) を修飾していると考え。a lot of 「たくさんの」は、名詞 carp 「コイ」を修飾しているので形容詞と考える (many と同じ意味)。なお、fish 「魚」や carp は〈単複同形〉といって、複数形でも -s / -es をつけないのが基本。
2. very much → Thank 「本当にありがとう。」 ※ 副詞 very は副詞 much 「たくさん」を修飾し、程度を表す very much 「とてもたくさん」の副詞句が、動詞 Thank 「感謝する」を修飾していると考え。
3. very fast → run 「クマはとても速く走る。」 ※ 2. と同様、very fast 「とても速く」は、副詞 very が副詞 fast 「速く」を修飾し、2語で程度を表す副詞句となる。
4. very → fast 「クマはとても速い。」 ※ この very fast は、副詞 very が形容詞 fast を修飾し、この句が主語 Bears を形容 (修飾) することで説明していると考え。つまり fast は、3. では副詞、4. では形容詞である。厳密な説明ではないが、be 動詞は形容詞を伴うことが多い。
5. to work, once a week → goes 「私の祖父は週に一度仕事に行く。」 ※ to work 「仕事へ」は〈前置詞＋名詞〉の形の、場所を表す副詞句。once a week 「週に一度」は頻度を表す副詞句。どちらも、動詞 goes を修飾している。
6. Now, here in Hawaii → am studying 「私は今、ここハワイで英語を勉強している。」 ※ Now 「今」はときを表す副詞、here in Hawaii は場所を表す副詞句で、どちらも動詞部分 am studying (現在進行形) を修飾していると考え。なお、here 「ここで」と in Hawaii 「ハワイで」を別の副詞 (句) と考えてもよい。

|   |   |   |       |
|---|---|---|-------|
| 年 | 組 | 番 | 氏名    |
|   |   |   | 実施日   |
|   |   |   | 年 月 日 |

6

検印

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 〈動詞〉は、その前に置かれた名詞<sup>\*1</sup>の動作や存在を表すことばです。
- 動詞は、〈be 動詞〉と、それ以外の〈一般動詞〉に大別されます。
- be 動詞 (am/is/are など) は存在の意味を持ち、
  - 日本語の「～ (の状態) である (在る)」の意味にあたります。
  - 一般動詞はとてたくさんあり、動作や存在、状態など、さまざまな語と意味があります。
  - 日本語の「～する」(動作)、「～である」(存在・状態) などの意味にあたります。
- 動詞が活用変化することで、現在と過去 (〈時制〉といいます) を表現できます。
- 一般動詞の意味によっては、ほかの名詞<sup>\*2</sup>に動作の目標 (目的) を移すことがあります。

説明が少し抽象的でわかりづらいので、具体的に見ていきましょう。まずは be 動詞の例です。

- This meat is very tender. 「この肉はとても柔らかい。」

- この is は be 動詞のひとつで、主語が単数のときに現在を表すものです。<sup>\*3</sup>  
be 動詞は存在を表すので、直訳すると「この肉はとても柔らかい状態で存在する。」となります。  
意識すると英文右のようになりますが、できるだけ This meat = very tender というイメージでとらえてください。

次に、一般動詞の例を見てみましょう。

- I practice piano every day. 「私は毎日ピアノを練習する。」

- この practice は「練習する」の意味の一般動詞です。現在形なので日常的な現在を表します。  
この動詞「練習する」は、I「私」という名詞 (代名詞) がおこなう動作で、  
piano「ピアノ」というほかの名詞に、動作の目標 (目的) が移っていると考えます。

- I practiced piano every day. 「私は毎日ピアノを練習した。」

- 動詞 practice を過去形 practiced にするだけで、文全体を過去の内容に変換できました。

学んだことをまとめて、解説を終わりにしましょう。動詞の基本を理解してください。

- 動詞には、be 動詞と一般動詞があります。
- be 動詞は「～ (の状態) である」(存在) を意味し、その数は限られています。
- 一般動詞には数多くの種類と意味があります。
- 動詞を活用変化させることで、文の時制を変えられます。
- 【重要】動詞は、名詞の動作や存在を表します。
- 【重要】一般動詞のなかには、ほかの名詞に動作の目標 (目的) を移すものがあります。

## 注

\*1：この名詞を〈主語〉といい、動詞は主語の動作や存在を表すものである (この説明における動詞は、厳密には〈述語動詞〉という)。主語については、のちに詳しく説明する (「ルール 07：主語は必ず名詞の意味のまとまり」を参照)。

\*2：この名詞を〈目的語〉といい、動詞の動作の目標 (目

的) となる名詞のことを指す。目的語についても、のちに詳しく説明する (「ルール 09：目的語は、動詞の動作目標 (目的) を表す名詞の意味のまとまり」を参照)。

\*3：本書の目標はあくまで文構造の理解なので、主語や時制に応じて使うべき be 動詞については解説しない。不明な人は中学校の教科書などを確認すること。

ルール 05：動詞は名詞の動作や存在を表す

演習 動詞の部分を下線で指摘し、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. My daughters are high school students.

「

」

2. I was sick in bed yesterday.

「

」

3. A week ago, I saw Mike at the party.

「

」

4. My grandmother drinks beer every night.

「

」

5. He slept for a few hours and went to work.

「

」

6. The helicopter took off from Haneda Airport.

「

」

7. We looked up at the night sky.

「

」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 1. are 「娘たちは高校生である。」 ※動詞は are (名詞が複数のときの、現在を表す be 動詞) で、続く名詞 (句) high school students 「高校生」としての存在を表す。
- 2. was 「私は昨日、病気で寝ていた。」 ※動詞は was (名詞が単数のときの、過去を表す be 動詞) で、続く形容詞 sick 「病気で」という状態の存在を表す。in bed 「ベッドで」と yesterday 「昨日」は、それぞれ場所とときを表す副詞。直訳は「昨日ベッドの中で病気でいた」。
- 3. saw 「1 週間前、私はそのパーティでマイクを見た (に会った)。」 ※ saw は一般動詞 see 「見える、会う」の過去形。これは I 「私」の動作だが、Mike 「マイク」が動作「会った」の目標。A week ago 「1 週間前」はとき、at the party 「パーティで」は場所を表す副詞句。
- 4. drinks 「祖母は毎晩ビールを飲む。」 ※ drinks は一般動詞 drink 「飲む」の三単現形 (名詞が三人称で単数で、一般動詞が現在を表すとき、動詞の語尾に -s / -es をつけ

- る形)。beer は動作 drinks の目標となる名詞。
- 5. slept, went 「彼は数時間眠って、仕事に行った。」 ※ slept は sleep 「眠る」の、went は go 「行く」の、それぞれ一般動詞の過去形。for a few hours 「数時間、2～3 時間」と to work 「仕事へ」はそれぞれ、〈前置詞 + 名詞〉の形の、ときと場所を表す副詞句。
- 6. took off 「そのヘリコプターは羽田空港から離陸した。」 ※ took off は take off 「離陸する」の意味の句動詞 (熟語) の過去形。from Haneda Airport 「羽田空港から」は〈前置詞 + 名詞〉の形の、場所を表す副詞句。
- 7. looked up (at) 「私たちは夜空を見上げた。」 ※ looked up は look up 「見上げる」の意味の、句動詞の過去形。at the night sky は〈前置詞 + 名詞〉の形の、場所を表す副詞句。ただし、looked up at の 3 語で 1 つの句動詞と考えてもよい。これらの考え方はルール 09 で改めて学ぶ。

年 組 番

氏名

実施日

年

月

日

□ / 7

検印

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- これまで、名詞と形容詞の関係、形容詞と副詞の違い、副詞句としての〈前置詞＋名詞〉、動詞のはたらきなど、それぞれの品詞の性質を見てきました。

ここでは、2つの文を品詞ごとに確認することで、品詞の重要な点についてまとめておきましょう。

- This tomato is very sweet. 「このトマトはとても甘い。」

- この文には、This tomato 「このトマト」と very sweet 「とても甘い」の2つの句があります。
- tomato は「もの」を表すので名詞、This は名詞 tomato を修飾するので形容詞です。
- This tomato は、句としては「もの」を表すので名詞（句）です。
- sweet は、This tomato を形容（修飾）していると考えます。名詞を修飾するので、形容詞です。
- very は、形容詞 sweet を修飾しています。名詞以外を修飾するので、副詞です。
- very sweet は、句としては名詞 This tomato を形容（修飾）するので、形容詞（句）です。
- is は be 動詞なので「存在する」の意味を表します。よって、この文を直訳すると、「このトマトはとても甘い状態で存在する。」となります。This tomato = very sweet です。

- I do my homework before dinner. 「私は夕食の前に宿題をする。」

- この文には、my homework 「私の宿題」と before dinner 「夕食の前」の2つの句があります。
- my homework は、この2語で「もの」を表すので、名詞（句）です。
- before dinner は、〈前置詞＋名詞〉の形の、ときを表す副詞（句）です。
  - 最小限のものとして、動詞 do 「する」を修飾すると考えます。
- do は一般動詞で、前にある名詞（代名詞）I 「私（は）」の動作を表し、
  - あとにある名詞 my homework を動作の目標としています。日常的な現在を表します。

「こんなにじっくり確認しなくても、意味はちゃんとわかるよ」という人は多いでしょう。

ただ、意味が理解できない複雑な文に出会ったとき、〈文の構造〉を単純化する必要が出てきます。

文の構造を単純化できるようになるためには、意味のまとまりごとの品詞の理解が不可欠なのです。

今はまだ、やさしい英文を使って、品詞の性質のルールをしっかりと覚えてください。

重要な点を箇条書きにまとめて、解説を終わりにしましょう。

- **【重要】句は、複数の語がつながってできる、「1つの意味のまとまり」のことです。**
  - 句を構成する「語」ごとにも品詞はありますが、句全体が表す1つの品詞の理解が大切です。
- **【重要】名詞は、「ひと、もの、こと」を表します。**
- **【重要】形容詞は、必ず名詞を形容（修飾）します。**
- **【重要】副詞は、名詞以外を修飾し、とき・場所・程度・頻度・理由・様子などを表します。**
  - 〈前置詞＋名詞〉は副詞句と考えます。
- **【重要】動詞は、名詞の動作や存在を表します。**
- **【重要】動詞のなかには、ほかの名詞を動作の目標（目的）にするものがあります。**

次回からは、いよいよ、文の構造の解説に入ります。その前に、演習で理解を確認してください。

まとめ 1：品詞の性質

演習 例を参考に、スラッシュ (/) を使って意味のまとまりにわけ、さらに英文全体を和訳しなさい。

例 I / do / my homework / before dinner.

「私は夕食の前に宿題をする。」

1. Jim has a small brown dog.

「

2. The classroom meeting lasted until four o'clock.

「

3. We stayed home during Golden Week.

「

4. This song was popular about ten years ago.

「

5. He waited for her for two hours in front of the station.

「

6. In the United States, school year begins in September.

「

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. Jim / has / a small brown dog. 「ジムは小さな茶色い犬を飼っている。」 ※名詞 / 動詞 / 名詞の順。動詞 has は一般動詞 have 「持っている」の三単現形（主語が三人称（I と you 以外）の単数（1つ）で、現在を表すときの動詞のかたち。ふつうは動詞に -s をつける）。
2. The classroom meeting / lasted / until four o'clock. 「学級会は4時まで続いた。」 ※名詞 / 動詞 / 副詞の順。動詞は last 「続く」の過去形。until four o'clock 「4時まで」は、〈前置詞 until + 名詞〉のかたちの、ときを表す副詞句。
3. We / stayed / home / during Golden Week. 「私たちはゴールデンウィークの間、家にいた。」 ※（代）名詞 / 動詞 / 副詞 / 副詞の順。home 「家に」は場所、during Golden Week 「ゴールデンウィークの間」は〈前置詞 during + 名詞〉のかたちの、ときを表す副詞句。
4. This song / was / popular / about ten years ago.

- 「この歌は約10年前に人気があった。」 ※名詞 / 動詞 / 形容詞 / 副詞の順。about ten years ago 「約10年前」はときを表す副詞句。
5. He / waited / for her / for two hours / in front of the station. 「彼は駅前で2時間、彼女を待った。」 ※名詞 / 動詞 / 副詞 / 副詞 / 副詞の順。for her, for two hours, in front of the station はどれも、〈前置詞 + 名詞〉のかたちの副詞句。in front of は、この句で前置詞の役割をするので、前置詞句という。なお、waited for を1つの句動詞（熟語）と考え、waited for / her （動詞 / 名詞）と解釈することもある。
6. In the United States, / school year / begins / in September. 「アメリカでは、学校年度は9月に始まる。」 ※副詞 / 名詞 / 動詞 / 副詞の順。In the United States 「アメリカでは」と in September 「9月に」は、それぞれ場所とときを表す副詞句。

年 組 番

氏名

実施日

年

月

日

|   |
|---|
| 6 |
|---|

検印

## コラム 睡眠の大切さ

「眠っているのは時間の無駄」と考える人がいるかもしれませんが、この考えはまったくの誤りです。眠っている間、脳はあなたが気づかないうちに心身の最適化（optimization）を行っており、とくに成長期にある学生にとって、これは代えがたい脳のはたらきだからです。

あなたが眠りに入ると、脳もまず深く眠ります。1～2時間ほどたつと脳は目覚めて、脳自体と全身をチェックしはじめます。これは、あなたの心とからだの健康をチェックしているということです。このときあなたはまだ眠ったままですが、眼球はまぶたを閉じたまま高速で動いています。この睡眠を「レム睡眠」（Rapid Eye Movement sleep）といい、脳があなたの心身を最適化している、あるいはその指示を出している状態です。1～2時間ほど活動すると脳は再び深く眠り、眼球運動も止まります。この睡眠を「ノンレム睡眠」（non-REM sleep）といいます。約8時間の睡眠で、脳はこうした活動と休止を4～5回程度、交互に繰り返します。

適切な睡眠をとった人が翌朝目覚めると、心とからだの疲れはしっかりととれています。また、わかりづらいかもしれませんが、昨日学んだことは、ある程度は脳に刻まれています。例えばあなたがバスケ部に所属する高校1年生なら、昨日練習したドリブルが今日は少しだけ上手になっています。昨日10個覚えた英単語のうち5個はしっかりと覚えています。こうした活動を日々繰り返すことで、脳は毎晩の睡眠で、スキルや知識を脳自体とあなたの心身に刻んでいきます。その習慣によって脳が最適化され、バスケ選手としてのあなた、英語を学ぶあなたを日々向上させていきます。

睡眠が不足するとどうなってしまうかは経験的にご存じでしょう。からだはだるく、頭ははっきりせず、あらゆる活動のパフォーマンスは著しく低下します。睡眠不足が日常的になると、心身に慢性的な変調をきたす可能性も高くなります。その結果、病的な肥満（obesity）になったり、さらにそれが糖尿病（diabetes）や高血圧（high blood pressure）を引き起こしたり、情緒不安定や双極性障害（かつては「そううつ病」と呼ばれました）の原因になったりします。こうした病気は、生活の質（QOL: quality of life）そのものに大きな悪影響を与えてしまいます。

睡眠は、毎晩あなたの心とからだを調べて正しく調整してくれる、かかりつけ医やコーチであると考えるべきでしょう。「全米睡眠財団」（National Sleep Foundation）の報告によると、十代の若者は少なくとも8.5時間の継続的な睡眠が必要ということです。

余談ですが、仮に成長を右肩上がりの線で表すとしたら、一次関数のような直線になることはありません。その過程で必ず踊り場（一時的に停滞する場所）ができます。日々同じように努力していても、あるいはよりいっそう努力しても、その成長が実感できない「伸び悩み」の期間は必ず現れるのです。そんなときは、自分自身を責めたり諦めたりするのではなく、それを自然なこととして受け止めましょう。あわてたりイライラしたりしても何もいいことはありません。立ち止まって考える、工夫する、だれかに相談する、他のすべきことをする、きっぱり休む——これらは、さらなる成長のために必要なことだと考えてください。心とからだの健康や成長に日々の睡眠が不可欠なのと同じように、長期間の成長にも適度な休息は必要です。

## 〈文の要素〉と基本 5 文型

ルール 06：英文は、文の要素を正しい順序で並べることで、文法的に正しく成立する

ルール 07：主語は必ず名詞の意味のまとまり

ルール 08：(述語) 動詞は主語の動作や存在を表す意味のまとまり

ルール 09：目的語は、動詞の動作目標(目的)を表す名詞の意味のまとまり

ルール 10：補語は、主語か目的語の内容を補う、名詞か形容詞の意味のまとまり

ルール 11：副詞は文の要素ではない意味のまとまり

ルール 12：動詞は目的語を 2 つとることがある(第 3 文型と第 4 文型)

ルール 13：動詞は目的語も補語もとらないことがある(第 1 文型)

ルール 14：補語は主語や目的語の内容を後ろから補って説明する(第 2 文型と第 5 文型)

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

**【注意】** この課から学ぶ〈文の要素〉は、あらゆる英文の構造に関係するものです。

最初は丸暗記でも構いませんが、必ず覚えてください。覚えればやがて理解できます。

これを覚えないと、ここから先の本書での学習は意味がありません。解説もわからなくなります。

- 日本語には「て、に、を、は」などの〈助詞〉があり、これを頼りに文構造が理解できます。  
例えば、「彼は、悪を、憎む。」という文は、「悪を、彼は、憎む。」としても正しい日本語であり、順序が変わっても、大きな意味の違いはありません。
- 一方、英語には、日本語の助詞にあたるものはありません。  
ですから、英文が正しく成立するためには、語句の順序がとても大切になるのです。
- **【重要】** 文の要素を正しい順序で並べることで、文法的に正しい英文が成立します。言い換えると、
- **【重要】** 文法的に正しい英文における語句の順序は、〈文の要素〉が単位となります。これは定義です。
- **【重要】** 文の要素には、主語・述語動詞・目的語・補語の4つがあります。

具体的に例文で確認しましょう。この課では、補語を除く3つの文の要素の性質を簡単に説明します。それぞれの文の要素は、次の課以降で改めて詳しく説明します。

- My daughter has many friends. 「私の娘は、たくさんの友人を、持っている。」  
※あえて直訳にしています。

- この文において、冒頭の名詞 My daughter 「私の娘」を〈主語〉といいます。  
主語とは、「文の主体となる語」という意味の、文の要素です。
- 主語に続く動詞 has を〈述語動詞〉といいます。単に〈動詞〉ということもあります。  
「主語の動作や存在を表す語」という意味の、文の要素です。
- 述語動詞に続く名詞 many friends を〈目的語〉といいます。  
「動詞の動作の目標（目的）となる語」という意味の、文の要素です。
- この例文は、3つの文の要素が正しい順序で並ぶことで、文法的に正しく、意味の通る英文が成立しています。
- 例えば、主語を動詞のあとに移動したり、目的語を動詞の前に移動したりすると、次の例のように、文法的に正しい英文にはなりません。  
\* Has my daughter many friends.\*<sup>1</sup> / \* My daughter many friends has.
- また、これら3つの文の要素のうち、どれかひとつでも欠けてしまうと、  
文法的に正しい英文にならず、その意味も通らなくなります。そんなのあたりまえだよ、と感じるかもしれませんが、大切な考え方ですから、しっかりと覚えておいてください。

以上をまとめて、解説を終わりにしましょう。

- **【重要】** 英文は、文の要素が欠けたり、その順序を変えたりすると、文法的に正しく成立しません。  
だから、「文の要素」と呼ぶのです。

## 注

\*1：本書で学習するのはアメリカ英語（米語）を基本とする。例えば、She has many friends. の疑問文は Does she have many friends? とするのが一般的。ただ、イギ

リス英語では Has she many friends? とする疑問文もある。上の例文はイギリス英語では疑問文の順序だが、疑問符 (?) がないので正しい英文（疑問文）ではない。

ルール 06：英文は、文の要素を正しい順序で並べることで、文法的に正しく成立する

演習 例を参考に、右に指示する文の要素に下線を引き、さらに英文全体を和訳しなさい。

- 例 My daughter has many friends. (主語)  
「私の娘には友達がたくさんいる。」
1. I ate a sandwich this morning. (目的語)  
「
2. My father and I cook Indian curry on Sundays. (主語)  
「
3. My sister takes the bus to school. (動詞)  
「
4. That girl with red hair is Nina. (主語)  
「
5. My mother waters the plants in the garden every morning. (目的語)  
「
6. We looked for the elephants in the zoo. (動詞)  
「

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. a sandwich 「私は今朝サンドイッチを食べた。」 ※目的語は、動詞に続く、動詞の動作目標となる名詞のこと。ここでは動詞「食べた」の目標が、名詞「サンドイッチ」ということ。なお、this morning はときを表す副詞(句)。
2. My father and I 「父と私は毎週日曜日にインドカレーを料理する。」 ※主語は文の主体となる名詞のこと。ここでは動詞「料理をする」主体は、「私の父と私」という複数の人物で、名詞である。なお、動詞 cook は「(加熱して)料理する」の意味。熱を通さないサラダを作るときには cook は使わない。Indian curry は動詞 cook の目的語で、on Sundays はときを表す副詞。
3. takes 「私の姉(妹)はバスで学校に行く。」 ※takes は主語 My sister の動作を表すが、この基本動詞はイメージの幅がとて広く、さまざまに訳せる。「取って自分のものにする」や「連れて行く」などのイメージを思い浮かべるとよい。ここでは「(乗り物に)乗る」の意味。the bus は目的語、to school は場所を表す副詞句。
4. That girl with red hair 「あの赤毛の少女はニーナだ。」 ※文の主体となる主語は、中心は That girl 「あの少女」だが、これを with red hair 「赤い髪を伴った」が修飾し、全体で1つの名詞の意味のまとまり「あの赤毛の少女」になっている。この全体を主語と考える。
5. the plants (in the garden) 「母は毎朝、庭の植物に水をやる。」 ※water(s) はここでは「水をやる」の意味の動詞(三単現形)で、その目標が名詞 the plants (in the garden) 「(庭の)植物」ということ。
6. looked (for) 「私たちは動物園でそのゾウを探した。」 ※looked for は2語で「探す」の意味の句動詞で、主語 We の動作を表すと考える。the elephants 「そのゾウ」はその動作の目標を表す目的語。in the zoo は場所を表す副詞句。ただし、for the elephants を〈前置詞+名詞〉のかたちの副詞句と考えてもよい。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_  
実施日 年 月 日

6



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

まず、文の要素の1つである〈主語〉について詳しく確認します。例文を見てください。

□ This book is expensive. 「この本は高価だ。」

- この文において、冒頭の This book を主語といいます。
- 主語 This book 「この本」は、ものを表すので名詞（句）です。
- This book は、主語として、文の主体を表しています。
- 【重要】主語は文の主体を表し、ピリオドで終わる文において、文の要素の先頭にきます。
- 【重要】主語は、必ず名詞の「意味のまとまり」です。

もうひとつ、例文を見ましょう。

□ The books in this box are expensive. 「この箱の中の本は高価だ。」

この文の主語は何でしょうか。

- 正解は、The books in this box 「この箱の中の本」です。
- この句は、ものを表しているのが、名詞（句）です。
- この句の中心となる名詞は The books です。  
in this box は、この The books の場所を示すことで、修飾していると考えます\*1。
- 【重要】主語が複数の語から成り立っているとき（つまり、句となっているとき）は、  
主語となる名詞の意味のまとまりと、そのまとまりの中心となる名詞を意識しましょう。

主語を見定めるための、とても簡単な方法があります。

- 主語の次にくる文の要素は〈(述語) 動詞〉です。  
上の2つの例では、be 動詞の is と are が (述語) 動詞です。
- このことを逆に言うと、(述語) 動詞の前にくる文の要素が主語ということになります。  
上の2つの例では、is と are の前の部分が主語ということです。したがって、
- 【重要】(述語) 動詞がわかれば、その前にある文の要素が主語だとわかります。
- 主語は必ず名詞ですが、名詞は、名詞句を含め、さまざまな形になります。  
名詞のさまざまな形を理解することが、文の構造を理解するためにはとても大切です。
- なお、文の要素における名詞には〈格〉というものがあり、主語になる名詞を〈主格〉といいます。
- 例えば、「私」を表すことばには、I 「私 (は)」や me 「私 (に/を)」がありますが、  
主語になる部分には、原則として I しか置けません。I は主格で、me は〈目的格〉\*2 だからです。

## 注

\*1：ルール 04 で、〈前置詞＋名詞〉は副詞句と考えると学んだ。副詞は名詞以外を修飾し、形容詞は名詞を形容（修飾）する。このことを考えると、in this box は直前の名詞 The books を修飾するので、形容詞句とも解釈できる。実際には、in this box は The books そのものを「形容」しているのではなく、場所を表しているのだが、The books を「修飾」という点では形容詞と考えてもかまわない。要は、名詞の意味のまとまりであること、

その名詞の意味のまとまりの中心となる名詞が何なのかを正しく理解できればよい。ただし、副詞と形容詞の働きはそれぞれしっかりと暗記しておくこと。

\*2：目的格についてはルール 09 で学ぶ。なお、主格と目的格の違いが見た目でわかるのは代名詞だけである。例えば複数形の一般名詞 books 「本」は、主語も目的語も形は変わらない。ただ、books を代名詞にすると、主語では they、目的語では them に区別する必要がある。

演習 主語の部分に下線を引き、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. This tunnel is about ten kilometers long. (名詞 tunnel 「トンネル」)  
「  
」
2. My little sister ate my pudding. (名詞 pudding 「プリン」)  
「  
」
3. One of my school friends visited me last night.  
「  
」
4. Last week, Hikaru and I went to Harajuku together. (副詞 together 「一緒に」)  
「  
」
5. Are these books expensive?  
「  
」
6. Who ate my pudding?  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. This tunnel 「このトンネルは約 10 キロの長さだ。」 ※動詞が is なので、その前の名詞 This tunnel が主語。なお、この文の構造は I am 16 years old. 「私は 16 歳だ。」と同じ。数字の表現 (about ten kilometers と 16 years) と、そのあとに続く形容詞 (long と old) とを見比べてみるとよい。
2. My little sister 「妹が私のプリンを食べた。」 ※動詞が ate 「食べた」(eat の過去形) なので、その前の名詞 My little sister 「私の妹」が主語。なお、my pudding は ate の目的語。
3. One of my school friends 「私の学校友達の 1 人が昨夜私を訪ねてきた。」 ※動詞が visited 「訪ねた」なので、その前の名詞 One of my school friends 「私の学校友達の 1 人」が主語で、その中心となる (代) 名詞は one 「1 人」。なお、one of ～ 「～の 1 つ」では、～の部分は複数名詞になるのが原則。
4. Hikaru and I 「先週、ヒカルと私は一緒に原宿に行った。」 ※文頭の Last week 「先週」はときを表す副詞。副詞は文の要素ではないから、置く場所も比較的自由である。文の動詞は went 「行った」(go の過去形) なので、その前の名詞である Hikaru and I 「ヒカルと私」が主語となる。なお、to Harajuku 「原宿へ」は場所、together 「一緒に」は様子を表す副詞。went to を句動詞と考えてもよいが、そのとき Harajuku は目的語になる。
5. these books 「これらの本は高価ですか？」 ※この文は be 動詞の Yes/No 疑問文で、平叙文 (ピリオドで終わる文) に変換すると These books are expensive. 「これらの本は高価である。」となる。平叙文を疑問文に変換しても文の要素は変わらないと考えるので、この疑問文の主語も these books 「これらの本」である。
6. Who 「だれが私のプリンを食べたのですか？」 ※この文は疑問詞 Who を伴う疑問文で、疑問詞を伴う疑問文を疑問詞疑問文という。疑問詞には主に 5W1H、つまり when 「いつ」、where 「どこ」、who 「だれ」、what 「なに」、why 「なぜ」、how 「どのように」などがあるが、もとの平叙文のどの部分を問うかで、どの疑問詞を使うかが変わってくる。この疑問詞疑問文を平叙文に直すと、例えば 2. の文のようになり、この疑問文では My little sister 「私の妹」の主語の部分を Who で問うていることがわかる。よって、この Who は主語「だれが」ということになる。主語は必ず名詞なので、この疑問詞も名詞 (疑問代名詞) というのである。疑問詞はルール 25 で確認する。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

文の要素の1つ〈(述語) 動詞〉について詳しく確認します。

- 品詞としての動詞は、名詞の動作や存在を表します (ルール 05 を確認してください)。
- 文の要素としての(述語) 動詞は、品詞としての動詞とは少し意識を変えて、主語の動作や存在を表す、「意味のまとまり」としての動詞を指すと考えます。

次の例文を見てください。

- I get up at seven. [私は7時に起きる。]

- この文における(述語) 動詞は get up 「起床する」の2語と考えます。
- この2語の厳密な品詞はそれぞれ、get が動詞、up が副詞なのですが、get up の〈句動詞〉<sup>\*1</sup>で1つの動詞の意味を持ち、主語 I の動作を表していることから、この意味のまとまりを(述語) 動詞とするのです。

上の文を少し変えた、次の例文を見てください。

- I will get up at five tomorrow. [明日は5時に起きよう。]

- この will は〈助動詞〉の1つです。助動詞とは「動詞の意味を補助することば」の意味です。助動詞 will は、ここでは動作に対する主語の〈意志〉を表し、will get up で「起きるつもりだ/起きよう」という意味のまとまりになります。よって、この文では will get up の3語を、1つの(述語) 動詞と考えます。

最後にもう1つ、例を挙げます。

- I did not get up at five this morning. [今朝は5時に起きなかった。]

- この did も助動詞の一種で、一般動詞の過去の疑問や否定を表すときに現れます。否定語 not 「～ではない」は程度を表す副詞です。この文では、not を含む、did not get up 「起きなかった」の4語を1つの意味のまとまりとしての(述語) 動詞と考えます。

この課では、(述語) 動詞についてただ1つのことを解説しました。

- **【重要】** 文の要素としての(述語) 動詞とは、主語の動作や状態を表す「意味のまとまり」のことで、助動詞や否定語 not なども(述語) 動詞に含めて考えます。

- 多くの場合、述語動詞は単に〈動詞〉あるいは〈動詞部分〉などと呼ばれます。
- 本書においては、以降とくに区別する必要がない限り、述語動詞を動詞と呼ぶことにします。

## 注

\*1：複数の語で1つの名詞を表すものを名詞句、複数の語で1つの副詞を表すものを副詞句と呼ぶが、複数の語で1つの動作を表す動詞は、\*動詞句とは呼ばず、〈句動詞〉と呼ぶ。句動詞は一種のイディオム(熟語)と考えてよい。

なお、助動詞や否定語を含む動詞の意味のまとまりは熟語ではなく、句動詞とも呼ばない。最初は少しややこしいかもしれないが、学んでいくうちに慣れるだろう。

ルール 08：(述語) 動詞は主語の動作や存在を表す意味のまとまり

演習 動詞の部分に下線を引き、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. All my family wear glasses.  
「  
」
2. My school is near the city office. (city office 「市役所」)  
「  
」
3. I cannot remember this actor's name. (名詞 actor 「役者、俳優」)  
「  
」
4. I am not five years old.  
「  
」
5. She is able to speak three languages.  
「  
」
6. I want to go to Tokyo Skytree.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. wear 「私の家族はみんな眼鏡をかけている。」 ※動詞 wear は「身につけている」という状態を表す動詞で、現在形なので日常的な習慣が表現される。主語は動詞の前の名詞 All my family、複数形の glasses 「眼鏡」(ガラスレンズが2つなので複数形になる)は動詞 wear の目標となる目的語。
2. is 「私の学校は市役所の近くにある。」 ※動詞は is 「存在する」。主語は動詞の前の名詞 My school 「私の学校」、near the city office 「市役所の近く」は、〈前置詞+名詞〉のかたちの、場所を表す副詞句。
3. cannot remember 「この俳優の名前が思い出せない。」 ※ cannot は助動詞 can 「～できる (可能)」の否定形で、remember 「覚えている」と合わせて1つの動詞の意味「思い出せない」になる。主語は I、this actor's name 「この俳優の名前」は、動詞 remember の目的語。
4. am (not) 「私は5歳ではない (子ども扱いたくないでほしい)。」 ※動詞は存在を表す be 動詞 am で、否定語の副詞 not は述語動詞の一部と考える。ただし、five years old 「5歳で」は形容詞 (句) で、not はこの形容詞を修飾しているとも考えることもできる。このあたりは解釈のしか
- たによるが、深く追究する必要はないだろう。
5. is able to speak 「彼女は3カ国語を話すことができる。」 ※現在における可能 (能力) を表す助動詞 can は be able to で言い換えられる。よって、3. と同様、この is able to speak 「話すことができる」で1つの動詞の意味のまとまりと考える。
6. want to go (to) 「東京スカイツリーに行きたい。」 ※構造的に細かく見れば、want 「欲する」が動詞、to go 「行くこと」が want の目的語 (〈to 不定詞の名詞的用法〉という) となる。ただし、want to do 「～したい」はとてもよく使われる句なので、want to go 「行きたい」で1つの動詞の意味でとらえた方が実用的。このとき、to Tokyo Skytree は副詞句となる。あるいは、よく使う go to も1つの句動詞として、述語動詞に含めてもよい。  
【重要】「意味のまとまり」のとらえ方は英語力によって異なる。英語力が高くなればなるほど、いちどに理解できる意味のまとまりは大きくなり、読む速度も速くなる。本書では初学者でも理解しやすい範囲で意味のまとまりを解説していくが、自分の判断で、より大きな意味のまとまりでの理解を目指すともいだろう。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6

検印

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

文の要素の1つ〈目的語〉について、最初にまとめておきます。

- 文には、その定義として主語と動詞が必要です。しかし、目的語が必要とは限りません。なぜなら、
- **【重要】動詞に続く文の要素（目的語か補語か、あるいはこないか）は、動詞の意味が決めるからです。**
- **【重要】目的語とは、動詞の直後に続く、動作の目標（目的）となる「名詞の意味のまとまり」です。**
- **【重要】目的語は、内容的に主語とイコールではありません。**

次の2つの例文と意味を見比べてください。

- I walked for an hour. — ① 「私は1時間歩いた。」
- I walked my dog for an hour. — ② 「私は1時間犬の散歩をした（犬を歩かせた）。」

- これら2つの英文の異なる部分は、名詞 my dog 「私の犬（を）」があるかないかだけです。
- for an hour 「1時間」は、〈前置詞＋名詞〉の形の、ときを表す副詞句です\*<sup>1</sup>。
- 動詞 walked は、①では「歩いた（過去形）」の意味で、直後に名詞を伴っていません。
- 一方、②では「歩かせた」の意味で、直後に歩かせた目標である名詞 my dog を伴っています。
  - このときの、動詞の動作の目標（目的）となる名詞を〈（動詞の）目的語〉といいます。
  - ここでの目的語 my dog は、当然、主語 I 「私（は）」とは内容が異なる名詞です。
- 同じ動詞であっても、その意味によって、目的語をとることととらないことがあります\*<sup>2</sup>。
  - ただし、その動詞そのもののイメージが変わるわけではありません。
- **【重要】動詞が目的語をとらないとき、その動詞を〈自動詞〉といいます。**  
「（目的語がなくても）動作が自ら完結するから」と覚えましょう。
- **【重要】動詞が目的語をとるとき、その動詞を〈他動詞〉といいます。**  
「動作が他の名詞（目的語）に移るから」と覚えましょう。

なお、動詞以外にも目的語をとる品詞があります。それは、前置詞です。次の例を見てください。

- My father looked for his car key. 「父は車のカギを探した。」
- この文では、動詞 looked の直後に名詞が続きません。よって、この looked は自動詞です。  
続く for his car key 「彼の車のカギを求めて」は〈前置詞＋名詞〉の副詞句です。  
この形の副詞句において、前置詞に続く名詞のことを〈前置詞の目的語〉といいます\*<sup>3</sup>。
- ところで、look for は2語で「探す」の意味の、1つの動詞（句動詞）と考えるのがふつうです。  
このとき his car key は、句動詞 looked for に続く主語とは異なる名詞、つまり句動詞の目的語と解釈することもできます。
- したがって、この文における his car key は、副詞句における前置詞 for の目的語、あるいは句動詞 looked for の目的語といえます。どちらに解釈しても、目的語ということです。

## 注

\*1：〈前置詞＋名詞〉の副詞句は「ルール 04」を参照。

\*2：walk は自動詞で「歩く」、他動詞で「歩かせる」の意味だが、とくに分けて覚える必要はない。「歩く」動作をイメージとしてとらえ、目的語をとるときには、それに影響を与える動作として、適した意味をあてはめればよい。

\*3：名詞には〈格〉があり、主語となる名詞を〈主格〉、目的語となる名詞を〈目的格〉という。例えば I 「私は」は主語の部分にくるので主格、目的語の部分にくるときは目的格 me 「私に」になる。for me の me は目的格の形なので、この me は前置詞 for の目的語ともいえる。

演習 動詞の目的語の部分に下線を引き、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. Japan has four seasons.  
「  
」
2. The gentleman took off his hat.  
「  
」
3. I found a strange door behind the bookshelf. (名詞 bookshelf 「本棚」)  
「  
」
4. We flew paper planes in the gym. (名詞 gym 「体育館」)  
「  
」
5. We flew from Osaka to Okinawa.  
「  
」
6. He needed to find food first.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. four seasons 「日本には四季がある。」 ※動詞の目的語は動詞 has に直接続く名詞（句）の four seasons 「四季」。直訳すると「日本は4つの季節を持っている。」だが、これは日本語として不自然。動詞 have 「持っている」のイメージから、目的語に応じて適切に訳し分けることが必要である。日本語として不自然な訳は、訳とは呼べない。
2. his hat 「その紳士は帽子を脱いだ。」 ※動詞は句動詞 take off 「身から外す」で、この動作の目標である続く名詞 his hat 「彼の（つばのある）帽子」が目的語。
3. a strange door 「本棚の後ろに見慣れないドアを見つけた。」 ※ a strange door 「(奇妙な) 見慣れないドア」は、動詞 found 「見つけた」の動作目標となる目的語。behind the bookshelf 「本棚の後ろに」は〈前置詞＋名詞〉の、場所を表す副詞句。
4. paper planes 「私たちは体育館で紙飛行機を飛ばした。」 ※動詞 flew は fly 「飛ぶ」の過去形だが、直後に名詞 paper planes 「紙飛行機」があることから、「飛ばす」の意味の他動詞になる。paper planes は「飛ばす」目標となる目的語。in the gym 「体育館の中で」は〈前置詞＋名詞〉の、場所を表す副詞句。
5. なし 「私たちは大阪から沖縄へ飛んだ（飛行機で行った）。」 ※動詞 flew の直後の from Osaka to Okinawa 「大阪から沖縄へ」は、〈前置詞＋名詞〉の副詞句が2つつながった形。よって、flew の直後に目的語となる名詞はなく、この動詞 flew は自動詞となる。
6. (to find) food 「彼はまず食べものを見つける必要があった。」 ※構造を細かく見れば、needed 「必要とした」が動詞、to find (food) 「(食べものを) 見つけること」が needed の目的語(〈to 不定詞の名詞的用法〉)。ただし、want to do 「～したい」と同様、need to do 「～する必要がある」もよく使われる句なので、need to find 「見つける必要がある」を1つの動詞の意味のまとめ、food をその目的語ととらえた方が実用的である。なお、first 「最初に」は順序を表す副詞で、文の動詞部分を修飾していると考えられる。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



ルール 10：補語は、主語か目的語の内容を補う、名詞か形容詞の意味のまとまり

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

4つの文の要素のうちの最後の1つ、〈補語〉について確認します。

□ 補語は、「名詞を補う語」の意味で、名詞か形容詞の「意味のまとまり」になります。

さっそく、例文で確認しましょう。

□ My mother is strict. 「私の母は厳しい。」

□ まず品詞を確認します。My mother 「私の母」は人を表す名詞（句）、is 「存在する」は動詞、strict 「厳しい」は、「厳しい母」のように名詞を形容するので、形容詞です。

□ この文の形容詞 strict は、名詞である主語 My mother を後ろから補って説明すると考えます。このときの形容詞を〈補語〉といいます。主語を補うので、とくに〈主格補語〉といいます。内容的に、My mother = strict が成立しています。

□ She is a strict mother. 「彼女は厳しい母親だ。」

□ この例文でも品詞を確認します。She 「彼女」は人を表す代名詞<sup>\*1</sup>、is 「存在する」は動詞です。a strict mother 「厳しい母親」は、不定冠詞<sup>\*2</sup> a 「1人の」と、形容詞 strict 「厳しい」が、名詞 mother を前から修飾していますが、この3語で1つの名詞（句）です。

□ この文の動詞のあとの名詞 a strict mother も、主語 She を後ろから補って説明すると考えます。つまり、この名詞も主格補語です。内容的に、She = a strict mother が成立しています。

以上から、補語について次のことがいえます。

□ 【重要】動詞の直後にくる形容詞か名詞が、主語を説明することで内容的に主語とイコールになるとき、その形容詞か名詞を主格補語といいます。

□ 【重要】be 動詞は、主格補語をとることが多い、代表的な動詞です。

ここで、目的語と主格補語がどう違うのか、その判別のしかたを確認します。

□ 動詞の直後に名詞がくるとき、その名詞は目的語と主格補語のどちらかの可能性があります。

□ 【重要】動詞の直後の名詞が、主語と内容的にイコールのとき、その名詞は主格補語です。

□ 【重要】動詞の直後の名詞が、主語と内容的にイコールではないとき、その名詞は目的語です。

では、最後にもう1つだけ、例文で目的語と補語の違いを確認して終わりにしましょう。

□ My school has strict rules. 「私の学校には厳しい規則がある。」

□ この strict rules 「厳しい規則」の文の要素は何でしょうか・・・

□ 正解は、一般動詞 has 「持っている」に続く名詞で、主語 My school と内容的にイコールではなく、また、「持っている」という動作の目標なので、目的語です。

## 注

\*1：代名詞については本書で詳しく扱わない。ルール 02 の注や教科書などを確認すること。

\*2：a/an は、数えられる名詞（可算名詞）1つが文脈の中で初めて現れるときに使う。例えば、I bought an apple yesterday. 「私は昨日リンゴを1個買った。」という文において、この an apple は文脈中に初めて現れた「1

つのリンゴ」である。しかし、例えばこの文に続けて、「私は今朝そのリンゴを食べた。」とするときには、I ate the apple this morning. のように the をつける必要がある。この the を「限定された」の意味で定冠詞といい、a/an を「限定されていない」の意味で不定冠詞という。冠詞とは「(名詞の前に) かんむりとして置くことば」の意味。

ルール 10：補語は、主語か目的語の内容を補う、名詞か形容詞の意味のまとまり

演習 下線部の動詞に続く文の要素を右の ( ) 内に答え、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. He was silent during the classroom meeting. ( )  
「  
」
2. You need to see a doctor. ( )  
「  
」
3. My brother became a science teacher. ( )  
「  
」
4. We kept quiet and ate dinner. ( )  
「  
」
5. My mother doesn't get angry over small things. ( )  
「  
」
6. The recipe of the sauce remains a secret. ( )  
「 (名詞 recipe 「レシピ、作り方」、名詞 sauce 「(醤油などの) ソース」、動詞 remain 「～のままである）」  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. (主格) 補語「学級会の間、彼は黙っていた。」  
※ silent 「静かにして、黙って」は形容詞で、これは主語の He と内容的にイコールと考える。よって、be 動詞 was に続く silent は、文の要素である補語としての形容詞。なお、during the classroom meeting 「学級会の間」は〈前置詞＋名詞〉の、ときを表す副詞句。副詞は文の要素ではない。
2. 目的語「あなたは医者に診てもらふ必要がある。」  
※ 動詞の意味のまとまり need to see 「会う必要がある」に続く a doctor 「医者」は名詞。このとき、a doctor は主語 You と内容的にイコールではなく、see 「会う」という動作の目標である。よって、a doctor は目的語。文の要素である目的語は必ず名詞。
3. (主格) 補語「私の兄(弟)は理科の先生になった。」  
※ 動詞 became 「なった」(become の過去形) に続く a science teacher 「理科(科学)の先生」は名詞で、主語 My brother と内容的にイコールである。よって、a science teacher は主格補語となる名詞。
4. (主格) 補語「私たちは静かにしたまま夕飯を食べた。」  
※ 動詞 kept 「保った」(keep の過去形) に続く quiet 「静

かな」は形容詞。これは主語 We と内容的にイコールとなるので、主格補語となる形容詞。なお、接続詞 and のあとの、動詞 ate 「食べた」(eat の過去形) に続く dinner 「夕食」は、主語の We とはイコールではない名詞なので、「食べる」動作の目標となる目的語。

5. (主格) 補語「母は小さなことに怒らない。」 ※ get angry の angry 「怒って」は形容詞。be 動詞が静的な「状態」を存在として表すのに対し、get は動的な「変化」を表す。例えば、He was angry. が「彼は怒っていた。」という状態を表すのに対し、He got angry. は「彼は怒った。」という状態の変化を表す。いずれにしても、この形容詞 angry は主語 My mother と内容的にイコールなので、主格補語となる形容詞である。言い換えれば、【重要】一般動詞を be 動詞に変えても、動詞に続く文の要素が主語と内容的にイコールになれば、その文の要素は補語といえる。
6. (主格) 補語「そのソースのレシピ(作り方)は秘密のままである。」 ※ 動詞 remain 「～のままである、残る」(ここは三単現形) に続く名詞 a secret 「秘密」は、主語 The recipe of the sauce 「そのソースのレシピ」と内容的にイコールである。よって、主格補語となる名詞。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_  
実施日 年 月 日

6



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

ここでは、副詞を文の要素と対比します。その前に文の要素について改めて確認しておきましょう。

- 文の要素とは、主語・(述語) 動詞・目的語・補語となる、意味のまとまりのことです。
- これらを品詞で見ると、主語と目的語は必ず名詞、補語は名詞か形容詞になります。
- これらが欠けることなく正しい順序で並ぶことで、文法的に正しく、意味の通る文が成立します。

- 副詞の「文における役割」について結論から言うと、**副詞は文の要素ではありません**。

この観点から、副詞の性質的な原則を次のように表すことができます。

- **【重要】文から副詞をなくしても、文法的に正しく、意味の通る文が成立します。**
- **【重要】一部の副詞は、おおよその目安はあっても、正しい順序というものはありません。**

言い換えると、一部の副詞は置き場所が比較的自由ということです。

また、副詞の品詞的な役割は次のようなものでした。ルール 03 と 04 を再確認してください。

- **【重要】副詞は、名詞以外のあらゆるものを修飾し、ときや場所、理由や頻度などを表します。**

では、例文を見て、副詞の「文における役割」を、文の要素と対比して確認してみましょう。

- I take a shower before dinner. 「私は夕食前にシャワーを浴びる。」

- まず、この文の文の要素を確認します。I は主語、take は動詞です。a shower は、主語と内容的にイコールではない名詞なので、目的語です。これらの語順は決まっています。
- before dinner 「夕食の前」は、〈前置詞＋名詞〉<sup>\*1</sup>のかたちの、ときを表す副詞句です。
- この文から副詞 before dinner をなくした I take a shower. 「私はシャワーを浴びる。」の文は、文法的に正しく成立し、意味も通じています。
- また、副詞 before dinner を文頭に移動した Before dinner, I take a shower. という文も、文法的に正しく、内容的にも、もとの文とほとんど変わりません。
- これら 2 つの特徴が、副詞が文の要素ではないことを表しています。

- I did not eat breakfast this morning. 「私は今朝は朝食を食べなかった。」

- この文の副詞は、not 「～ではない」と this morning 「今朝」の 2 つです。
- これらはどちらも、最小の部分として、動詞 eat を修飾していると考えます。  
これらをなくした I ate breakfast. 「私は朝食を食べた。」という文<sup>\*2</sup>は文法的に正しく成立します。
- この文で副詞 not の位置を変えることは、ふつうはしません。  
**修飾するものは、修飾されるものの直前に置くのが原則です。** わかりやすいからです。
- 一方、「その副詞以外の部分全体」を修飾するとも考えられる、ときや場所などを表す副詞は比較的自由に置くことができます。この文の this morning はときを表す副詞ですが、  
This morning, I did not eat breakfast. としても、上の文と意味はほとんど変わりません。

副詞はさまざまなものを修飾するぶん、性質も少しだけ複雑です。まずは上の原則を覚えてください。

## 注

\*1：〈前置詞＋名詞〉が副詞句になることについては「ルール 04」を参照。

\*2：もとの文の did は助動詞の一種で、一般動詞の過去

形の疑問文や否定文を表すときに現れる。この文では not を取ると肯定文（否定文でも疑問文でもない、ふつうの文）になるので、eat は過去形の ate になる。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

これまで、文の要素と副詞について見てきました。とても大切ですから、いったんまとめておきましょう。

- 【重要】 文の要素とは、主語・(述語) 動詞・目的語・補語のことです。
- 【重要】 文の要素を正しい順序で並べることで、文法的に正しく意味の通る英文が成立します。
- 【重要】 文には主語と動詞が必要ですが、動詞のあとにくる文の要素は、動詞の意味によって変わります。
- 【重要】 主語とは、文の主体を表す名詞の意味のまとまりのことです。
- 【重要】 (述語) 動詞とは、主語の動作や存在を表す、動詞の意味のまとまりのことです。
- 【重要】 目的語とは、主語の動作の目標となる、主語とは異なる名詞の意味のまとまりのことです。
- 【重要】 補語とは、主語(や目的語)の内容を補って説明する、名詞や形容詞の意味のまとまりのことです。
- 【重要】 副詞とは、名詞以外を修飾する意味のまとまりのことです。
- 【重要】 副詞は文の要素ではなく、なくても文法や文意が成立し、置き場所も比較的自由です。

少し視点を変えて、文の要素と副詞を品詞で表すと、英文は例えば次のようになります。



英文を品詞のまとまりで区切ると、とても単純な構造になるのがわかるでしょうか。

- どんなに複雑な英文も、名詞、動詞、形容詞の意味のまとまりで文法的に正しい英文が作られ、副詞の意味のまとまりが、名詞以外をさまざまな方法で修飾するのです。つまり、
- 【超重要】 これら4種類の品詞が、それぞれどのようなかたちで意味のまとまりになり、文の中でどのような役割(4つの文の要素と、副詞)を担っているのか、それを見定めることが、英文の構造を見定めることそのものなのです。

- 以降、文の要素とそれに対応する品詞と、副詞の、それぞれの意味のまとまりとその役割とを総称して、〈文構造〉と呼ぶことにします。
- ここで、文構造の観点から、品詞の定義を更新します。副詞は上のまとめを確認してください。
- 【重要】 名詞とは、文において、主語や目的語、補語となる意味のまとまりです。
- 【重要】 (述語) 動詞とは、文において、主語の動作や存在を表す意味のまとまりです。
- 【重要】 形容詞とは、文において、補語として、主語や目的語を形容(修飾)する意味のまとまりです。

このことを理解するために、簡単な例文で確認しておきましょう。

- I took five tests yesterday. 「私は昨日、5つのテストを受けた。」  
 ≙ □ Yesterday, I took five tests. 「昨日、私は5つのテストを受けた。」
- Yesterday was a busy day. 「昨日は忙しい一日だった。」

- 上の2文では、yesterday はときを表す副詞で、どちらの文でも副詞以外の部分を修飾しています。
- いちばん下の文では、Yesterday は主語です。したがって、名詞です。
- つまり、同じ語句であっても、文構造によって品詞は変わります。
- このことを逆に言うと、語句の品詞は文構造が決定するということです。

ここまでは、いわば定義の確認でした。次回から、文構造のさまざまな形を見ていきます。

凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補・形補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

基本的な文型は文の要素の並びで説明されます。文の要素を表すアルファベット記号を覚えてください。

- **【重要】主語 S (subject)、動詞 V (verb)、目的語 O (object)、補語 C (complement)**  
これらを並べて文型を表すことが多く、辞書で調べたり、指導を受けたりするときに役立ちます。
- **【重要】大切なのは、動詞のあとの文の要素とその品詞、それに副詞の、「意味のまとまり」の見定めです。**  
文型はあとづけ講釈のためのもので、覚えること自体にあまり意味はありません。それよりも、例えば「この部分が目的語 (名詞)」、「この部分が副詞」のように、「意味のまとまり」を意識してください。
- 英文には必ず主語 S と動詞 V があると考えますが、動詞のあとの構造は動詞の意味が決定します。
- 動詞のあとの文の要素に、目的語 O を 1 つだけとるものを第 3 文型 (SVO)、2 つとるものを第 4 文型 (SVOO) といいます。文の要素でない副詞は、有無も位置も文型には関係ありません。
- ㊦ I ㊧ bought ㊨ chocolate ㊪ this morning. 「私は今朝チョコレートを買った。」
  - この文では、動詞に続く chocolate は「もの」を表す名詞で、目的語と判断します。なぜなら、
  - 動詞 bought 「買った」動作の目標を表し、主語 I 「私は」とは内容的に異なるからです。
  - 動詞がその直後に目的語をとるとき、その動詞を〈他動詞〉<sup>\*1</sup> といいます。
  - この文のように目的語を 1 つとるとき、その文型を第 3 文型 (SVO) といいます。
- ㊦ I ㊧ bought ㊨ my sister ㊩ chocolate. 「私は妹にチョコレートを買ってやった。」
  - この文においては、動詞に続くのは my sister と chocolate の 2 つの名詞です。
  - どちらも主語とは内容的に異なる名詞なので目的語で、またお互いも内容的に異なっています。
  - このとき、「～を」にあたる chocolate を、「買う」直接的目標として〈直接目的語〉といいます。
  - 「～に」にあたる my sister を、「買う」間接的目標として〈間接目的語〉といいます。
  - この文のように、目的語を 2 つとるのが第 4 文型 (SVOO) です。
  - 2 つの目的語を区別するために、SVO<sub>1</sub>O<sub>2</sub> とすることもあります。

では、最後の例文です。ためしに構造を「解説」してみてください。もう、できるはずですよ。

- I bought chocolate for my sister. 「私は妹にチョコレートを買ってやった。」
  - この文の構造は、主語 S が I で、動詞 V が bought、そのあとに目的語 O の chocolate が続き、さらにそのあとに for my sister という〈前置詞＋名詞〉の副詞 (句) がきています。
  - 副詞は文の要素ではありませんから、この文は SVO (第 3 文型) ということになります。
  - 内容的には、中央の例文とほぼ同じ意味で、互いに言い換えることができます。<sup>\*2</sup>
- 「私は買ってやった。」という文が仮にあったとしたら、当然「何を」「誰に」が知りたくなります。  
動詞が目的語をとるかどうかは、ある程度、こうした日本語の感覚で判断できます。  
ただし、感覚とは異なる動詞もあり、その場合には例外として注意することになります。

## 注

\*1：他動詞については「ルール 09」を参照。

\*2：目的語が 2 つの SVO<sub>1</sub>O<sub>2</sub> の形をとる動詞には、他に give 「O<sub>1</sub> に O<sub>2</sub> を与える」、tell 「O<sub>1</sub> に O<sub>2</sub> を言う」、show 「O<sub>1</sub> に O<sub>2</sub> を見せる」、teach 「O<sub>1</sub> に O<sub>2</sub> を教える」、

make 「O<sub>1</sub> に O<sub>2</sub> を作ってやる」、call 「O<sub>1</sub> に O<sub>2</sub> を呼んでやる」などがある。これらは、間接目的語を for O<sub>1</sub> や to O<sub>1</sub> などの副詞句にすることで、SVO + 副詞句のかたちになり言い換えられることが多い。

演習 文構造を SV などの記号を使って右の ( ) 内に示し、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. We watched two movies the day before yesterday. ( )  
「  
」
2. The woman kindly called the boy a taxi. ( )  
「  
」
3. He changed trains at Tokyo Station. ( )  
「  
」
4. My father makes us coffee every morning. ( )  
「  
」
5. She gave many toys to her little brother. ( )  
「  
」
6. He gave her a sad smile. ( )  
「  
」
7. Will you show me the way to the city office? ( )  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. SVO 「私たちは一昨日、映画を 2 本見た。」 ※主語が We、動詞が watched、two movies は動作 watched の目標となる目的語。the day before yesterday 「(昨日の前の日→) 一昨日」はときを表す副詞句。
2. SVOO 「その女性は親切にもその少年にタクシーを呼んでやった。」 ※主語が The woman、動詞が called、the boy と a taxi は動作 called 「呼んでやった」目標となる、それぞれ間接目的語 (O<sub>1</sub>) と直接目的語 (O<sub>2</sub>)。kindly 「親切に」は、動詞 called を修飾する副詞。
3. SVO 「彼は東京駅で電車を乗り換えた。」 ※主語が He、動詞が changed、trains は動作 changed の目標となる目的語 (乗り換えるには電車が 2 つ必要なので、この意味では必ず複数形になる。〈相互複数〉という)。at Tokyo Station は場所を表す副詞。
4. SVOO 「父は毎朝私たちにコーヒーを入れてくれる。」 ※主語が My father、動詞が makes、us と coffee は動作 makes 「作ってやる」目標となる、それぞれ間接目的語と直接目的語。
5. SVO 「彼女は弟にたくさんのおもちゃをあげた。」 ※主語が She、動詞が gave、many toys は動作 gave の目標となる目的語。to her little brother は副詞句。この文は、She gave her little brother many toys. の SVOO の文に言い換えられる。
6. SVOO 「彼は彼女に悲しげな笑みを向けた。」 ※主語 He、動詞 gave、her と a sad smile は gave 「与えた」の目標となる、それぞれ間接目的語と直接目的語。give 「与える」動作をイメージでとらえ、適した訳をあてはめる。
7. SVOO 「市役所への道を教えてもらえませんか。」 ※SV などの文型表記は、ふつう疑問文であっても平叙文 (ピリオドで終わる文) の語順で表す。主語が you、動詞が will show、me と the way to the city office がそれぞれ、間接目的語と直接目的語。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

□  
/ 7



凡例： [主] 主語、[動] 動詞、[目] 目的語、[補・形] 補語となる形容詞、[副] 副詞 など

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 動詞 V のあとに目的語も補語も続かないとき、この文型を第 1 文型 (SV) といいます。

□ [主] Penguins [動] don't fly [副] in the sky. 「ペンギンは空を飛ばない。\*1」

□ この文の要素は、主語 S の Penguins、動詞 V の don't fly です。

in the sky は、〈前置詞＋名詞〉のかたちの、場所を表す副詞句です。

この動詞のあとには目的語も補語もありません。よって、この文は SV (第 1 文型) で、

この文の動詞 fly 「飛ぶ」は目的語をとらない自動詞です。

参考までに、同じ動詞を使った次の文を確認してください。

□ [主] My uncle [動] flies [目] a helicopter [副] for tourists.

「私の叔父は観光客のためにヘリコプターを飛ばす。」

□ この文の要素は、主語の My uncle、動詞の flies (fly の三単現形)、

目的語の a helicopter です。目的語を 1 つだけとるので SVO (第 3 文型) です。よって、

この文の動詞 fly 「飛ばす」は目的語をとる他動詞です。for tourists は理由を表す副詞です。

□ 【重要】 同じ動詞であっても、文の要素が続くかどうかは、その動詞の意味によって変わります。

上は一般動詞を使った例文でした。次は be 動詞を使った SV (第 1 文型) の文を確認します。

□ [主] The piano [動] is [副] in the basement. 「そのピアノは地下室にある。」

□ この文の要素は、主語の The piano と、動詞の is です。

in the basement は、〈前置詞＋名詞〉のかたちの、場所を表す副詞句です。

動詞のあとには目的語も補語もありませんから、SV (第 1 文型) です。

□ be 動詞は「存在する、～ (の状態) である (在る)」のイメージをもっておくとよいでしょう。

be 動詞のあとに続く部分が主語を説明するイメージ (主語 = be 動詞のあとに続く部分) です。

この文では、内容的に The piano = in the basement が成り立つということです。

最後にもう 1 つ、重要な SV の文を確認します。〈there is/are 構文〉と呼ばれるものです。

□ [副] There [動] is [主] a piano [副] in the basement. 「地下室に 1 台のピアノがある。」

□ この文の要素は、動詞の is と、実はそのあとに続く主語の a piano です。

冒頭の There は副詞です。漠然とした場所のイメージはありますが、具体的な意味はないと

考えてかまいません。in the basement は、前の文と同様、場所を表す副詞句です。

□ このように、主語の前に動詞がくる形を〈倒置〉といいます。\*2

□ この構文では、動詞のあとに目的語も補語もきませんから、例外的に SV と解釈します。

□ 【重要】 There is/are 構文は、主語 (名詞) の「存在」を文脈の中で初めて述べるときに使います。

この例でいうと、ある文脈において、初めてピアノの存在について述べられたということです。

## 注

\*1: 「楽器を弾く」など、能力に関係する内容を否定するときは、あえて cannot としなくても「～できない」のニュアンスを含むことが多い。ここは「飛ばない」と訳したが、

「飛ばない」というニュアンスを含むと考えてもよい。

\*2: 疑問文の多くも、主語の前に動詞 (助動詞) がくるものは倒置文である。

演習 文構造を SV などの記号を使って右の ( ) 内に示し、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. The tennis match ended ten minutes ago. ( )  
「  
」
2. There were so many customers in the supermarket. ( )  
「 (名詞 customer 「買い物客」 )  
」
3. He will leave Hakata for Kagoshima today. ( )  
「  
」
4. I live in Asahikawa, Hokkaido. ( )  
「  
」
5. The house key is on the wall near the front door. ( )  
「 (front door 「玄関ドア」 )  
」
6. There was not a single fish in the lake. ( )  
「  
」
7. Time flies. ( )  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. SV 「そのテニスの試合は 10 分前に終わった。」 ※主語は The tennis match、動詞は ended、ten minutes ago はときを表す副詞句。よって、文の要素は SV のみ (第 1 文型)。
2. SV 「スーパーマーケットにはとても多くの買い物客がいた。」 ※過去形の There is/are 構文なので、SV (第 1 文型)。主語は so many customers、動詞は were、in the supermarket は場所を表す副詞句。
3. SVO 「彼は今日、鹿児島に向けて博多を出発するつもりだ。」 ※主語は He、動詞は will leave 「去るだろう」、Hakata は leave の動作目標となる固有名詞と判断され、よって目的語。場所を表しても、副詞とは限らない。for Kagoshima と today はそれぞれ場所とときを表す副詞。よって、文の要素は SVO (第 3 文型)。
4. SV 「私は北海道の旭川で生活している。」 ※主語は I、動詞は live。in Asahikawa (, Hokkaido) は場所を表す副詞で、コンマに続く Hokkaido は旭川の場所を追加説明していると考ええる。
5. SV 「家のカギは玄関そばの壁に掛かっている。」 ※主語は The house key、動詞は is 「存在する」、on the wall near the front door 「玄関のそばの壁に」は場所を表す副詞句。前置詞 on は〈接触〉を表し、ここでは「壁に掛かっている」の意味になる。
6. SV 「その湖には 1 匹も魚がいなかった。」 ※ There is/are 構文なので SV (第 1 文型)。主語は a single fish 「1 匹の魚」で、形容詞 single 「1 つの」が強制的に修飾している。動詞は was not、in the lake は場所を表す副詞。
7. SV 「早いものですね (光陰矢のごとし。/ときは飛ぶように早く過ぎる)。」 ※ことわざ。直訳は「ときは飛ぶ。」だが、文脈によってさまざまに訳せるだろう。主語は Time、動詞は flies (三単現形) で、SV (第 1 文型)。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_  
実施日 年 月 日

□  
/ 7



ルール 14：補語は主語や目的語の内容を後ろから補って説明する

凡例： 主語、動詞、目的語、補・形補語となる形容詞、副詞 など

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 主語や目的語（どちらも必ず名詞）の内容を補って説明する文の要素を〈補語（C）〉といいます。
- 補語は名詞か形容詞です。ルール 10 で学んだ内容のおさらいとして、まず主格補語を確認しましょう。

□ 主 Ms. Sato 動 is 補・名 a math teacher. 「佐藤先生は数学の先生である。」\*1

- be 動詞 is に続く a math teacher 「1 人の数学の先生」は名詞の意味のまとまりで、主語である Ms. Sato 「佐藤先生」の内容を補って説明していると考えます。このとき、be 動詞に続く a math teacher を〈補語となる名詞〉といいます。

□ 主 Her math classes 動 are 補・形 funny. 「彼女の数学の授業は笑える。」

- この文の be 動詞 are に続く funny 「おかしい、笑える」は形容詞で、主語のまとまりである名詞 Her math classes 「彼女の数学の授業」の内容を補って説明していると考えます。このとき、be 動詞に続く funny を〈補語となる形容詞〉といいます。

□ どちらの文の場合も、内容的に〈主語＝補語（S＝C）〉が成立しています。

- つまり、Ms. Sato = a math teacher であり、Her math classes = funny であるということです。このような、主語を補う補語を〈主格補語〉といい、文構造は SVC（第 2 文型）で表します。

次は、目的語を補う補語である〈目的格補語〉の例です。

□ 主 Her classes 動 make 目 her students 補・形 excited.

「彼女の授業に生徒は活気づく（直訳：彼女の授業は彼女の生徒が活気づけられるようにする）。」

- この文の要素は、主語の Her classes、動詞の make、目的語の her students、そして、補語となる形容詞の excited 「(人が) 活気づけられる / 活気づく」です。
- この例文の動詞 make は、目的語 O と補語 C を続けて「O を C にする」という意味になり、内容的に〈目的語＝補語（O＝C）〉、つまり her students = excited が成立しています。このような、目的語の内容を補う補語が目的格補語で、文型は SVOC（第 5 文型）です。

以上から、補語の役割について、次のことがわかります。

□ 【重要】補語は、主語や目的語（必ず名詞）を後ろから内容を補って説明する、形容詞か名詞です。

最後に、be 動詞の疑問文を確認します。SVOC と同様、名詞の直後の補語に注目してください。

□ 動 Is 主 Ms. Sato 補・名 a math teacher? 「佐藤先生は数学の先生なのですか。」

□ 動 Are 主 her math classes 補・形 funny? 「彼女の数学の授業は笑えるのですか。」

- be 動詞の Yes/No 疑問文では、主語と補語が連続する VSC<sup>\*2</sup> の形になります。
- 【重要】形容詞は必ず名詞を形容（修飾）しますが、補語としては後ろから説明的に修飾します。<sup>\*3</sup>
- 【重要】主語や目的語のあとに補語となる名詞が続くとき、その境目を正しく区切ることが大切です。

注

\*1：Ms. は既婚、未婚にかかわらず女性につける敬称で、[míz | ミズ] と発音する。既婚女性は Mrs. [míziz | ミセズ]、未婚女性は Miss [mís | ミス] をつける。

\*2：どちらも文型表記では平叙文の SVC の順序でよい。

\*3：形容詞が名詞を前から形容（修飾）して 1 つの意味のまとまりになるとき、その句は名詞句になる。

ルール 14：補語は主語や目的語の内容を後ろから補って説明する

演習 文構造を SV などの記号を使って右の ( ) 内に示し、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. My father calls me Liz. ( )  
「  
」
2. I found the book boring. ( )  
「  
」
3. Please call him an ambulance. ( )  
「 (名詞 ambulance 「救急車」 )  
」
4. My wife keeps the kitchen clean. ( )  
「  
」
5. Are these bags yours? ( )  
「  
」
6. Your smile always makes me happy. ( )  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. SVOC 「父は私をリズと呼ぶ。」 ※主語は My father で、動詞は calls。動詞直後の代名詞 me と、それに続く固有名詞 Liz は内容的にイコールだから、me は目的語で Liz はその目的格補語となる。よって、SVOC (第 5 文型)。
2. SVOC 「その本はつまらなかった (直訳：私はその本がつまらないとわかった)。」 ※ the book は動詞に続く目的語で、boring 「つまらない」 はそれを説明する形容詞。the book = boring が成立するので SVOC となる。I find ～ 「私は～がわかる」 の訳は、主語の主観的なイメージから自然な日本語になるよう工夫するとよい。
3. SVOO 「彼に救急車を (1 台) 呼んでください。」 ※命令文なので主語 you は省略される。動詞は call。動詞直後の代名詞 him は動詞の目的語だが、続く名詞 an ambulance は him とはイコールにならない名詞なので、これも目的語。よって文構造は SVOO (第 4 文型) となる。ちなみに、仮に不定冠詞 an がなければ、「彼をアムビュランスと呼んでください。」の意味になってしまう。
4. SVOC 「妻は台所をきれいにしている。」 ※ the kitchen は keeps 「保つ」の目的語。続く形容詞 clean は、the kitchen と内容的にイコールになるので、目的格補語。よって、SVOC となる。
5. SVC 「これらのカバンはあなたのものですか？」 ※ be 動詞の Yes/No 疑問文で、平叙文では These bags are yours. となる。主語 These bags は所有代名詞 yours 「あなたのもの」と内容的にイコールなので、yours は補語となる名詞。よって、SVC (第 2 文型)。these bags と yours の、名詞が続く部分の境目を正しく区切れるよう意識すること。
6. SVOC 「あなたの笑顔を見るといつもうれしくなる (直訳：あなたの笑顔はいつも私を幸せにする)。」 ※主語は Your smile。動詞が (always) makes (always は動詞を修飾する、頻度を表す副詞)。代名詞 me は目的語で、続く形容詞 happy は me と内容がイコールとなる目的格補語。よって、SVOC となる。この文のように主語が無生物の場合、そのまま訳すと日本語に違和感が出ることが多い。違和感のある日本語は訳とは呼べないから、意味をイメージできちんと理解した上で、自然な日本語になるよう訳すこと。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



### まとめ3：基本5文型

凡例： ㊦主語、㊧動詞、㊨目的語、㊩補・形補語となる形容詞、㊪副詞 など

#### 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 英文は、4つの文の要素 (SVOC) と副詞に分解できます。
- 文の要素は、それぞれ「1つの意味のまとまり」で、品詞としての役割を持ちます。
  - 主語 S と目的語 O は必ず名詞、(述語) 動詞 V は動詞、補語 C は名詞か形容詞です。つまり、
  - **【重要】文の要素と対応する品詞、それに副詞の、「意味のまとまり」がわかれば、文構造がわかります。**
- 英文には主語と動詞が必要ですが、動詞のあとに何がくるかは、その動詞の意味によって変わります。  
例えば、「私は与えた」という〈主語→動詞〉がくれば、  
当然、「だれに?」「何を?」、あるいは「いつ?」「どこで?」などの疑問が浮かびます。  
これら疑問に該当する部分を、文の要素である目的語や補語、あるいは副詞で表現するわけです。
- 動詞に続く文の要素はその動詞の意味に依存し、文は主に5種類の基本文型に分類できます。  
5文型の文構造を、例文といっしょにまとめておきましょう。
  - **SV** (第1文型)：動詞は目的語も補語もとりません。副詞句を伴うことが多いです。
    - ㊦Her family ㊧goes ㊨to church ㊪every Sunday.  
「彼女の家族は毎週日曜日に教会に行く。」
  - **SVC** (第2文型)：動詞が補語をとり、内容的に S = C が成立します。be 動詞が典型です。
    - ㊦My father ㊧is ㊩補・名 an English teacher. 「私の父は英語の先生だ。」
    - ㊦My dog ㊧was ㊩補・形 \*very small. 「私の犬はとても小さかった。」  
\* 副詞 very が形容詞 small を修飾し、2語で形容詞句になります。
  - **SVO** (第3文型)：動詞が目的語を1つだけとります。内容的に S ≠ O になります。
    - ㊦My sister ㊧likes ㊨chocolate. 「私の姉(妹)はチョコレートが好きだ。」
  - **SV<sub>1</sub>O<sub>2</sub>** (第4文型)：動詞が目的語を2つとります。内容的に S ≠ O<sub>1</sub> ≠ O<sub>2</sub> になります。
    - ㊦I ㊧bought ㊨him ㊨coffee. 「私は彼にコーヒーを買ってやった。」
  - **SVOC** (第5文型)：動詞が目的語と補語をとります。内容的に O = C が成立します。
    - ㊦Tom ㊧painted ㊨the wall ㊩補・形 blue. 「トムは壁を青色に塗った。」
    - ㊦My friends ㊧call ㊨me ㊩補・名 Bill. 「友達は私をビルと呼ぶ。」
- 動詞の〈語法〉によっては、上の5つ以外の文型をとることもありますが、  
上記5つを基本として、その応用と考えることができます。  
なお、**語法とは語が特徴的に持つ法則のこと**です。文の法則を文法というのと同じです。
- 平叙文(ピリオドで終わる文)の語順は〈主語→動詞〉ですが、疑問文の語順は  
〈(助)動詞→主語〉となり、主語の前に(助)動詞が置かれます。この語順を〈倒置〉といいます。
- 疑問文の多くは倒置文ですが、平叙文にも倒置文があります。〈There is/are 構文〉が代表的です。
  - ㊪There ㊧were ㊦four dogs ㊨in the park ㊪then.  
「そのときその公園には4匹の犬がいた。」  
※この構文は、目的語 O も補語 C もとらないので、便宜的に SV (第1文型) と解釈します。

以降も必要に応じて上の記号を使います。文の要素と副詞の「意味のまとまり」を意識してください。

まとめ3：基本5文型

演習 例を参考に、文の要素と副詞で英文を切り分け、右にSVなどで文構造を示し、さらに英文全体を和訳しなさい。

- 例 I / painted / the wall / white / yesterday. ( SVOC )  
 「 私は昨日、壁を白色に塗った。 」
1. My sister loves mathematics. ( )  
 「 」
2. Dolphins don't sleep. ( )  
 「 」
3. These pants are too big for me. ( )  
 「 (名詞 pants 「ズボン」) 」
4. He studied hard last night. ( )  
 「 」
5. I found the pond very deep. ( )  
 「 」
6. There stood a tall man under the tree. ( )  
 「 」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. My sister / loves / mathematics. (SVO) 「私の姉(妹)は数学が大好きだ。」 ※第3文型の文。mathematicsは主語 My sister と内容が異なる名詞なので、目的語。
2. Dolphins / don't sleep. (SV) 「イルカは眠らない。」 ※第1文型の文。一般動詞の否定文や疑問文で現れる助動詞 do や否定語 not は動詞の意味に含めて考える。ちなみにイルカは左右の脳を交代で休められるらしい。
3. These pants / are / too big / for me. (SVC) 「このズボンは私には大きすぎる。」 ※第2文型の文。too 「～すぎる」は続く形容詞 big を修飾する副詞で、too big 「大きすぎる」で形容詞句となる。主語 These pants = too big なので、この形容詞句は主格補語。for me は〈前置詞＋名詞〉の副詞句。副詞は文の要素ではないのでSV等には含まない。なお、pants「ズボン」や glasses「眼鏡」は複数形で表すのが基本。
4. He / studied / hard / last night. (SV) 「彼は昨夜、ずいぶん勉強した。」 ※第1文型の文。hard 「一生懸命に」は動詞 studied 「勉強した」を修飾するので副詞、last night はときを表す副詞。
5. I / found / the pond / very deep. (SVOC) 「その池はとても深かった(直訳：私はその池がとても深いとわかった)。」 ※第5文型の文。目的語 the pond = very deep なので、very deep は目的格補語となる形容詞句。
6. There / stood / a tall man / under the tree. (SV) 「その木の下に背の高い男性が立っていた。」 ※ There is/are 構文の一種で、be 動詞が一般動詞(ここでは目的語をとらない自動詞)のかたち。第1文型の文で、倒置文。冒頭の There は副詞、stood は動詞、a tall man は主語、under the tree は副詞句となる。一般動詞 stood を be 動詞 was に代えても正しい文が成立することをヒントにするとよいだろう。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



まとめ3：基本5文型

演習 文の要素と副詞で英文を切り分け、右にSVなどで文構造を示し、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. She gave her brother her old school textbooks. ( )  
「  
」
2. Greg is on his way home. ( )  
「  
」
3. You don't have a choice. ( )  
「 (名詞 choice 「選択 (肢)」 )  
」
4. This morning, my dad cooked us good pancakes. ( )  
「  
」
5. Is she from Kyoto? ( )  
「  
」
6. Do you play any musical instruments? ( )  
「 (名詞 musical instrument 「楽器」 )  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. She / gave / her brother / her old school textbooks. (SVOO) 「彼女は自分の古い教科書を弟にあげた。」 ※第4文型の文。2つの目的語の境目がどこにあるのかを正しく見定めること。
2. Greg / is / on his way home (SV) 「グレッグは帰宅途中である。」 ※第1文型の文。on one's way to ~は「～への(行く)途中」を意味する<前置詞+名詞>の副詞句。to ~ 「～へ」も副詞句だが、homeはこの1語で「家へ」の意味の副詞なので、<sup>x</sup>to homeとはならない。つまり、例えば「家に帰りなさい。」はGo home. で、<sup>x</sup>Go to home. とは言わないのである。
3. You / don't have / a choice. (SVO) 「あなたに選択肢はない。」 ※第3文型の文。「やるしかない。/ どうしようもない。」などのニュアンスになる。don't haveは副詞の否定語 not を含む動詞の意味のまとまり(述語動詞)と判断する。a choiceはその動作の目標を表す目的語。
4. This morning, / my dad / cooked / us / good pancakes. (SVOO) 「今朝、父は私たちに美味しいパンケーキを焼いてくれた。」 ※第4文型の文。usは間接目的語、good pancakesは直接目的語。冒頭のThis morning はときを表す副詞句。
5. Is / she / from Kyoto? (SV) 「彼女は京都出身なのですか。」 ※第1文型の文。疑問文だが、文型は平叙文(ピリオドで終わる文)の文の要素の順で表せばよい。She / is / from Kyoto. で、from Kyotoは場所を表す副詞句だから、SVとなる。
6. Do / you / play / any / musical instruments? (SVO) 「あなたは何か楽器を演奏します(できます)か。」 ※第3文型の文。平叙文にすると、例えばYou / play / some musical instruments. 「あなたはいくつか楽器を演奏する(できる)。」となることから、SVOと判断する。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_  
実施日 年 月 日



まとめ3：基本5文型

演習 文の要素と副詞で英文を切り分け、右にSVなどで文構造を示し、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. What do you have in your bag? ( )  
「  
」
2. Who is that boy over there? ( )  
「  
」
3. Are you in any pain? ( )  
「 (名詞 pain 「痛み」)  
」
4. What makes you so happy? ( )  
「  
」
5. What time did you get up this morning? ( )  
「  
」
6. You are wasting your time. ( )  
「 (動詞 waste 「浪費する」)  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. What / do / you / have / in your bag? (SVO) 「あなたのバッグの中には何が入っていますか。」 ※第3文型の文。平叙文は例えば、You / have / your textbooks / in your bag. 「あなたのバッグの中には教科書が入っている。」となる。in your bag は場所を表す副詞句。文頭のWhat「何」は、平叙文での目的語の部分我问疑問詞。目的語は必ず名詞なので、このwhatを疑問代名詞という。
2. Who / is / that boy ( / ) over there? (SVC) 「むこうにいるあの男子はだれですか。」 ※第2文型の文。平叙文は例えば、That boy over there is Mike. 「むこうにいる男子はマイクだ。」ようになる。文頭のWho「だれ」は、平叙文での補語となる名詞の部分我问ている。よって、このwhoは疑問代名詞。over there「むこうに」は場所を表す副詞句だが、ここでは名詞that boyを修飾していると解釈しても、be動詞「存在する」を修飾していると解釈しても、どちらでもよい。
3. Are / you / in any pain? (SV) 「痛いところありますか (直訳：あなたは何かの痛みの中にいますか。)」 ※第1文型の文で、病院で医師に聞かれる定番の表現。in any pain は〈前置詞＋名詞〉の副詞句。このときのbe動詞は「存在する」の意味でとらえるとわかりやすい。
4. What / makes / you / so happy? (SVOC) 「何でそんなにうれしそうなのですか。(直訳：何があなたをそれほどうれしくしますか。)」 ※第5文型の文で、make O C「OをCにする」の語法。文頭のWhatは、動詞makesとの間に主語がないので、このWhat自体が主語。主語は必ず名詞なので、このWhatも疑問代名詞。
5. What time / did / you / get up / this morning? (SV) 「あなたは今朝何時に起床しましたか。」 ※第1文型の文。平叙文は例えば You got up at seven this morning. 「あなたは今朝、7時に起床した。」となり、at sevenも this morning もときを表す副詞句である。つまり、文頭のWhat timeは副詞句を表しており、疑問副詞when「いつ」をより具体的にしたものと考えればよい。
6. You / are wasting / your time. (SVO) 「あなたは自分の時間を無駄にしている。」 ※第3文型の文。〈be動詞＋現在分詞〉の現在進行形なので、be wastingを動詞の意味のまとまりと考える。your timeは動詞waste「浪費する」の目標となる目的語。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_  
実施日 年 月 日

6

検印

## コラム 勉強とは、「自分で勉強のしかたを考える」ことそのもの

「勉強」とは知識を身につけるための活動と定義できるでしょうが、私たちは往々にしてこの定義を見失います。学校や塾に行く、教科書を読む、きれいに授業のノートをとる——これらはどれも「勉強しているように感じる、あるいは見える」だけなのかもしれません。知識を身につけることは自分の脳に働きかけることです。自分の脳は自分だけのものですから、知識が身についたかどうかは自分にしかわかりません。つまり、本当に勉強しているかどうかを判断できるのは自分だけです。

ところで「知識」とは何でしょうか。狭い意味では「あなたが利用できる情報」といえるでしょう。勉強ははじめのうちがいちばん苦しいものですが、これは未知の「情報」(information)を次々と詰め込んでいく混沌の状態を脳が嫌うからです。しかし、この詰め込みを我慢して続けていくと、脳はやがて混沌のなかに体系を求め始めます。無秩序に覚えた情報を、関連づけられた「利用できる情報、知識」(intelligence)に、自然と整理しようとするのです。

10個の英単語を覚えようとしても、翌日にそのすべてを覚えているわけではありません。忘れてしまうのは良くも悪くも脳が持つふつうの性質です。ただ、受験生なら忘れたままにしておくわけにもいきませんし、ごまかしたところで不利益を被るのは自分自身ですから意味がありません。覚えた内容が知識として身についたかどうか、日ごろから脳に問いかけて確認することが必要です。

その確認のしかたも含めた具体的な勉強のしかたは、自分ひとりで試行錯誤することになります。勉強の本質は、知識を身につけるという目標を達成するための自分自身の工夫であり、自分に合う「勉強のしかたを考える」ことそのものです。これは、学校や塾で教えてもらえるものではありません。もちろん、先生や勉強のできる友だちに勉強のしかたをアドバイスしてもらうことはできます。しかし、経験や環境は人それぞれ違いますから、自分に合う勉強のしかたも人それぞれに違うのです。

1つだけ例を挙げましょう。あなたは日々、英単語帳を使って語い力を身につけようとしています。その見出し語の動詞 illustrate には「説明する」という訳語とその発音 [iləstreɪt | イラストゥレイト] が示されています。あなたはどのように覚えようとしませんか？ 書いてあることを繰り返して音読しようとするかもしれません。反復練習は言語習得において不可欠ですから、これは正しい活動です。ですが、まずは自分の脳と相談してみるのはどうでしょう。「イラストレーターと関係ある？ アクセントが冒頭の i の文字にあるのはなぜ？ explain も『説明する』で覚えたけど、違いは何だろう？」

すると、脳は次のように返事するかもしれません。「『イラストを使って説明する』イメージで覚えるのはどうだろう。『-ate で終わる語は、その2つ前の母音字にアクセント』のルールがあったね。explain は、exit 『外に出る』の ex- と、plain 『平野、単純な』に関係するのかもしれない。だとすると『外に出して単純にする』イメージの『説明する』かな。違いをもう少し調べてみたら？」

脳と相談しているように表現しましたが、要するに「未知のものをどう覚えるか、自分がいままでに獲得している知識を使ってまず考えてみた」という例です。はじめはうろ覚えやあやふやな知識でもかまいません。もとなる知識に確信がなければ改めて調べなおすことになるでしょう。それもまた、知識を確かにする助けになります。未知の情報を自分の知識体系の中に置けるかどうか能動的に工夫するだけで、記憶には残りやすくなるのです。また、この例においては、知識が増えれば増えるほど勉強の効率が向上していくことになります。

この例があなたの勉強のしかたに合うかどうかはわかりません。脳と相談しながら、いろいろと模索してみてください。工夫を能動的に試行錯誤すること自体は、決して無駄にはなりません。

## さまざまな句のかたち

ルール 15：過去分詞（-ed 形）は受動を意味する形容詞のように働く

ルール 16：現在分詞（-ing 形）は能動を意味する形容詞のように働く

ルール 17：to 不定詞は名詞句と副詞句を作る

ルール 18：動名詞は名詞句を作る



ルール 15：過去分詞 (-ed 形) は受動を意味する形容詞のように働く

凡例： 主語、動詞、目的語、補・形補語となる形容詞、副詞 など

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 能動態の文の目的語を主語に変換したときの動詞部分を〈**受動態 (受け身形)**〉といいます。

□ 主 The news 動 shocked 目 many people.

「そのニュースは多くの人々に衝撃を与えた。」

□ この文の一般動詞 shocked 「衝撃を与えた」は能動態 (過去形) です。

□ この動作の目標となる名詞、つまり目的語は、名詞 many people 「多くの人々」です。

この目的語を主語に変換して受動態にすると、次のような文になります。

□ 主 Many people 動 were shocked 副 by the news.

「多くの人々がそのニュースに衝撃を受けた (そのニュースによって衝撃を与えられた)。」

□ 受動態では、能動態の文での目的語が主語に、動詞が〈**be 動詞 + 過去分詞 (-ed 形)**〉に、主語が動作主を表す前置詞 by に導かれて〈前置詞 + 名詞〉の副詞句に変わります。

ここまでは中学校で学ぶ内容です。ここでちょっとだけ視点を変えてみます。

□ 受動態の動詞のまとまり〈be 動詞 + 過去分詞〉を、be 動詞と補語に分けて考えてみましょう。

□ 主 Many people 動 were 補・形 shocked 副 by the news. 「(訳は同じ)」

□ 補語は名詞か形容詞ですが、この shocked は「ひと、もの、こと」を表す名詞ではありません。

□ よって、この過去分詞 (-ed 形) は、受動の意味の形容詞「衝撃を受けて」と判断できます。

□ この形容詞 shocked は、Many people と内容的にイコールで (SVC)、

「多くの人々は、ショックを受けている状態で存在していた。」というイメージになります。

□ つまり、shocked は名詞 Many people を後ろから修飾して説明する主格補語ということです。<sup>\*1</sup>

□ さて、形容詞は名詞を形容 (修飾) して、名詞の意味のまとまり (名詞句) を作ります。

□ 名詞 Many people を形容詞 shocked で修飾して、2 通りの名詞句を作ることができます。

□ many shocked people 「衝撃を受けた多くの人々」

□ many people shocked by the news 「そのニュースに衝撃を受けた多くの人々」

□ この 2 つの例はどちらも文ではなく、名詞句、つまり名詞の意味の 1 つのまとまりです。

□ 過去分詞「1 語」で名詞を修飾するとき、過去分詞は名詞の**前**に置けます (上の名詞句)。

□ このときの形容詞は、**直後の名詞を絞り込む役割**です。これを〈**限定用法**〉といいます。

□ 過去分詞が導く「句」で名詞を修飾するときは名詞の**後ろ**に置きます (下の名詞句)。

□ このときの形容詞は、**直前の名詞を説明する役割**です。これを〈**叙述用法**〉といいます。

□ こうした、過去分詞の形容詞のような働きを〈**過去分詞の形容詞用法**〉といいます。

□ また、下の名詞句のように、後ろから名詞を修飾することを〈**後置修飾**〉といいます。

□ **【重要】** 過去分詞は、前からも後ろからも名詞を形容 (修飾) できます。

□ **【重要】** 過去分詞は、受動「～される」の意味の、形容詞の働きをすることがあります。

## 注

\*1：補語については「ルール 10」を参照。

ルール 15：過去分詞 (-ed 形) は受動を意味する形容詞のように働く

演習 和訳しなさい。

1. a surprised cat  
「  
」
2. a cat surprised by a big noise  
「  
」
3. boiled eggs  
「  
」
4. eggs boiled for seven minutes  
「  
」
5. a car made in England  
「  
」
6. people interested in social problems  
「  
」
7. She saw a cat surprised by a big noise.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「(驚かされたネコ→) 驚いたネコ」 ※文ではなく名詞句。surprise は「驚かせる」の意味の他動詞(目的語をとる)で、その目的語を過去分詞 surprised 「驚かされた、驚いた」で修飾できる。ここでは、過去分詞が前から名詞を修飾する限定用法。
2. 「大きな物音に驚いた(驚かされた)ネコ」 ※名詞句。ここでは名詞の中心となる a cat を、過去分詞 surprised 以降の句が後置修飾する叙述用法。
3. 「(ゆでられた卵→) ゆで卵」 ※名詞句。能動態での動詞 boil 「ゆでる」の目的語となる eggs 「卵」が、過去分詞 boiled 「ゆでられた」で限定修飾されていると考える。
4. 「7分間ゆでられた卵」 ※名詞句。過去分詞 boiled 以降が、名詞の中心となる eggs を後置修飾し、全体で1つの名詞句となっている。
5. 「イングランドで作られた車」 ※名詞句。形容詞用法の過去分詞 made 以降が、名詞 a car を後置修飾し、全体で1つの名詞句となっている。
6. 「社会問題に関心のある人々」 ※動詞 interest は「興味を持たせる」の意味の他動詞で、過去分詞 interested は「興味を持たせられる→(主に人が)興味を持っている」の意味の形容詞として扱うことができる。ここでは、interested が過去分詞の形容詞用法で、直前の名詞 people を後置修飾している。
7. 「彼女は大きな物音に驚くネコを見た。/ 彼女は大きな物音にネコが驚くのを見た。」 ※これは文で、文構造を2通りに解釈したので、2つの訳を用意した。1つは saw 「見た」の目的語を a cat を中心とする1つの名詞句としたもの(SVC)。もう1つは、a cat が目的語、surprised 以降の形容詞句を目的格補語(SVOC)としたもの(この語法を知覚動詞といい、ルール 23 で改めて扱う)。一般的には後者で解されるが、場面をイメージすれば、どちらもほぼ同じ意味であることがわかるだろう。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

□  
 / 7



ルール 16：現在分詞（-ing 形）は能動の進行を意味する形容詞のように働く

凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補・形補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- ある時点で動作が進行しつつあることを表現する動詞部分を〈進行形〉といい、  
〈be 動詞＋現在分詞（-ing 形）〉で表します。中学校で学ぶ内容を確認しましょう。
  - ㊦ Children ㊧ played ㊨ in the park. 「子どもたちはその公園で遊んだ。」
    - この文の played 「遊んだ」は単なる過去形で、過去のどの時点なのかを示していません。  
しかし、例えば「そのとき、子どもたちは何をしていましたか？」のように  
時点が示された質問に対しては、次のように答える必要があります。
  - ㊦ Children ㊧ were playing ㊨ in the park ㊪ then. 「そのとき、子どもたちはその公園で遊んでいた。」
    - 上の文の動詞 played が過去進行形 were playing 〈be 動詞＋現在分詞（-ing 形）〉に変わり、  
時点を表す副詞 then 「そのとき」が加わっています。
    - 進行形は、ある時点での動作の進行や目前の動作を、臨場感をもって表現します。
- ここで、前の課で説明した受動態〈be 動詞＋過去分詞〉と同様に、視点を変えてみます。
- 進行形の 1 つの動詞〈be 動詞＋現在分詞〉の形を、be 動詞と補語に分けて考えてみるのです。
  - ㊦ Children ㊧ were ㊩ playing ㊨ in the park ㊪ then. 「(訳は同じ)」
    - この現在分詞 playing は Children と内容的にイコール、  
つまり主格補語となる形容詞と考えられます。「遊んでいる状態で存在する」イメージです。
  - 上の名詞 Children を形容詞 playing で修飾して、2 通りの名詞句を作ることができます。
    - playing children 「遊んでいる子どもたち」
    - children playing in the park 「公園で遊んでいる子どもたち」
  - これらはどちらも文ではなく名詞句です。
  - 現在分詞「1 語」で名詞を修飾するとき、現在分詞は名詞の前に置けます（上の名詞句）。
    - このときの形容詞は直後の名詞を絞り込む限定用法です。
  - 現在分詞を含む「句」で名詞を修飾するときは、名詞の後ろに置きます（下の名詞句）。
    - このときの形容詞は直前の名詞を説明する叙述用法です。
  - こうした、現在分詞の形容詞のような働きを〈現在分詞の形容詞用法〉といいます。
  - 下の名詞句では、中心となる名詞 children を現在分詞 playing が後置修飾しています。
- 2 課を使って過去分詞と現在分詞の形容詞用法を見てきました。とくに次の内容に注意してください。
- 【重要】分詞の形容詞用法は、中心となる名詞を後置修飾して、名詞句を作ります。  
名詞を修飾するから、形容詞用法というのです。
  - 【重要】中心となる名詞とそれを後置修飾する「過去分詞」とは、「受動」関係が成り立ちます。
  - 【重要】中心となる名詞とそれを後置修飾する「現在分詞」とは、「能動」関係が成り立ちます。

## 注

ルール 16：現在分詞（-ing 形）は能動の進行を意味する形容詞のように働く

演習 和訳しなさい。（ ）内の語は正しいかたちを右に書き、さらに和訳しなさい。

1. a swimming frog  
「  
」
2. a frog swimming in the pond  
「  
」
3. a boy ( lose ) in the woods ( )  
「 (名詞 woods 「森」)  
」
4. a road leading to Machu Picchu  
「  
」
5. I threw old bread at carp ( swim ) in the river. ( )  
「  
」
6. There were many people ( leave ) behind in the building. ( )  
「  
」
7. There were many people ( leave ) for home. ( )  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「泳いでいるカエル」 ※文ではなく名詞句。動詞 swim 「泳ぐ」はふつう目的語をとらない自動詞で、その現在分詞 swimming は「泳いでいる」の意味の形容詞になれる。ここでは名詞を前から修飾する限定用法。
2. 「池で泳いでいるカエル」 ※名詞句。ここでは現在分詞 swimming とそれに続く副詞句が、名詞の中心となる a frog を後置修飾している（叙述用法）。
3. lost 「森（の中）で迷子になった少年」 ※名詞句。動詞 lose 「失う」は目的語をとる他動詞で、目的語を主語に変換する受動態では「失われる」の意味になる。「森の中で失われる（→迷子になる）少年」と判断し、過去分詞 lost を正しいかたちとする。losing にすると、その目的語がなく、何を失っているのかわからない。
4. 「マチュピチュに続く道」 ※名詞句。lead to ～は「～へ導く」の意味で、現在分詞 leading が直前の名詞 a road を後置修飾している。
5. swimming 「私は川で泳いでいるコイに古いパンを投げた。」 ※これは文。at carp 以降は〈前置詞＋名詞〉の副詞句で、carp 以降が名詞の意味のまとまりとなる。正しいかたちは swimming で、2. と同様に考えればよい。
6. left 「ビルの中にとり残された人がたくさんいた。」 ※ leave O behind は「O をあとに残す」の意味で、能動態の leave many people behind 「たくさんの人々をあとに残す」から、受動態の many people (were) left behind が成立すると考える。よって、正しいかたちは left となる。There is/are 構文の、主語である名詞 many people を後置修飾する、過去分詞の形容詞用法である。
7. leaving 「家に帰ろうとする多くの人々がいた。」 ※ leave (O) for ～ 「～へ向けて (O を) 発つ (去る)」から、many people (were) leaving for home 「多くの人々が帰ろうとしていた」の能動態の進行形が成立する。よって、正しいかたちは leaving となる。

|       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 年     | 組     | 番     | 氏名    |
| _____ | _____ | _____ | _____ |
| 実施日   |       |       | 年 月 日 |

|   |
|---|
| 7 |
|---|



ルール 17：to 不定詞は名詞句と副詞句を作る

凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補・形補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- <不定詞> は、「述語動詞に定まらないことば」という意味で覚えるとよいでしょう。
  - 動詞の機能を持ち、名詞、形容詞、副詞の役割を担いますが、それだけで述語動詞にはなりません。
  - 前置詞 to を伴う <to 不定詞> には、上に述べた3つの品詞的役割（用法）があります。
  - 日本語の意味では、<名詞的用法> は「～すること」、<形容詞的用法> は「～するための、～すべき」、<副詞的用法> は「～するために」が、それぞれあてはまります。例文で確認しましょう。
  
- ㊦ I ㊧ forgot ㊨ [to call ㊩ my father]. 「父に電話し忘れた。」
  - この文は直訳すると「私は父に電話することを忘れた。」の意味です。  
to call 以下「父に電話すること」は名詞句で、この句全体が動詞 forgot の目的語です。  
to 不定詞の to call は、他動詞の機能として、目的語 my father をとっています。
  - to 不定詞が名詞句を作る用法を <名詞的用法> といい、主語、目的語、補語になれます。
  - また、what や when などの疑問詞に to 不定詞を続けることで、名詞句を作ることができます。  
例えば、what to do 「何をすべきか/すべきこと」、how to lose weight 「どのようにやせるべきか/減量方法」、where to go 「どこに行くべきか/行くべき場所」などです。
  
- ㊦ You ㊧ have ㊨ a choice to make. 「あなたには選択肢がある。」
  - この文は直訳すると「あなたはとるべき選択を持っている。」の意味です。  
make a choice 「選択する」の表現から、動詞 make の目的語 a choice を意味の中心とした、a choice to make 「とるべき選択」という名詞句ができるのですが、  
このときの to 不定詞 to make は、直前の名詞 a choice を修飾していると考えます。  
名詞を修飾するのは必ず形容詞ですから、この to 不定詞を <形容詞的用法> といいます。
  - 形容詞は名詞を修飾し、名詞を中心とする名詞句を作ります。ここでは、to make が a choice を後置修飾することで名詞句を作り、その全体が動詞 have の目的語になっています。
  
- ㊦ He ㊧ worked ㊨ hard ㊩ to live. 「彼は生きる（生活する）ために懸命に働いた。」
  - to 不定詞の to live は、「生きるために働く」から、動詞 worked を修飾していると考えます。  
名詞以外を修飾するのは副詞ですから、この to 不定詞を <副詞的用法> といいます。
  
- to 不定詞の to は「～に向かって」というイメージを持つ前置詞です。  
前置詞は「名詞の前に置くことば」\*1 ですから、本来 to には名詞が続かななくてはならないのですが、例外的に動詞の原形が続くことで、3種類の品詞の意味のまとまり（句）になるのです。
- 前置詞 to のイメージが消えてなくなるわけではありません。上の3つの例文の不定詞にはそれぞれ、「父に電話することに向かう」、「選択することに向かう」、「生きる（生活する）ことに向かう」という、「～する」動作へ向かうイメージが残っています。
- こうしたイメージを <未来志向> など呼びます。用語はさておき、to 不定詞が現れたときには、to 不定詞が共通して持つ「動作へ向かう」イメージを思い浮かべるとよいでしょう。

注

\*1：前置詞については「ルール 04」の脚注を参照。

演習 下線部全体の品詞を右に書き、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. To teach is much more difficult than to learn. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
2. Do you have anything to say? ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
3. He hurried to the station to catch the last train. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
4. She has many friends to travel with. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
5. I decided not to play video games on weekends. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
6. I'm very glad to see you again. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
7. She grew up to be a professional tennis player. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 名詞「教えることは学ぶことよりもはるかに難しい。」  
※ To teach は「教えること」の意味で、文の主語になっている。主語は必ず名詞。much は比較級を強調する「はるかに」の意味の副詞。
2. 形容詞「何か言うことはありますか。」 ※ anything は、say something 「何かを言う」の動詞 say の目的語 something が、疑問文によって anything に変わったもの。つまり、to say は名詞 anything を後置修飾する形容詞と判断する。anything to say は動詞 have の目的語。
3. 副詞「終電を捕まえるために彼は駅に急いだ。」  
※ to catch the last train はここでは「終電を捕まえるために」という理由を表す副詞句。動詞 hurried だけでなく、下線以外の部分全体を修飾しているとも考えてもよい。To catch the last train, he hurried ~. のように文頭に持ってきても、文意はほとんど変わらない。
4. 形容詞「彼女には一緒に旅をする友達がたくさんいる。」  
※ travel with friends 「友達と一緒に旅をする」という表現から、friends to travel with 「一緒に旅をする友達」という名詞句ができる。つまり to travel with は直前の名詞 friends を後置修飾する形容詞である。
5. 名詞「私は週末はテレビゲームをしないことに決めた。」  
※ 下線部は動詞 decide 「決定する」の目的語となる内容で、目的語は必ず名詞。なお、to 不定詞を否定するときには、to の前に否定語 not を置くのが原則。
6. 副詞「あなたにまた会えて、とてもうれしいです。」  
※ 感情を表す形容詞に to 不定詞を続けることで、その感情の原因を表すことができる。この to 不定詞はその感情を表す形容詞を修飾するものとして、副詞的用法と解釈する。この副詞句は文頭などに移動できない。
7. 副詞「彼女は大きくなってプロテニス選手になった。」  
※ この下線部は、下線部以外の She grew up 「彼女は成長した」の部分で、具体的な内容を述べることで修飾していると考えられる。よって副詞的用法で、とくに〈結果用法〉と呼ばれる。「成長して、プロテニス選手になることに向かう」という、前置詞 to のイメージを理解しやすい用法である。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_  
実施日 年 月 日

7



ルール 18：動名詞は名詞句を作る

凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補・形 補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 〈動名詞〉は、「動詞の機能を持つ名詞」という意味です。
  - 現在分詞と同じく、動詞の〈-ing 形〉で表します。
  - 動詞の機能を持つので目的語や補語をとることができ、全体で名詞句を作ります。
  - 全体が名詞句なので、その句は主語や目的語、補語になることができます。
  - 日本語の意味では「～すること」で覚えておけばよいでしょう。例文を確認します。
  
- ㊦ I ㊧ enjoyed ㊨ [having ㊩ lunch ㊪ with her].
 

「彼女と一緒に昼食をとって楽しかった。」

  - この文は直訳すると「私は彼女と一緒に昼食をとることを楽しんだ。」の意味です。  
have lunch 「昼食をとる」という動作が、動詞 have を動名詞 having にすることで、「昼食をとること」という意味の名詞句になっています。  
この名詞句全体は動詞 enjoyed の目的語です。
  - 【重要】動詞 enjoy は、to 不定詞（名詞的用法）を目的語にとることができません。  
動詞のなかには、目的語に準動詞<sup>\*1</sup>をとるとき、to 不定詞しかとらないもの、  
動名詞しかとらないもの、to 不定詞と動名詞では意味が変わるもの、などがあります。
  
- ㊦ My parents ㊧ insisted on ㊨ [my not going ㊩ to a private school].
 

「両親は私が私立学校に行かないよう言い張った。」

  - この文は直訳すると「両親は私の、私立学校に行かないことを強く主張した。」の意味です。  
句動詞 insist on ～ 「～を言い張る / 強く主張する」<sup>\*2</sup>の目的語が、  
動名詞 going が導く名詞句になっています。
  - 動名詞の意味上の主語を表すときには、（代）名詞の所有格を使うのが基本です。  
この文では「私の私立学校に行かないこと」なので代名詞の所有格 my が使われていますが、  
例えばあなたの両親が「ケンが公立学校に行かなくてはいけない。」と言ったとき、理論的には  
My parents insisted on Ken's going to a public school. と表現することになります。
  - 動名詞を否定するとき、not などの否定語は動名詞の直前に置くのが基本です。
  
- ㊦ I ㊧ spent ㊨ 20 hours ㊩ [writing ㊪ the report].
 

「私はそのレポートを書くのに 20 時間かけた。」

  - spend O on ～は「～に O を費やす」の意味で、  
～の部分には前置詞 on の目的語となる名詞がきて、〈前置詞 + 名詞〉の副詞句になります。  
よって、～の部分に〈-ing 形〉がくるとき、これは動名詞と解釈されます。  
ただし、このときの前置詞 on は省略されますから、  
spend O doing 「～するのに O（お金や時間）を費やす」で覚えてしまう方が実用的です。

注

\*1：動詞の機能を持つが述語動詞にはなれないものを準動詞という。具体的には、不定詞（名詞・形容詞・副詞）、動名詞（名詞）、分詞（形容詞・副詞）のことを指す。

\*2：insist on ～については、～の部分は句動詞 insist on の目的語としてとらえてもよいし、on ～の〈前置詞 + 名詞〉の副詞句の、前置詞 on の目的語としてとらえてもよい。

ルール 18：動名詞は名詞句を作る

演習 和訳しなさい。

1. Seeing is believing.  
「  
」
2. This machine suddenly stopped working. (副詞 suddenly 「突然に」)  
「  
」
3. We went swimming in the river.  
「  
」
4. Don't waste your time doing nothing.  
「  
」
5. I have trouble speaking in public. (副詞句 in public 「公衆の前で」)  
「  
」
6. This bathtub needs repairing.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「見ることは信じることである（百聞は一見にしかず）。」 ※ことわざ。主語と補語のどちらも動名詞。
2. 「この機械が突然動かなくなった。」 ※動詞 stop 「止める」は to 不定詞を目的語にとることができない (to 不定詞が続くときは副詞的用法「～するために」になる)。stop doing 「～することを止める」で覚えておこう。
3. 「私たちは川で泳ぎに行った。」 ※動詞 go に -ing 形を続けることで「～しに行く」を表現できる。go shopping / fishing / dancing 「買い物をしに / 釣りをしに / 踊りに行く」などである。この -ing 形はもともと前置詞 on に導かれる動名詞とされていたが、現在は on を伴うことがないので、現在分詞と解されている。なお、この -ing 形に前置詞が続くとき、その前置詞は go とは関係がない。つまり、ここでの前置詞は go to the river の to ではなく swim in the river の in になるということ。
4. 「無為に時間を浪費するな（直訳：何もしないことあなたの時間を浪費するな）。」 ※waste O on ～ 「～に O (お金や時間) を浪費する」。～の部分に準動詞がくるとき、前置詞 on の目的語となる動名詞となるが、このとき前置詞 on は省略される。
5. 「私は人前で話すことが苦手だ。」 ※ have trouble in ～ 「～に困っている、苦手である」の意味。～の部分に前置詞 in の目的語としての動名詞をとるときには、in は省略されることが多い。
6. 「この浴槽は修理が必要だ。」 ※ S needs doing で「S は～される必要がある」という受動の意味になる（主に英国での口語用法とされる）。この表現で大切なのは、doing の目的語が主語の位置にあること。例えば、Someone needs to repair this bathtub. 「だれかがこの浴槽を修理する必要がある。」という文があるとして、この動詞 needs to repair の目的語 this bathtub を主語に変換すると（つまり受動態にすると）、This bathtub needs to be repaired (by someone). となる。to 不定詞を使うこの表現も間違いではないのだが、主に英国では慣用的に、この to 不定詞は能動態の動名詞 repairing で表現され、受動のイメージを含む「修理されること」の意味になる。類似の例文を暗唱例文として挙げておく。My car needs washing. 「私の車は洗う（だれかに洗われる）必要がある。」

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



## コラム 理解できる英語力から実用的な英語力へ

英語を習得するのにもっとも効率的なのは英語に囲まれて生活することです。言語の4技能とされるスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングのスキルを、自然にバランスよく習得することができます。もちろん、日本に住む私たちにとっては現実的ではありません。自分に「必要な」英語力をもっとも効率よく身につけるためには具体的に何をすべきなのでしょうか。あなたに必要な英語力の目標を「大学入試の合格を牽引してくれる英語力」と仮定して、考えてみましょう。

日本語で英単語や英文法を勉強するのは、すでに日本語が理解できる人にとってはそのほうが効率がいいからです。ただ、多くの英単語を覚え、英文法が理解できるようになったとしても、入試合格レベルの力に達したとは一概には言えません。例えば、長文読解において1文1文をなんとか理解できても、時間がかかりすぎて解答時間が不足したり、途中で文脈を見失ったりしてしまう人は多いでしょう。英語を理解できることと習得することの間には実用面で大きな差があり、目標とする英語力のためには、精度と速度を身につけて、実用性を向上する必要があるということです。

長文読解が苦手な理由の1つは、1文1文を理解するのに力を使ってしまい、もっとも大切な文章全体の内容を把握するための余力を失うからです。そして、文の理解に力を使いすぎてしまうのは、「英語を日本語に訳そうとしている」からです。

「訳」と「意味」の違いを改めて意識してください。訳とは英語に当てはめた日本語のこと、意味とはことばそのものが持つイメージのことです。例えば、単語帳に書いてある訳語はその日本語が当てはまるという例であって、英語が持つイメージを正しく表すものとは限りません。訳語がうまく当てはまらず英文の意味が理解できないときには、文脈に合わせて訳語の意味のイメージを広げる感覚が必要です。その感覚こそ、実用的な英語力を養うには欠かせないものです。

文の要素と副詞の「意味のまとめ」を理解することで文構造を正しく把握し、文全体の内容が不自然でなくイメージできれば、それで英文は正しく読めています。頭の中で訳す必要はないのです。自然な日本語に訳すのは指示されたときにだけすればいいことで、これは日本語の表現力の問題です。そして、くれぐれも注意してください。英文の内容をイメージで理解することは、文構造を考えず、わかる単語を適当につなげて意味を類推することとはまったく違います。

英文を正確に速く読むために大切なことは、できるだけ日本語を介さないこと、つまり、英語を英語としてのイメージで理解することです。これは、英語を学び始めた人にとって容易なことではありませんが、実用的な英語力を向上させたいなら訓練するしかありません。できるだけ効率よく訓練するために、日常の学習の延長線上でできる方法を具体的に示しましょう。

この訓練の目的は、日本語で理解できた英文の内容を、英語としてのイメージで理解し直すことです。まず、文でも文章でも、演習を終えたら日常の学習としての復習をします。すべての英文の構造、語句とその意味（訳語でかまいません）を完全に理解し、単語のアクセント・発音もきちんと確認してください。

復習が終わったら訓練に入ります。訳や意味を念頭に「意味のまとめ」を意識しながら「全速力」で音読し、英文をイメージで理解できるまで、可能であれば記憶してしまうまで、繰り返します。これだけです。音読はスピーキングスキルの入り口でしかありませんが、繰り返すことで他の3技能にも必ずよい効果をもたらします。手間をかけて理解した英文を日本語で復習しただけで終わりにするのは、実は相当もったいないことをしているのです。

# 応用的な文型

ルール 19：目的語が意味上の主語になることがある

ルール 20：使役動詞の基本的な語法 (make O *do*)

ルール 21：使役動詞の応用的な語法 (be made to *do*)

ルール 22：知覚動詞の基本的な語法 (see O *do*)

ルール 23：知覚動詞の応用的な語法 (see O *doing / done*)

ルール 24：Yes / No 疑問文は 〈(助) 動詞→主語〉の順序

ルール 25：疑問詞にも名詞と副詞がある



凡例： [主] 主語、[動] 動詞、[目] 目的語、[補・形] 補語となる形容詞、[副] 副詞 など

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

以降、応用的な構造の文はできるだけ、SVOC で示される 5 つの基本文型に類型化します。

文構造の考え方を理解した上で、音読を繰り返し、表現をイメージで覚えることを心がけてください。

この課では、目的語が〈意味上の主語〉になる構造を確認します。次の 2 つの英文を見比べてください。

□ I want to keep the kitchen clean. 「私は台所をきれいにしておきたい。」

□ I want her to keep the kitchen clean. 「私は彼女に台所をきれいにしておいてほしい。」

□ これらの文で異なるのは、下の文の her だけです。それぞれ文構造を確認してみましょう。

□ 上の文は次の 2 通りで構造を解釈できます。ただし、下の解釈 (cf.)<sup>\*1</sup> の方が実用的でしょう。

□ [主] I [動] want [目] [to keep [目] the kitchen [補・形] clean].

□ この解釈では、want の目的語は to 不定詞の名詞的用法「～すること」が導く名詞句です。

to 不定詞には動詞の機能がありますから、keep が目的語と目的格補語をとっています。

直訳すると「私は台所をきれいに保つことを欲する。」となり、文全体は SVO となります。

cf. □ [主] I [動] want to keep [目] the kitchen [補・形] clean.

□ この解釈では、want to keep を 1 つの動詞と解釈し、文全体は SVOC となります。

□ 上の文の構造を参考に、下の文の構造を考えてみましょう。

□ [主] I [動] want [目] her [補・名] [to keep [目] the kitchen [補・形] clean].

□ この文は、上の文に目的語 her が加わることで、

上の文では目的語 (必ず名詞) だった to 不定詞の名詞的用法が導く名詞句が、

目的語 her と内容的にイコールになる補語 (名詞句) に変わると解釈できます (SVOC)。

□ このとき、文の内容をよく見ると、目的語 her は、(to) keep the kitchen clean という

動作の、実質的な主語としての役割をしていることがわかります。このような、

□ **文法上は主語ではないが、実質的に主語の役割をする名詞を、〈意味上の主語〉**といいます。

□ 動詞が語として特徴的に持つ法則のことを、動詞の〈語法〉<sup>\*2</sup> といいます。

「動詞の目的語が意味上の主語になる」語法を持つ動詞はたくさんあります。

いくつか基本的な例を挙げますので、文構造を理解した上で繰り返し音読し、覚えてください。

□ [主] I [動] asked [目] Ken [補・名] [to go and buy [目] some milk].

「私はケンに牛乳を買いに行くよう頼んだ。」(go and buy の意味上の主語は、目的語 Ken。

なお、go and buy は口語的表現で、さらに go buy と略されることもあります)

□ [主] Mr. Suzuki [動] told [目] us [補・名] [to speak up [副] in class].

「鈴木先生は私たちに、授業中にもっと発言するように言った (命じた)。」「(speak up するのは us)

□ [主] The pandemic [動] forced [目] people [補・名] [to work [副] at home].

「パンデミックのせいで人々は家で働くことを余儀なくされた。」<sup>\*3</sup> (work するのは people)

## 注

\*1 : cf. は compare または confer 「比較せよ」の意味の略語。

\*2 : 文の法則を〈文法〉と呼ぶように、語が特徴的に持つ

法則のことを〈語法〉と呼ぶ。

\*3 : force O to do 「O に強制して～させる」。直訳は「パンデミックは人々に家で働くことを強いた。」となる。

演習 和訳しなさい。

1. I want you to listen to this song.  
「  
」
2. He advised her not to go out alone after dark.  
「  
」
3. The company doesn't allow their workers to work overtime.  
「  
 (副詞 overtime 「時間を超過して」)  
」
4. I need you to help her for me.  
「  
」
5. He tried to get his son to play the guitar.  
「  
」
6. She helped the tourist to get to his country's embassy. (名詞 embassy 「大使館」)  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「あなたにこの歌を聴いてもらいたい。」 ※ want O to do 「O に～してほしい」。動詞 want の目的語 (O) である you は、(to) listen to this song 「この歌を聴く (こと)」の意味上の主語である。
2. 「彼は彼女に、暗くなったあとはひとりで出かけないよう忠告した。」 ※ advise O to do 「O に～するよう忠告する」。動詞 advise の目的語 her は、not to go out 「外出しないこと」以降の意味上の主語である。to 不定詞を否定するときは、to の前に否定語 not を置くのが原則。didn't advise her にすると「忠告しなかった」となり、意味がまったく変わってくる。
3. 「その会社は、社員が残業することを認めていない。」 ※ allow O to do 「O が～することを認める、許す」。work overtime は「(時間を超えて働く→) 残業する」の意味で、overtime は副詞。work overtime の意味上の主語は、動詞 allow の目的語でもある their workers 「彼らの労働者」。なお、この複数形の代名詞 their は単数名詞 The company の所有格。複数の人が構成する集団は、単数でも、複数形 they で受けるのがふつう。
4. 「私の代わりに、あなたが彼女を手伝ってほしい。」 ※ need O to do 「O が～することが必要である / O に～してほしい」。内容的には want O to do とほぼ同じと考えてよい。for ～は「～のために」のニュアンスを含む「～の代わりに」の意味も覚えておくことよい。
5. 「彼は息子にギターを弾かせようとした。」 ※ get O to do 「(O が～することを得る→) O に～させる」。このような get の語法を〈使役用法〉といい、目的語 O は続く to 不定詞の意味上の主語となる。使役表現は次の「ルール 20」で改めて扱う。
6. 「彼女はその旅行者が自国の大使館に着くのを手伝ってやった。」 ※ help O (to) do 「O が～する役に立つ / ～するのを手伝う」。ここでは helped の目的語 the tourist が、to get to ～ 「～に到着する」の意味上の主語。ただし help の目的語に続く to 不定詞は、to が消えた動詞の原形 (原形不定詞) になることも多い。ここでは、helped the tourist get to ～になるということ。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

□  
 / 6



ルール 20：使役動詞の基本的な語法 (make O do)

凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補・形 補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 〈使役動詞〉とは、主語が目的語を使役する（目的語に何かをさせる）動詞のことです。
- 一般的には、make と let と have の 3 つの動詞に共通する語法を指します。

まず、基準となる語法例です。目的語（意味上の主語）に to 不定詞が続くことを確認してください。

- ㊦ His company ㊧ got ㊨ him ㊩ [to retire ㊪ five years earlier].  
「彼の会社は 5 年早く彼を退職させた。」

- get/force O to do は「O が～することを強制する / O に強制的に～させる」を意味する使役表現です。この文では、動詞 got の目的語である him は、続く to 不定詞 (to retire) の意味上の主語になっています。このとき、内容的に him = to retire 以降が成立すると考えます。

- なお、補語となる品詞は定義として名詞か形容詞です。ここでは便宜的に名詞としていますが、品詞として意識する必要はありません。語法のかたちをそのまま覚えるようにしてください。

次に、make 等の 3 動詞に共通の語法例です。意味上の主語に続く動詞のかたちに注目してください。

- ㊦ His company ㊧ made ㊨ him ㊩ [retire ㊪ five years earlier].  
「(訳は上とほぼ同じ)」

- make O do は「O が～することを強制する / O に～させる」を意味する使役表現です。
- このときの目的語 O は、続く do の意味上の主語で、その動作 (do) は **to 不定詞ではなく動詞の原形**になります。この動詞の原形を、to 不定詞に対して〈原形不定詞〉といいます。

- ㊦ His company ㊧ let ㊨ him ㊩ [retire ㊪ five years earlier].  
「彼の会社は 5 年早く彼を退職させてやった。」

- let O do の語法は「O が～することを許す / O に～させてやる」〈許可〉を表します。
- この動詞 let の目的語も、続く原形不定詞の意味上の主語になります。

- make の例文では「会社が強制的に彼を退職させた」のに対し、この let の例文では「彼が依頼し、それが許されて退職した」ことを意味します。

- 参考までに、let 以外の動詞を使って、内容が類似する表現を挙げておきましょう。

- His company allowed/permitted him to retire five years earlier.

「彼の会社は、彼が 5 年早く退職するのを許した。」

※ permit 「許可する」は正式な硬い語なので、内容によっては違和感が出ます。

- ㊦ I ㊧ will have ㊨ him ㊩ [call ㊪ you ㊫ back ㊬ later].  
「あとで彼に折り返し電話させます。」

- have O do は「O に（当然に）～させる / してもらう」という〈義務〉の意味合いがあります。つまり、この文では「彼が電話を折り返すことを、私が当然として課す」ことを意味します。
- have の目的語も、続く原形不定詞の意味上の主語になります。

- 【重要】使役動詞 make と let と have の目的語が意味上の主語として主体的な動作をするとき、その動作は原形不定詞で表します。

注

演習 和訳しなさい。

1. Make your wish come true.  
「  
」
2. I got my husband to take a little rest.  
「  
」
3. Please let me know your address later.  
「  
」
4. I won't let him go alone.  
「  
」
5. Rikako was allowed to swim again.  
「  
」
6. I will have a repair person fix your bathtub this afternoon. (名詞 bathtub「浴槽」)  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「あなたの願いを叶えなさい (直訳：あなたの願いが実現するようにしなさい)。」 ※動詞の原形から始まる命令文 (文の主語の you の省略)。使役動詞 make の目的語 your wish は、続く原形不定詞 come true の意味上の主語でもある。「あなたの願いが実現する」ことを「強制しなさい」というイメージ。ただし、命令文は、内容によっては命令的内容とは限らない。Have a good day. 「よい一日を。」を考えればわかるだろう。
2. 「私は夫を少し休憩させた。」 ※使役表現 get O to do 「O に～させる」の過去形。got の目的語 (意味上の主語) に続く動作は to 不定詞で表す。「私の夫が少しの休憩をとる」ことを「私は強制した」というイメージ。take a rest 「休憩する」。
3. 「あとであなたの住所を教えてください (直訳：私を知るようにさせてください)。」 ※ let O do 「O に～させてやる」。使役動詞 let の目的語 me が、続く原形不定詞 know の意味上の主語となる。「あなたの住所を知ること」を「私にさせてやりなさい」ということ。Please let me know. は「教えてください。」で覚えてしまうとよい。
4. 「彼をひとりで行かせるつもりはない。」 ※使役動詞 let の目的語 him が続く原形不定詞 go の意味上の主語となることができる「彼がひとりで行く」という内容を、「私は許さない (させてやらない)」ということ。won't = will not は、主語の否定の意志を表す助動詞の短縮形。
5. 「リカコは再び泳ぐことを許された。」 ※能動態の文、They allowed Rikako to swim again. または They let Rikako swim again. 「彼らはリカコが再び泳ぐことを許した。/リカコを再び泳がせてやった。」を受動態にしたもの。使役動詞 let においては、受動態で使われる表現が慣用的なものに限られ (be let go 「解雇される」など)、受動態にするときには動詞そのものを変えるのがふつう。なお、これら能動態の例文の主語 They は、漠然とした「人々、関係者」などを表すときに使える。
6. 「今日の午後、修理人にお宅の浴槽を修理させる (してもら) つもりです。」 ※浴槽が故障して電話してきた人に、修理屋が「午後に 1 人修理人を行かせる」と返事している場面をイメージするとよい。使役動詞 have の目的語 a repair person は、動作 fix your bathtub の意味上の主語で、主語 I がその内容を a repair person に仕事として課す、というイメージ。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



ルール 21：使役動詞の応用的な語法 (be made to do)

凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 使役動詞の、S makes O do 「S は O に～させる」の語法は、目的語 O を主語に変換した受動態にすることができます。能動態の例文を再利用します。受動態との違いをよく見てください。
  - ㊦ His company ㊧ made ㊨ him ㊩ [retire ㊪ five years earlier].  
「彼の会社は 5 年早く彼を退職させた。」(能動態)
  - ㊦ He ㊧ was made / forced ㊩ [to retire ㊪ five years earlier] ㊫ by his company.  
「彼は会社から 5 年早く退職させられた (直訳：彼は会社によって 5 年早く退職することを強いられた。)」(受動態)
  - S makes O do の受動態は O is made to do (by S) 「O は (S によって) ～させられる」で表されます。このときの made は forced としてもほぼ同じ意味です。
  - 大切なのは、**能動態では原形不定詞だった目的語の動作が、受動態では to 不定詞になる点**です。ただ、能動態の原形不定詞の方がむしろ例外的と考えた方がよいでしょう。
  - なお、使役動詞 let と have には、この受動態のかたちはないと考えてかまいません。
  - もうひとつ、使役動詞の語法で大切なのは、**使役動詞の目的語の「受動的な状態」を、過去分詞の形容詞用法が後置修飾することで表せる**ことです。次の 2 つの英文を比較してください。
  - ㊦ I ㊧ had ㊨ the mechanic ㊩ [change ㊪ the flat tire].  
「私は修理工にパンクしたタイヤを替えてもらった (替えさせた。)」
  - ㊦ I ㊧ had / got ㊨ the flat tire ㊩ changed ㊪ by the mechanic.  
「(訳はほぼ上と同じ)」
  - 上の文は、使役動詞 had の目的語 the mechanic が、続く原形不定詞 change 以降の意味上の主語になっており、the mechanic changes the flat tire 「修理工がパンクしたタイヤを交換する」ことを、文の主語の I 「私」が仕事として課したことを表しています。
  - 対して下の文は、上の文と内容的にはほぼ同じなのですが、その視点が異なります。つまり、目的語 the flat tire 「パンクしたタイヤ」を意味上の主語とする、the flat tire (is) changed 「パンクしたタイヤが交換される」受動的な内容を、I had / got 「私がさせた」ということです。
  - 下の文の語法において、目的語に続く過去分詞は、この目的語を意味上の主語として、「(意味上の主語が) ～される (被害)、～してもらう (受益)」という受動の意味<sup>\*1</sup>になります。
  - また、この過去分詞は、直前の名詞を説明して修飾する、補語となる形容詞と判断できます。
  - 形容詞は必ず名詞を修飾しますが、説明的に後置修飾できる<sup>\*2</sup>ことはすでに学んでいます。
- 「受益」の例以外に、「被害」の例も挙げておきます。受益か被害かの判断は内容によります。
- ㊦ I ㊧ had / got ㊨ my favorite shirt ㊩ soaked ㊪ in the heavy rain.  
「大雨で、私のお気に入りのシャツがずぶ濡れになった。」
  - **【重要】** 使役動詞において、その目的語は意味上の主語となり、続く補語によって修飾・説明されます。

注

\*1：受動の意味を表す過去分詞については、「ルール 15」を参照。

\*2：この用法を形容詞の叙述用法という。「ルール 02、10、14」などを参照。

演習 和訳しなさい。

1. His words made her heart sink. (動詞 sink 「沈む」)  
「  
」
2. She was made to stand for hours.  
「  
」
3. My father was forced to work overtime again.  
「  
」
4. I will have my hair cut tomorrow.  
「  
」
5. He got his motorbike stolen. (動詞 steal 「盗む」)  
「  
」
6. Her words made him very unhappy.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「彼のことばで彼女の心は落ち込んだ。」 ※直訳は「彼のことは彼女の心を沈ませた。」となる。不自然な日本語を和訳とは言わない。意味をよく考えて、日本語として自然なことばにすること。make O do は「O を (強制的に) ~にする」の使役表現。O は her heart 「彼女の心」。
2. 「彼女は何時間も立たされた。」 ※ O is made to do 「O は ~することを強制された」は使役表現 make O do の受動態。能動態では、例えば Someone made her stand for hours. 「だれかが彼女を何時間も立たせた。」となる。能動態での原形不定詞が受動態では to 不定詞に変わること注意到。
3. 「父はまた残業させられた。」 ※ force O to do 「O が ~することを強制する」の受動態 O is forced to do 「O は ~することを強制される」。この表現では、forced を made としても意味はほぼ同じ。
4. 「明日、髪を切ってもらおう。」 ※ have O done (-ed) で「O を ~される / してもらう」。この文では、my hair が O、cut (過去分詞形「切られる」) が done にあたる。なお、このときの使役動詞 (will) have は get としても意味はほぼ同じ。内容的に my hair = cut 「私の髪 = 切られる / 切ってもらう」が成立すると考える。内容的に受益表現と判断する。
5. 「彼はオートバイを盗まれた。」 ※ 4. と同様、get / have O done の受益 / 被害表現で、his motorbike = stolen 「彼のオートバイ = 盗まれる」が成立する。ここでは内容的に被害表現と判断する。ちなみに、His motorbike got / was stolen. 「彼のオートバイが盗まれた。」としても内容的には同じだが、使役動詞の文では主語の He がある分、「彼が」被害を受けたニュアンスが強い。
6. 「彼女のことは彼はとてものがっかりした。」 ※ すでに学んだ SVOC の文構造で、O (him) = C (very unhappy) が成立している。この very unhappy は目的格補語となる形容詞。1. に似た内容であることを考えれば、この made も使役動詞と考えて差し支えない。make が持つ「何かに関与して、別のものにする」イメージがあれば、使役の感覚もつかみやすいかもしれない。最後にもう 1 つ、make を使った例文を挙げておく。He will make a good husband and a good father. 「彼はよい夫でよい父親になるだろう。」(※この make は become の意味に近い)

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



凡例： [主] 主語、[動] 動詞、[目] 目的語、[補・形] 補語となる形容詞、[副] 副詞 など

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 〈知覚動詞〉とは感覚を表す動詞、つまり see 「見える」、hear 「聞こえる」、feel 「感じる」、notice 「気づく」などを指し、とくに 〈知覚動詞 + 目的語 + 原形不定詞〉のかたちで、**目的語が原形不定詞の意味上の主語になる語法**に注意する必要があります。

- この語法は、make などの使役動詞の語法と似ています。あわせて確認しておいてください。<sup>\*1</sup>

例文を見ていきましょう。

- [主] I [動] felt [目] the baby [補・名] kick. 「赤ちゃんが（おなかの中で）蹴るのを感じた。」

- feel O do は「O が～するのを感じる」を意味する知覚表現です。

この文では、動詞 feel の目的語 the baby は、続く原形不定詞 kick の意味上の主語です。

この語法は、使役動詞の make などと同じかたちです。

- 内容的に the baby = kick が成立すると考えますが、この補語としての品詞は便宜的です。

知覚動詞がきたら、その目的語が動作の（意味上の）主体になるかもしれないと

身構えればよいのです。語法のかたちをそのまま覚え、繰り返すことで身につけましょう。

- [主] She [動] looked at [目] him [補・名] [bend [目] the spoon].

「彼女は彼がそのスプーンを曲げるのをじっと見た。」

- look at O do は「O が～するのを（じっと）見る」の意味です。look at は句動詞で、

1 つの動詞の意味のまとまりと考えます。listen to ～ 「～を聞く」も同様です。

- この文の目的語 him は、続く原形不定詞が導く動作 bend the spoon の意味上の主語です。

つまり、「スプーンを曲げた」のは「彼」で、「彼女」はその様子を「見た」ことを表しています。

- [主] I [動] noticed [目] her [補・名] [hide [目] something [副] behind her back].

「彼女が何かを背後に隠すのに私は気づいた。」

- notice O do は「O が～するのに気づく」の意味です。

- この例文では、目的語 her は原形不定詞 hide の意味上の主語です。もう、わかりますね。

最後に、知覚動詞の受動態を確認しましょう（使役動詞でのかたちが参考になります）。

- [主] I [動] saw [目] him [補・名] [fall down [副] from his horse].

「彼が落馬するのが見えた。」（能動態）

- [主] He [動] was seen [補・名] [to fall down [副] from his horse].

「彼は、落馬するところを見られた。」（受動態）

- S sees O do の受動態は O is seen to do (by S) 「O は (S によって) ～するのを見られる」

で表され、**能動態では原形不定詞だった目的語の動作が、受動態では to 不定詞になります。**

- 英語は受動態の文を好みませんので、このかたちを目にする機会は多くないかもしれませんが、

使役動詞の受動態とあわせて、現れたときに正しく構造が理解できるようにしておきましょう。

## 注

\*1：使役動詞の語法は「ルール 20、21」を参照。

演習 和訳しなさい。

1. I saw a flying object suddenly disappear. (名詞 object 「物体」、動詞 disappear 「消える」)  
「  
」
2. He heard someone call his name.  
「  
」
3. I saw an elephant destroy a car. (動詞 destroy 「破壊する」)  
「  
」
4. I feel the earth move under my feet.  
「  
」
5. She watched the evening sun set over the ocean.  
「  
」
6. She likes to listen to her father sing his original songs.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「私は飛行物体が突然消えるのを見た。」 ※ see O do 「O が～するのが見える」。動詞 saw (see の過去形) の目的語 (O) である a flying object は、続く原形不定詞 (suddenly) disappear 「(突然) 消える」の意味上の主語。なお、see 「見える、目に入る」に対し、積極的に「見る、じっと見る、調べる」ときの動詞は watch や look at を使う。
2. 「彼はだれかが自分の名前を呼ぶのを聞いた。」 ※ hear O do 「O が～するのが聞こえる」。動詞 heard の目的語 someone は、call his name 「彼の名前を呼ぶ」の意味上の主語で、この call は原形不定詞。なお、hear 「聞こえる」に対し、積極的に「聞く」ときの動詞は listen to を使う。
3. 「私はゾウが車を破壊するのを見た。」 ※ 動詞 saw の目的語 an elephant が意味上の主語となって、原形不定詞の destroy a car 「車を破壊する」という動作に続いている。つまり、「ゾウが車を破壊する」のを「私は見た」ということ。
4. 「足下で地球が動くのを感じる。」 ※ 名曲の冒頭の 1 節。動詞 feel の目的語 the earth は続く move 以降の意

味上の主語。

5. 「彼女は夕日が海の向こうに沈むのを見た。」 ※ 意味上の主語 the evening sun 「夕日」が、set over the ocean 「海の向こうに沈む」さまを、She watched 「彼女は見た」ということ。
6. 「彼女は父親が自作の歌を歌うのを聞くのが好きだ。」 ※ 知覚動詞 listen to ～ 「～を聞く」が、動詞 like に続く to 不定詞に使われているかたち。知覚動詞が to 不定詞や動名詞などの準動詞として使われることには何の問題もない。この文は厳密には、主語が She、動詞が likes、to listen ～ 以下は 「～を聞くこと」という to 不定詞の名詞的用法で likes の目的語。likes to listen to ～ で 「～を聞くのが好き」という 1 つの動詞の意味のまとまり (述語動詞) と考えた方がわかりやすいだろう。知覚動詞 listen to の目的語かつ意味上の主語が her father で、その動作が原形不定詞の sing、さらにその動作の目的語が his original songs という構造である。

年 組 番

氏名

実施日

年

月

日

|   |
|---|
|   |
| 6 |

検印

凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補・形 補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 知覚動詞においても、その目的語の状態を、直後に続く分詞で説明する語法があります。  
まず、次の2つの英文を比較してみてください。上の文は知覚動詞の基本語法で解説したものです。
  - ㊦ She ㊧ looked at ㊨ him ㊩ [bend ㊨ the spoon].  
「彼女は彼がそのスプーンを曲げるのを見た。」
  - ㊦ She ㊧ looked at ㊨ him ㊩ [bending ㊨ the spoon].  
「彼女は彼がそのスプーンを曲げているところを見た。」(能動・進行)
  - 下の文では、上の文での原形不定詞 (bend) が、現在分詞 (bending) になっています。  
これは、意味上の主語 him が「(スプーンを) 曲げつつある」進行的な状態を表しています。  
内容的には、上の文では「曲げる」**動作の全体**を見たことを表すのに対し、  
下の文では、進行形と同様、「曲げつつある」**動作の一時点**を見たことを表しています。
  - 構造的には、内容上は him = bending the spoon が成立し、bending 以降は目的格補語です。  
つまり bending は、名詞 him を後ろから説明していると考えられます。
- もうひとつ、これと対比される語法を確認します。いちばん上の英文と次の英文を見比べてください。
- ㊦ She ㊧ looked at ㊨ the spoon ㊩ bent ㊪ by him.  
「彼女はそのスプーンが彼によって曲げられるのを見た。」(受動)
  - この文は、内容的にはいちばん上の文と同じですが、「見た」目標 (つまり目的語) が異なります。  
「彼女」が見たのは「彼」ではなく「スプーン」で、それが「(彼によって) 曲げられた」という  
**受動**の様子が、過去分詞 bent (by him) で表されています。
  - 構造的には、いちばん上の文での意味上の主語 him、その動作を表す原形不定詞 bend、  
その目的語 the spoon が、この文では目的語を主語に変換する受動態になっています。  
つまり、能動態の he bent the spoon 「曲げた」が、受動態の the spoon (was) bent by him  
「曲げられた」に変換され、それを「彼女は見た」ということです。
  - この文では、内容的に the spoon = bent (by him) が成立し、bent は目的格補語です。  
つまり過去分詞 bent は、名詞 the spoon を後置修飾によって説明していると解釈できます。
  - 下2つの例文はどちらも、動詞の目的語と、続く分詞 (現在分詞と過去分詞) が  
内容的にイコール (O = C) ですから、文全体は SVOC (第5文型) と解釈できます。  
これらの分詞は目的格補語となる形容詞と考えてかまわないということです。
  - **【重要】** 知覚 / 使役動詞の語法では、知覚 / 使役動詞の目的語は意味上の主語になります。
  - **【重要】** その意味上の主語の動作や状態は、続く (原形 / to) 不定詞や (現在 / 過去) 分詞で表します。
  - **【重要】** その意味上の主語以降の内容全体を、文の主語が知覚 / 使役するという文構造です。
  - 名詞を分詞の形容詞用法<sup>\*1</sup>で説明的に後置修飾するとき、  
その名詞と分詞との関係が能動関係なのか、あるいは受動関係なのかを見定めることが大切です。

## 注

\*1：分詞の形容詞用法および後置修飾については、「ルール 15、16」を参照。

演習 和訳しなさい。ただし、( ) 内の語は正しい方を選んで右に書きなさい。

1. I saw a cat ( attacking / attacked ) a mouse. ( )  
「 (動詞 attack 「攻撃する」)
2. I saw a cat ( attacking / attacked ) by a mouse. ( )  
「
3. I smell something burning. (動詞 burn 「燃える」)  
「
4. He heard his name called.  
「
5. She felt someone ( looking / looked ) at her. ( )  
「
6. The boy was seen getting on a bus near his house.  
「

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. attacking 「私はネコがネズミを襲っているところを見た。」 ※ a mouse は attacking / attacked のいずれかの目的語。動詞 attack 「攻撃する」は「～を (攻撃する)」にあたる目的語しかとらないから、目的語があるということは、目的語が主語に変換される受動態 (過去分詞) ではないということである。よって、能動態 (現在分詞) の attacking を選ぶ。現在分詞なので、「襲う」一部始終ではなく、「襲いつつある」動作の一時点を見たということ。
2. attacked 「私はネコがネズミに襲われるのを見た。」  
※ 1. との違いをよく見比べること。文末の副詞句 by a mouse 「ネズミによって」は、能動態の文を受動態に変換するときに、主語が動作主を表す副詞句に変換されたもの。よって、受動を表す過去分詞 attacked を選ぶ。
3. 「何かが燃えているにおいがする。」 ※ smell O *doing* 「O が～しているにおいがする」。smell は知覚動詞で This perfume smells good. 「この香水はいいにおいがする。」のような SVC のかたち (S = C) をとるが、ここでのように目的語をとって SVOC (O = C) のかたちをとることもある。このときの補語 (C) には形容詞や分詞 (形容詞用法) がくるが、原形不定詞がくることはまずない。これは動詞 smell の意味とその性質による。
4. 「彼は自分の名前を呼ばれるのが聞こえた。」 ※ 動詞 heard 「聞こえた」の内容は、his name (was) called (by someone) ということ。ここでの called は過去分詞の形容詞用法となり、直前の目的語である名詞 his name を後ろから説明する叙述用法となる (「ルール 15」を参照)。
5. looking 「彼女はだれかが自分を見ているのを感じた。」 ※ 知覚動詞 felt (feel の過去形) の目的語 someone は意味上の主語で、someone (was) looking at her 「だれかが彼女を見ていた」から、現在分詞 looking を選ぶ。
6. 「その少年は、自宅の近所でバスに乗り込むところを目撃された。」 ※ 知覚動詞の受動態の文。能動態の文は、例えば Someone saw the boy getting on a bus near his house. 「だれかが、その少年が自宅の近くでバスに乗り込むところを (瞬間的に) 目撃した。」となる。なお、この例文の現在分詞 getting を原形不定詞 get とするときの受動態は、The boy was seen to get on a bus ～ のように、原形不定詞が to 不定詞に変わる。このときに「見られた」少年の動作は、「乗り込む」という瞬間的な一時点ではなく、「乗る」という一連の動作の場面を表すことになる。

年 組 番 氏名

実施日 年 月 日



検印

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 基本的なことから確認します。英文は〈平叙文〉と〈疑問文〉に大別できます。<sup>\*1</sup>
  - 平叙文とは終止符 (.) で終わる文のことで、〈肯定文〉と〈否定文〉があります。
  - 疑問文とは疑問符 (?) で終わる文のことで、〈Yes / No 疑問文〉、〈疑問詞疑問文〉などがあります。

平叙文と Yes / No 疑問文とを比較してみましょう。まずは be 動詞の文ですが、答え方も確認します。

- Ms. Sato is a nice teacher. (平叙文) 「佐藤先生はいい先生である。」
- Is Ms. Sato a nice teacher? (Yes / No 疑問文) 「佐藤先生はいい先生ですか。」
- (答え方) — Yes, she is (a nice teacher). 「はい、そうです。」  
/ No, she isn't (a nice teacher). 「いいえ、そうではありません。」

- be 動詞の平叙文を Yes / No 疑問文に変換するときには、  
主語 (Ms. Sato) と動詞 (is) の場所を入れ替えて、文末に疑問符をつけます。
- このように、主語の前に (助) 動詞がくる形を〈倒置〉といいます。
- なお、答え方の ( ) 内は省略します。英語は冗長な (不要な) 繰り返しを好みません。

次に、一般動詞の文の、平叙文と Yes / No 疑問文の比較です。

- He bought five books. (平叙文) 「彼は 5 冊の本を買った。」
- Did he buy five books? (Yes / No 疑問文) 「彼は 5 冊の本を買ったのですか。」
- (答え方) — Yes, he did (buy five books). 「はい、そうです。」  
/ No, he didn't (buy five books). 「いいえ、そうではありません。」

- 一般動詞の平叙文を Yes / No 疑問文に変換するには、主語 (He) の前に助動詞 (Did) を出し、もとの動詞 (bought) を原形 (buy) に戻し、文末に疑問符をつけます。
- このときの助動詞は、主語や時制によって変わります。この例文では過去形なので Did ですが、例えば時制が現在の文では、主語が you なら Do に、主語が he なら Does になります。

- **【重要】** 平叙文の〈主語→動詞〉の順序は、Yes / No 疑問文では倒置が起こって、  
〈(助) 動詞→主語〉の順序になります。この順序の違いを、しっかりと覚えておいてください。

- Yes / No 疑問文は、文の内容全体が正しいかどうかを問う疑問文です。一方、
- 疑問詞疑問文は、文の中の、文の要素あるいは副詞の「意味のまとまり」を問う疑問文です。
- When did he buy the books? (疑問詞疑問文) 「いつ彼はその本を買ったのですか。」
- この文は、例えば He bought the books yesterday. 「彼は昨日その本を買った。」(平叙文) の、  
ときを表す副詞 yesterday にあたる部分を疑問詞 when で問うている疑問詞疑問文です。  
このときの when は、ときを表す副詞を表すのですから、当然、副詞ということになります。  
より正確には〈疑問副詞〉といいます。疑問詞の品詞については、次の課で改めて確認します。

## 注

\*1 : 英文の種類には、命令文や、感嘆符 (!) で終わる感嘆文もある。感嘆文は本書では扱わない。

演習 英文を Yes / No 疑問文に変換し、その疑問文を和訳しなさい。

1. She lives in Kumamoto.

「  
」

2. Bicycles in this shop are all black.

「  
」

3. He didn't go golfing in Tochigi yesterday.

「  
」

4. This car is not made in Italy.

「  
」

5. I should come back later.

「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 1. Does she live in Kumamoto? 「彼女は熊本に住んで(熊本で生活して) いるのですか。」 ※一般動詞の Yes / No 疑問文。主語が She で時制が現在なので、三単現の助動詞 Does を文頭に置き、次いで主語 she と、lives の原形 live を続け、文末に疑問符をつければ完成する。
- 2. Are bicycles in this shop all black? 「この店の自転車はすべて黒色なのですか。」 ※ be 動詞の Yes / No 疑問文。平叙文の be 動詞を主語の前に出し、文末に疑問符をつける。平叙文の主語は、述語動詞 (ここでは are) の前にある文の要素と考える。なお、この all 「すべて」は存在を表す be 動詞を修飾する、強調の意味を含む副詞と考える。
- 3. Didn't he go golfing in Tochigi yesterday? 「彼は昨日、栃木へゴルフに行かなかったのですか。」 ※一般

- 動詞の、過去形の否定文を Yes / No 疑問文にする。Did he not go golfing ~? というフォーマルな否定表現もあるが、上の正解例で覚えておけばよい。
- 4. Isn't this car made in Italy? 「この車はイタリア製ではないのですか。」 ※ be 動詞の否定形の Yes / No 疑問文。3. と同じく、Is this car not made ~? というフォーマルな表現もある。なお、この文は内容的に「作られたのは過去だから過去形にすべき」と考えるかもしれないが、量産されているものについては現在形で表してよい。例えば映画などの 1 点ものは、ふつう過去形で表す。
- 5. Should I come back later? 「またあとで来ましょうか。」 ※助動詞を含む平叙文は、その助動詞を主語の前に出せば Yes / No 疑問文になる。この正解文は、例えば訪問時に先方が多忙そうな場合に使う表現。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

5



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 疑問詞疑問文は、文の要素（主語・動詞・目的語・補語）や副詞を部分的に問う疑問文です。
- 問う部分に応じた疑問詞が必要ですが、名詞の〈疑問代名詞〉と副詞の〈疑問副詞〉に大別します。まず、疑問代名詞を見ていきましょう。

- What is your favorite sport? 「あなたの好きなスポーツは何ですか。」  
— My favorite sport is basketball. 「私の好きなスポーツはバスケットボールです。」  
≡ Basketball is my favorite sport. 「バスケットボールが私の好きなスポーツです。」

- この疑問文の冒頭の疑問詞 What 「何」は、答えの中の basketball に対応しています。basketball は、上の答えでは補語となる名詞、下の答えでは主語（必ず名詞）です。<sup>\*1</sup>つまり、What は名詞を問うているということです。名詞を問う疑問詞が疑問代名詞です。

- 【重要】 what 「何」は名詞を表す疑問詞、つまり〈疑問代名詞〉ですから、  
文の要素である主語、目的語、補語となる名詞を問うときに使います。  
なお、who 「だれ」も人（名詞）を表すので、疑問代名詞です。

- 一方、疑問副詞は、文中の副詞を問うものです。副詞の性質はルール 03 で確認してください。
- 疑問副詞は文の要素ではない副詞、つまり、ときや場所、理由などを問うために使います。

- When did you watch the movie? 「いつ、あなたはその映画を見たのですか。」  
— (I watched it) Yesterday. 「昨日（私はそれを見ました）。」

- この疑問文の冒頭の疑問詞 When 「いつ」は、答えの中の yesterday に対応しています。yesterday はときを表す副詞ですから、When は副詞を問うていることになります。このような、副詞を問う疑問詞が疑問副詞です。

- 【重要】 when 「いつ」はときを表す疑問詞、つまり〈疑問副詞〉ですから、  
文の要素ではない副詞を問うときに使います。  
ほかに、where 「どこ」、why 「なぜ」、how 「どのように」なども疑問副詞です。

- Yes/No 疑問文は、平叙文の主語の前に（助）動詞を置くことで、疑問文に変換されます。
- 疑問詞疑問文は原則として、文の問う部分に応じた疑問詞を文頭に置き、平叙文を Yes/No 疑問文にしたかたちを続ければ、疑問文に変換されます。ただし、注意すべき点が2つあります。

- 1つは、文の要素や副詞が疑問詞に変換されて文頭にきたら、それに対応する文の要素や副詞が欠けるという点です。これは、考えてみれば当然のことです。
- もう1つは、文の要素である主語の部分我问う場合、倒置は起こらないという点です。主語が疑問代名詞に変換されて文頭に置かれるわけですが、もともと平叙文でも、主語は文頭（厳密には文の要素の先頭）にくるからです。

説明だけではわかりづらいかもしれません。右の演習に取り組んで、これらの点を実感してください。

## 注

\*1：be 動詞が補語をとるとき、この補語は内容的に主語とイコールの〈主格補語〉となる。よって、補語となる名詞と主語を入れ替えても、内容的にはほぼ同じである。

演習 英文を、下線部を問う疑問詞疑問文に変換し、その疑問文を和訳しなさい。

1. You had banana cake for breakfast this morning.

「  
」

2. She broke the window.

「  
」

3. You usually buy your shoes on Amazon.

「  
」

4. He is like a five-year-old boy.

「  
」

5. He is going to meet with Taylor Swift tomorrow afternoon.

「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. What did you have for breakfast this morning? 「今朝は朝食に何を食べましたか。」 ※目的語である名詞 banana cake を問うので、「何」を表す疑問代名詞 what を使う。これを文頭に置き、過去形 You had を did you have のように倒置し、目的語の部分を除いた for 以降を続ける。疑問符を忘れないこと。以下同じ。
2. Who broke the window? 「だれが窓を割ったのですか。」 ※問う部分は主語。She は人を表すので、これをただ Who にすればよい。主語の部分我问うているので、倒置は起こらない。
3. Where do you usually buy your shoes? 「あなたはふつうどこで靴を買いますか。」 ※ on Amazon 「アマゾンで」は場所を表す副詞句。これを where に変えて文頭に置き、現在形の You usually buy を do you usually buy に倒置し、目的語 your shoes を続ける。副詞は文の要素ではなく、疑問詞のあとに文の要素の欠けはない。

4. What is he like? 「彼はどのような人ですか。」 ※ a five-year-old boy 「5歳児」は前置詞 like 「～のように」が導く名詞で、前置詞の目的語。よって、疑問代名詞 what を冒頭に置き、He is like を倒置した is he like を続ける。like は、be 動詞 is があるので、動詞ではない。
5. Who is he going to meet with tomorrow afternoon? / With whom is he going to meet tomorrow afternoon? 「明日の午後、彼はだれと会う予定ですか。」 ※ meet with ～ 「～と（予定して）会う」は句動詞。下線部は人名で、前置詞 with の目的語なので、これを who の目的格 whom にして文頭に出す。ただし、whom 単独のときは主格の who のかたちにするのが例外的な慣用。大切なのは、with を残し、そのあとが欠けること。また、〈前置詞＋名詞〉の副詞句として、With whom を文頭に置いてもよい。このとき with に続くのは必ず whom で、who にしてはならない。

年 組 番

氏名

実施日

年

月

日



検印

## コラム 教科書の役割

教科書は、私たちの先輩が世代にわたって積み重ねてきた知識を、優れた執筆者たちが検討を重ねて取捨選択し、「学年に応じた一般的な読解力があれば理解できる」よう細心の注意を払って記述、編集したものです。ときに新たな発見や解釈によって、事実とされていた内容が覆されることもあります。しかし、そのときどきの教科書の内容は100%信じられるものであり、そして、あなたが身につけるべき基礎知識はすべて教科書に書かれています。

勉強は自分の脳と相談しながらひとりでするものですが、教科書はその入り口として最高の教材です。授業に臨むにあたっては、あらかじめ教科書を読み、わからなければ何度も繰り返して読み、それでもわからなければさまざまな手段を使って自分で調べてみてください。授業では、あなたが予習した知識が身につくように、先生がさまざまに工夫して指導してください。自分ひとりではどうしてもわからなかった内容を質問することもできます。日々の授業は、予習した内容が身についたかどうかを自分の脳に確認できる、絶好の復習の場です。「授業は勉強する場ではなく、勉強を手助けしてくれる場」であることを改めて意識してください。授業のその場で教科書の内容を理解し、知識として身につけることができるのは、ほんの一握りの天才だけです。

少し意識を変えて、教科書を「自分の将来を探るための読みもの」と考えてみるのはどうでしょうか。その教科の魅力を探るべく、ふつうの本と同じように最初から最後まで読んでみるのです。教科書を授業進度に合わせて読まなくてはならないきまりがあるわけでもありません。興味が持てる分野と判断できれば、いろいろと調べて知識を深化させることもできるでしょう。あなたが将来の目標を決める手がかりになることができれば、教科書はそのもっとも大きな役割を果たしたといえます。

自分が将来何になりたいのか、どのように生きていきたいのか、すでに決めている人もそうでない人もいます。決めている人は、その目標のために必要なことを自分で調べ、具体的な行動に移しているかもしれません。決めていない人は、日々勉強しながらそれを模索しているところかもしれません。将来の大きな目標でも、日々の小さな目標でも、だれにとっても目標を作ることはとても大切です。それが定まれば、逆算して自分がすべきことがわかり、効率的に行動することができるからです。多くの教科・科目の勉強や、部活動に多忙な日々を送るみなさんは、目標を達成して学校を卒業するために、自分がすべきことに優先順位をつけて効率的に行動する必要があります。そのためには、そのときどきに必要な目標を常に設定しておくことが大切です。

すべての教科をまんべんなく学ぶことには、たいへんな決意と労力が必要です。でも、すべてに全力を尽くすことができないのはふつうのことですし、その必要もありません。目標を決めることで必要なことを取捨選択できれば、学ぶ動機もはっきりします。ただ、好き嫌いや向き不向きを早計に決めつけてしまわないようには注意してください。すべての学問は人間がよりよく生きられるために存在し、学者は日々そのために研究をしています。入り口の教科書を読んだだけでその意義や魅力のすべてがわかるわけではありません。ほとんどのおとなは「もっと〇〇を勉強しておけばよかったな」と後悔しています。

先輩の積み重ねた知識や事実を勉強して私たちの中に取り込み、それを土台として、さらに新たな知識や事実を研究して積み重ねていくことが私たちの使命です。私たちの後輩は、先輩と私たちが積み重ねた知識や事実を勉強して、さらによりよい未来のために研究し、新たな知識を発見し、積み重ねていきます。私たちの子孫が読む教科書を作るのは、私たちです。

## 〈節〉と〈品詞〉

ルール 26：節は〈主語＋動詞〉を中心とする意味のまとまりのこと

ルール 27：名詞節は名詞の性質を、副詞節は副詞の性質を持つ

ルール 28：従位接続詞は従属節（名詞節と副詞節）を導く

ルール 29：句読法（コンマ・コロン・セミコロン・ダッシュ）

ルール 30：関係詞は文を名詞節に変換するときに使う記号

ルール 31：関係詞は先行詞の内容を含むことがある

ルール 32：間接疑問は名詞節

ルール 33：分詞の副詞用法

ルール 34：付帯状況は、主節と異なる状況を付け足す副詞

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- ルール 01 で、2 つ以上の語がつながって「1 つの意味のまとまり」となるものを〈句〉と定義しました。実はこれは厳密ではなく、〈主語＋動詞 (SV)〉構造を持つ 1 つの意味のまとまりを句とはいいません。ここで、定義を更新します。

- **【重要】**〈主語＋動詞〉構造を中心とする 1 つの意味のまとまりを〈節〉といいます。

これに対し、〈主語＋動詞〉構造を<sup>・</sup>中心としない 1 つの意味のまとまりを句といいます。

具体的に、節とはどのようなものを説明しましょう。次の例文を見てください。

- When I was five, I lived in Osaka. 「5 歳のとき、私は大阪に住んでいた。」

- この文では、2 つの大きな意味のまとまり、つまり節があると考えます。

□ 1 つは、When I was five 「私が 5 歳だったとき」、

□ もう 1 つは、I lived in Osaka 「私は大阪に住んでいた」です。

※ in Osaka は場所を表す副詞句ですが、節の中に句が含まれることに問題はありません。

- これらの 2 つの節それぞれに〈主語＋動詞〉構造があることを確認してください。

□ When I was five の方は、主語 I と動詞 was の構造を中心とする意味のまとまり、

□ I lived in Osaka の方は、主語 I と動詞 lived の構造を中心とする意味のまとまりです。

□ このように、〈主語＋動詞〉構造を持つ意味のまとまりが〈節〉です。

上の例文は、1 つの文が 2 つの節から成り立っていると考える、ということです。

- 〈主語＋動詞〉を中心とする意味のまとまりを節と定義しますから、例えば、

I lived in Osaka. というピリオドで終わる「文」も、節の一種といえます。

ただし、このような文はふつう、節を 1 つだけ含む文として〈単文〉と呼びます。

- では、I lived in Osaka, but my brother lived in Tokyo.

「私は大阪に住んでいたが、兄(弟)は東京に住んでいた。」という文ではどうでしょうか。

この文の場合、I lived in Osaka と (but)<sup>\*1</sup> my brother lived in Tokyo という 2 つの節は

内容的に対等と考えます。このような文は、対等の節を複数含む文として〈重文〉と呼びます。

- いちばん上の例文の場合、When I was five と I lived in Osaka の節を対等とは考えません。

I lived in Osaka はそれだけで文になれますが、When<sup>\*2</sup> I was five だけでは文になれないからです。

- このようなとき、I lived in Osaka の節を、**文の中心となる節**という意味で〈主節〉といいます。

□ また、When I was five の節を、**主節に従う節**の意味で〈従属節〉といいます。

□ 従属節を含む文を〈複文〉と呼びます。つまり、いちばん上の例文は複文です。

今回は節の定義の説明です。そのまま覚えてください。とくに、次の 2 つは必ず理解してください。

- **【重要】**節とは、〈主語＋動詞 (SV)〉構造を中心とする 1 つの意味のまとまりのことです。

- **【重要】**複文において、文の中心となる節を〈主節〉、それに従う節を〈従属節〉といいます。

## 注

\*1: 「語句や節などをつなぐことば」を〈接続詞〉というが、節と節、名詞と名詞など、対等のものをつなぐ but や and, or などの語を〈等位接続詞〉という。

\*2: 接続詞のうち、対等ではないものをつなぐものを〈従位(従属)接続詞〉という。この When は、従属節を主節につなぐ接続詞なので、従位接続詞である。

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 前の課では、〈主語＋動詞 (SV)〉構造を中心とする 1 つの意味のまとまりを〈節〉といい、主節と従属節に分けられる文を複文と呼ぶことを学びました。

□ 節は、主に〈副詞節〉と〈名詞節〉に分けることができます。<sup>\*1</sup>

□ **【重要】副詞節は副詞の性質を持ち、名詞節は名詞の性質を持ちます。**当然ですね。

具体的に確認するまえに、副詞と名詞の性質のおさらいです。覚えていますか？

□ 副詞は、文の要素ではないので、なくても文法や文意が成立し、置き場所も比較的的自由です。<sup>\*2</sup>  
とき・場所・理由・手段などを表します。

□ 名詞は、文の要素として、主語・目的語・補語になります。人・もの・ことを表します。<sup>\*3</sup>

では、まず副詞節を確認してみましょう。

□ **When I was six, we moved to Gifu.** 「私が 6 歳のとき、私たちは岐阜に引っ越した。」

□ この文には、When I was six と we moved to Gifu の 2 つの節があります。

□ 文の中心となる節、つまり主節は、we moved to Gifu 「私たちは岐阜に引っ越した」です。

□ 主節に従う従属節は When I was six 「私が 6 歳のとき」で、ときを表す意味のまとまりです。

□ この節をなくしても、We moved to Gifu. だけで文法的に正しい文が成立します。

□ この節の置き場所を文末に変えて、We moved to Gifu when I was six. としても、

文全体の意味はほとんど変わりません。以上の性質から、この節は副詞節と判断します。

次に名詞節を確認してみましょう。

□ **I know that he has a secret.** 「彼には秘密があることを私は知っている。」

□ この文では、I know と that has a secret の 2 つの節があり、

□ I know が主節、that he has a secret が主節に従う従属節と考えます。

どちらの節も、〈主語＋動詞〉構造が中心であることを確認してください。

□ この従属節は、動詞 know 「知っている」の目的語と解釈します。目的語は必ず名詞です。<sup>\*4</sup>

□ したがって、この従属節を名詞の意味の 1 つのまとまり、つまり名詞節と解釈します。

例えば、I know his secret. 「私は彼の秘密を知っている。」という文の目的語 his secret を、上の例文では節で述べたもの、と考えればわかりやすいかもしれません。

□ 目的語は文の要素ですから、この名詞節はなくすことも順序を変えることもできません。

□ 副詞節も名詞節も、主節に従う従属節ですが、

□ **【重要】従属節は、節の冒頭に接続詞を置くことで主節と区別できることがあります。**

□ 従属節は、その接続詞から、例えば that 節、when 節などと呼ぶこともあります。

□ 従属節の、名詞や副詞の「1 つの意味のまとまり」としての考え方を理解してください。

## 注

\*1：〈形容詞節〉もあるが、形容詞は必ず名詞を修飾するので、本書ではその全体で名詞節と解釈する。

\*2：副詞については「ルール 11」を参照。

\*3：名詞については「ルール 02」を参照。

\*4：目的語については「ルール 09」を参照。

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 複文は主節と従属節からなり、従属節は接続詞に導かれることがよくあります。

□ このときの接続詞を、従属節を主節につなぐ役割から〈従位（従属）接続詞〉と呼びます。

□ なお、対等のものを等しくつなぐ and, but, or などの接続詞は〈等位接続詞〉と呼びます。<sup>\*1</sup>

この課ではさまざまな接続詞を伴う従属節（副詞節）の例を確認します。考え方を理解してください。

□ Please call me when you have time. 「時間があるときに私に電話してください。」

□ この文には、Please call me<sup>\*2</sup> と when you have time の 2 つの節があります。

□ 主節は Please call me 「私に電話してください」です。

□ 従属節は when you have time 「あなたが（暇な）時間があるとき」です。

□ この従属節（when 節）は、なくても文法や文意が成立するので副詞節、when はときを表す節を導く従位接続詞です。

□ Because I have a fever, I'm going to skip school today.

「私は熱があるので今日は学校を休むつもりだ。」

□ 主節は I'm going to skip school today 「私は今日は学校を休むつもりだ」です。

□ 従属節は Because I have a fever 「私は熱があるので」です。

□ この従属節（because 節）は、なくても文法や文意が成立するので副詞節、because は理由を表す節を導く従位接続詞です。

□ After you eat up everything on your plate, you can eat ice cream.

「自分のお皿の上のものを全部食べたあとに、アイスクリームを食べていいですよ。」

□ 主節は you can eat ice cream 「あなたはアイスクリームを食べてもよい（食べられる）」です。

□ 従属節は After you eat up everything on your plate

「あなたの皿の上のすべてのものをすっかり食べたあと」です。

□ この従属節（after 節）は、なくても文法や文意が成立するので副詞節、after はときを表す節を導く従位接続詞です。

ここでは接続詞に着目して、節という 1 つの意味のまとまりを見てきました。

□ 節はたいいてい句よりも大きな意味のまとまりで、〈主語＋動詞〉の構造を中心とし、

その動詞の意味によって目的語や補語をとり、さらに副詞を含むこともあります。

□ **【重要】** 節は、ふつうの文と同様、文の要素や副詞の意味のまとまりでできています。

節としての大きな意味のまとまり、さらにその中の文の要素や副詞をなす意味のまとまりを、

整然と見定めていくことが大切です。

次の課では、副詞節と名詞節を対比して、節についてまとめます。

## 注

\*1：例えば、Ken and Jim are friends, but Jim and Jack are not. 「ケンとジムは友達だが、ジムとジャックは違う。」の文では、2 つの and は名詞 Ken と Jim、Jim と Jack を等位につなぎ、but はコンマ前後の節を等位につないでいる（重文）。

\*2：動詞の原形や助動詞 Don't など始める文を〈命令文〉といい、これは主語の You を省略した形と考える。Please は「お願いだから」を意味する副詞で、命令口調を和らげる役割を持つ。副詞だからなくても文法や文意が成立し、位置も比較的的自由である。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ **【重要】従位（従属）接続詞は、主節に従う従属節としての、副詞節や名詞節を導きます。**

□ **【重要】副詞節は、その節全体が副詞の性質を持ち、とき・場所・理由・仮定などを表します。**

副詞節は文の要素ではないので、なくても文法や文意が成立し、置き場所も比較的的自由です。

□ **【重要】名詞節は、その節全体が名詞の性質を持ち、人・もの・ことを表します。**

名詞節は、主語、目的語などの文の要素になるので、なくすと文法や文意が成立しません。

このことを踏まえ、接続詞 *if* が導く従属節を含む 2 つの例文を確認します。

□ *if* 節の品詞としての役割と、従位接続詞の役割を理解してください。

□ *If you want this item, you should go to that store.*

「この品物がほしいなら、あの店に行くべきだよ。」

□ 文の中心となる節（主節）は *you should go to that store* 「あなたはあの店に行くべきだ」です。

□ 従属節は *If you want this item* 「あなたがこの品物をほしいなら」です。

□ この従属節（*if* 節）は、文末に移動しても文の意味がほとんど変わらず、  
なくしても文法的な文が成立するので、副詞節です。

□ *if* は〈仮定〉や〈条件〉を表す節を導く従位接続詞です。

次の文は、内容的に上の文に続くものと考えてください。代名詞 *they* は *that store* を表します。

□ *I don't know if they still have the items.*

「その店にまだその品物があるかどうかを、私は知らないけど。」

□ 主節は *I don't know* 「私は知らない」です。

□ 従属節は *if they still have the items*

「彼ら（お店の人たち）がまだその品物を持っているかどうか（を）」（直訳）です。

□ この従属節（*if* 節）は、動詞 *know* の目的語となる名詞の意味のまとまり、つまり名詞節です。

この *if* 節は目的語（文の要素）なので、なくすと文意が成立しなくなります。

□ このときの接続詞 *if* は、接続詞 *whether* 「～かどうか」の代用として使われるものです。

□ *if* 節を名詞節で使う場合、*or not* 「あるいはそうではない」を伴うことがよくあります。例えば、

□ *I don't know if/whether they still have the items or not.*

「その店にまだその品物があるかどうか（あるかないか）を、私は知らないけど。」

としても、上の文と意味はほぼ同じです。

□ 接続詞 *if* 「もしかして」は、それが導く副詞節では仮定や条件を表し、名詞節では選択を表します。

□ **【重要】従属節は、品詞の意味のまとまりとして見定めることが大切です。**

□ 定義にもよりますが、名詞節を導く従位接続詞はあまり多くありません。

基本として、*that* 「～ということ」と *if/whether* 「～かどうか」をしっかり覚えましょう。

□ 副詞節は従位接続詞に導かれることが多く、その接続詞も数多くあります。

とくに、ルール 28 で現れたのは基本的なものばかりです。繰り返し音読して覚えてしまえば

応用力が身につく、知らない接続詞も副詞の性質から判断できるようになるでしょう。

解説が続きました。次のページで演習に取り組んでください。

まとめ4：従位接続詞と従属節

演習 従属節に下線を引き、( ) 内にその役割としての品詞を書き、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. After the rain stopped, we saw a beautiful rainbow. ( )  
「  
」
2. I don't think that all humans are equal. ( )  
「  
」
3. Please stay here until I come back. ( )  
「  
」
4. Let's get out of here before this building collapses. ( )  
「 (動詞 collapse 「崩壊する」 )  
」
5. Because I had too much lunch, I will skip dinner. ( )  
「  
」
6. He said he is coming here pretty soon. ( )  
「 (pretty soon 「すぐに、まもなく」 )  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. After the rain stopped (副詞) 「雨がやんだあと、私たちは美しい虹を見た。」 ※この After は従属節を導く従位接続詞で、従属節はときを表す副詞節。副詞を文の冒頭に置く場合、文の要素との区別のためにコンマを置くのが基本。文末に副詞節を置くときには、コンマは置かないことが多い。
  2. that all humans are equal (名詞) 「私は、すべての人間が平等であるとは思わない(平等とは限らないと思う)。」 ※この that は従位接続詞で、従属節は動詞 think の目的語となる名詞節 (that 節)。なお、not ~ all のように、「すべて/完全」の意味を含む語を前から否定する表現を(部分否定)といい、「すべてが/完全に~とは限らない」という意味になる。また、主節動詞 think や believe などの目的語となる that 節の内容が否定になる場合、ふつう否定語は that 節中ではなく、主節に置く。
  3. until I come back (副詞) 「私が戻るまでここにいてください。」 ※従位接続詞 until 「~まで」が導く副詞節が文末にきている文で、主節は命令文。なお、【重要】ときや条件を表す副詞節においては、**未来の内容であっても現在形で表す**のが原則。ときや条件を表す副詞節はもと
- もと仮の内容となるので、あえて will が含む意思や未来を表現する必要が少ないからである。これに対し、【重要】**名詞節においては、未来の内容には未来の表現が必要。**
4. before this building collapses (副詞) 「このビルが崩壊する前にここから脱出しよう。」 ※従位接続詞 before 「~の前」がときを表す副詞節を導いている。主節は Let's が導く命令文。
  5. Because I had too much lunch (副詞) 「昼食を食べ過ぎたので夕食は抜くつもりだ。」 ※従位接続詞 Because が導く従属節で、理由を表す副詞節。
  6. he is coming here pretty soon (名詞) 「彼はまもなくここに来ると言っていたよ。」 ※動詞 said の目的語となる that 節 (名詞節) だが、従位接続詞 that は省略されている。この省略はとても頻繁に起こる。なお、pretty は「かなり」を意味する副詞で、同じく副詞の soon 「すぐに」を修飾している。また、現在進行形「~しつつある」の意味は、その臨場感から、確実性の高い近い未来の内容を表すことができる。例文を挙げておく。I am leaving Paris for New York tomorrow morning. 「私は明朝、ニューヨークに向けてパリを発つ予定だ。」

年 組 番

氏名

実施日 年 月 日



検印

まとめ4：従位接続詞と従属節

演習 従属節に下線を引き、( ) 内にその役割としての品詞を書き、さらに英文全体を和訳しなさい。

1. I wonder if it will rain or not today. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
2. In case it rains, take your umbrella with you. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
3. Once you see the scenery, you will never forget it. ( )  
「 \_\_\_\_\_ (名詞 scenery 「風景」) \_\_\_\_\_ 」
4. Please call me whenever you need me. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
5. Drink this so that you can have a good night sleep. ( )  
「 \_\_\_\_\_ 」
6. Whether or not you will do it by yourself matters. ( )  
「 \_\_\_\_\_ (動詞 matter 「問題である、重要である」) \_\_\_\_\_ 」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. if it will rain or not (名詞) 「今日は雨が降るのだろうか。」 ※動詞 wonder 「～かどうかと思う、～だろうか」は目的語に if/whether 節をとることが多く、if/whether ～ or not 「～かそうではないか (と思う)」の意味になる。ただし、この名詞節を文頭に置く (つまり、主語とする) とくと、直後に副詞句 or not を続ける表現では whether しか使えない (つまり、whether or not ～とはいうが、<sup>\*</sup>if or not ～とはいわない)。なお、この if 節は名詞節なので、未来を表す will は必要。左ページ3. の解説をもういちど確認すること。
2. In case it rains (副詞) 「雨が降ったときのために、傘を持って行きなさい。」 ※この in case ～ 「～の場合のために」は副詞節を導く従位接続詞 (句)。条件を表すので、未来の内容でも現在形で表す。主節は命令文。
3. Once you see the scenery (副詞) 「一度その風景を見れば、決して忘れないだろう。」 ※once ～ 「いったん～すれば」は、条件を表す副詞節を導く従位接続詞。
4. whenever you need me (副詞) 「必要なときにはいつでも電話してください。」 ※この whenever は、ときを表す接続詞 when に、強調を意味する副詞 ever がくっついて1語になった従位接続詞と考えるとよい。when you need me 「あなたが私を必要とするとき」が、whenever you need me 「あなたが私を必要とするときはいつでも」のように強調されているということ。
5. so that you can have a good night sleep (副詞) 「夜によく眠れるように、これを飲んでください。」 ※接続詞句 so that ～は、続く副詞節中の動詞に助動詞 can や will を伴って、「～するために、～できるように」という〈目的〉を表す意味になる。なお、この that は口語でよく省略される。He tried to lose weight so he could wear the jeans. 「そのジーンズがはけるように、彼は減量しようとした。」
6. Whether or not you will do it by yourself (名詞) 「あなたがそれをひとりでするかしないか (するかどうか) が大切である。」 ※従位接続詞 Whether が導く節が主語となる名詞節で、動詞が matters という文構造。つまり、動詞 matters の前は全体が名詞節である。なお、1. で解説したとおり、この名詞節を <sup>\*</sup>If or not ～とすることはできない。

年 組 番 氏名  
\_\_\_\_\_

実施日 年 月 日

6



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

今回は、コンマ（,）やコロンの（:）などの記号について、はたらきや意味をまとめて確認しましょう。

- コンマは、**文頭の副詞（句・節）を、文の要素や主節と区別するために使います。**
    - Yesterday, I went to a concert. 「昨日、コンサートに行った。」
      - この文では、文頭の副詞 Yesterday を、主語 I 以降と区別するためにコンマが使われています。
  - コンマは、**等位のことを並列するとき、わかりやすくするために使います。**
    - I like reading, but my sons don't. 「私は読書が好きだが、息子たちはそうではない。」
    - He is allergic to meat, milk, honey, and eggs. 「彼は、肉、牛乳、ハチミツ、それに鶏卵にアレルギーがある。」
      - 上の文では、接続詞 but が2つの節を等位接続していることをコンマで明確にしています。
      - 下の文では、前置詞 to の4つの目的語が等位であることをコンマで明確にしています。なお、
        - 3つ以上を並列するときは、最後のものの前にだけ、等位接続詞（and や or）を置きます。
        - 2つの語句を並列するときは and や or でつなぐだけで、原則としてコンマは使いません。
    - 上の3つの例はどれも、コンマを置くことで、文の構造をわかりやすくしています。
  - **【重要】**コンマは、**情報を追加するときに使います。**
    - Ken, my son, is good at dancing. 「ケン、私の息子だが、踊るのが得意だ。」
      - この文では、人名を表す固有名詞<sup>\*1</sup> Ken 「ケン」が my son 「自分の息子」であることを、Ken がだれかを知らない人のために、コンマに続けて説明していると考えます。
      - このコンマに挟まれた部分は、文全体の構造としては重要な部分ではありません。Ken という固有名詞に対して、情報を追加して説明しているだけです。
- ここで〈限定する〉という重要なことばを覚えてください。「絞り込む」という意味です。
- 例えば、「昨日、山に行ったよ。」と言われたら、「どこの、どんな山？」と聞きたくになります。これは、その「山」ということばが漠然としていて、「絞り込まれていない」ことを意味します。逆に言えば、その「山」がどの山なのかを「限定する」必要性が高いということです。
  - 一方、例えば「富士山」という固有名詞が現れたら、それが何かはだれにでもわかります。このことは、「富士山」ということばがすでに「限定されている」ということ、つまり、「富士山」という名詞をそれ以上限定する必要はないということです。
  - 英語では、すでに十分に限定されている名詞、とくに固有名詞をさらに限定することはせずに、コンマを使って情報を追加します。
- 以上のことをコンマについてまとめると、
- **【重要】**コンマは、**固有名詞などの限定された名詞に、情報を追加して説明するときに使います。**
  - **【重要】**コンマは、**名詞を限定する必要があるときには使いません。**
- とくに、情報を追加して説明するコンマの働きを、意識して覚えておいてください。

## 注

\*1：「佐藤さん」や「埼玉県」など人名や地名などの特有な名前を〈固有名詞〉という。これに対し、例えば「人」や「山」などの一般的な名前を〈一般名詞〉という。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- コロン（:）は、具体的な内容を述べる前に置きます。コロンの前後は内容的に等しくなります。  
必要に応じて、頭の中で「つまり、すなわち」などの意味を補うとよいでしょう。
- He is allergic to some foods: meat, milk, honey, and so on.  
「彼はいくつかの食べものにアレルギーがある。つまり、肉、牛乳、ハチミツなどだ。」
- I like reading: it gives me a lot of knowledge.  
「私は読書が好きだ。多くの知識を与えてくれる（から）。」
- My father always says: “Do the right thing.”  
「父はいつも言う。『正しいことをしなさい』と。」
  
- 上の3つの例はどれも、コロンのあとでその前の内容（や理由）を具体的に述べていることに着目してください。
  
- セミコロン（;）は終止符（.）とコンマ（,）を合わせたもので、これらの中間の休止を表すと考えます。
- He has been to Kyoto, Japan; Mumbai, India; and Sydney, Australia.  
「彼は日本の京都、インドのムンバイ、オーストラリアのシドニーに行ったことがある。」
- この例では、都市名と国名をコンマで区切り、そのセットをセミコロンで区切っています。
- I went to the library; my wife went to see a movie.  
「私は図書館に行き、妻は映画を見に行った。」
- この例では、セミコロンは〈, but〉の意味で、等位接続詞の代わりに使われています\*1。  
ただし、前後の節が対比されるなど、関連性が強い必要があります。
  
- ダッシュ（—）は、言い換え、補足説明、まとめなどを述べる前に置き、多少カジュアルに使います。  
コロンと同様、必要に応じて、頭の中で「つまり、すなわち」などの意味を補うとよいでしょう。
- He is allergic to some foods — meat, milk, honey, and so on.  
「（訳はいちばん上の例文と同じ）」
- この例では、ダッシュはコロンと同様に使われていますが、コロンよりもくだけた感じですか。
- Eight students — about one-fifth of the class — were absent from school.  
「8人の生徒、つまりクラスの約5分の1が、学校を休んだ。」
- この例では、ダッシュに挟まれた部分が、直前の Eight students を補足説明しています。  
これは、コンマと同様の使い方ですが、コンマよりも主観的な含みを感じさせるようです。  
ここでは「クラスの約5分の1も」といった感じですか。
- なお、one-fifth の中にある 〈-（ハイフン）〉 は、「前後の語をつなげて1つの語にするもの」と考えて構いません。ダッシュとは長さも役割もまったく違いますから、注意してください。

句読法については、演習は省略します。

注

\*1：セミコロンの直後に however 「しかし」や besides 「さらに」などの〈接続副詞〉を伴う例もある。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

関係詞（関係代名詞と関係副詞）は苦手な人が多いので、まず日本語で解説しましょう。

□ 「ケンが駅である人を見た。」 Ken saw a person at the station.

この日本語は句点（。）で終わっているので〈文〉です。

この文を〈名詞〉に変換してみましょう。いくつか考えられます。英語はまだ見なくてもかまいません。

- 「ケンが駅で見たある人」 a person (who(m)/that) Ken saw at the station
- 「ケンがある人を見た駅」 the station (at which/where) Ken saw a person
- 「駅である人を見たケン」 Ken, who saw a person at the station

これらの3つの日本語すべてが、いちばん上の文が名詞に変換されたものであることを確認してください。

では、英語の解説に入りましょう。関係詞について端的に定義します。

□ **【重要】** 関係詞とは、〈文〉を〈名詞節〉に変換するときを使う記号と考えます。

- できあがった名詞節は、名詞の意味のまとまりですから、主語、目的語、補語などの文の要素に、そのまま組み込むことができます。

ここで、上の3つの右端の英語を見てください。繰り返しますが、どれも文ではありません。

□ これらはすべて、いちばん上の英文を名詞節に変換したものです。イタリック体が関係詞です。

- 名詞節の冒頭に a person 「ある人」、the station 「その駅」、Ken 「ケン」の名詞があり、それぞれの名詞は、その後ろの関係詞を含む部分によって修飾されていると考えます。

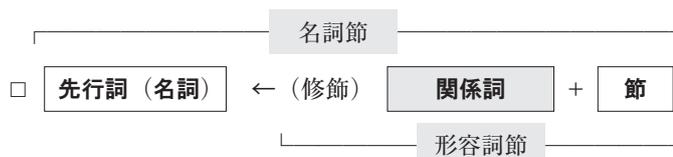
□ **【重要】** これら名詞節の冒頭にある、名詞節の中心となる名詞を〈先行詞〉といいます。

先行詞の後ろは、名詞を修飾する節（〈主語＋動詞〉を中心とする意味のまとまり）です。<sup>\*1</sup>

名詞を修飾するのは形容詞ですから、先行詞の後ろの節は〈形容詞節〉と解釈できます。<sup>\*2</sup>

先行詞を後ろから節で修飾するとき、関係詞はそれらをつなぐ役割をします。

上の関係を図で表すと、次のようになります。



今回は、重要な考え方を学びました。次のことだけ、しっかり覚えてください。

□ **【重要】** 関係詞は、〈文〉を〈名詞節〉に変換するときを使う記号です。

この名詞節は、意味の中心となる先行詞を先頭として、続く関係詞に導かれる節からなります。

つまり関係詞は、名詞の意味のまとまりである名詞節を作るのです。

次回は、関係詞がどのように名詞節を作るかを具体的に見ていきます。複雑に考えてはいけません。

シンプルに理解し、繰り返し音読して、名詞の意味のまとまりを意識できるようにしてください。

注

\*1：便宜的に〈節〉とする。文の主語が先行詞になる場合には、関係詞に続く節の中では主語が欠けるので、厳密な定義として節にはならない。

\*2：形容詞は必ず名詞を修飾するので、本書では先行詞と、それを後ろから修飾する形容詞節をまとめて〈名詞節〉と解釈する。「ルール 27」の脚注を参照。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

左ページの例文を使って、具体的に文を名詞節に変換する方法を見てみましょう。

□ Ken saw a person at the station. 「ケンが駅である人を見た。」〈文〉

これは文です。まずは目的語 a person を先行詞 (名詞の意味の中心) とする名詞節に変換します。

□ a person (who(m) / that) Ken saw at the station 「ケンが駅で見たある人」〈名詞節〉

上の文と名詞節とを、よく見比べてください。

- まず文の、動詞 saw の目的語 a person を、先行詞として先頭に置きます。
- 次に、a person は文の要素で、人を表す名詞ですから、〈関係代名詞〉 who か that を置きます。  
(a person はもとの文の目的語なので、関係代名詞は目的格<sup>\*1</sup>の whom を置くのが正式です。  
ただ、実際には主格の who を使うことが多いようです。that は人にも、ものにも使えます。)
- **【重要】関係代名詞の目的格は、省略することがあります。**
- 最後に、先行詞となった a person を除いた部分をそのまま続ければ、名詞節のできあがりです。

次に、いちばん上の文を、前置詞 at の目的語<sup>\*2</sup> the station を先行詞とする名詞節に変換します。

□ the station (at which / where) Ken saw a person 「ケンがある人を見た駅」〈名詞節〉

- まず文の、前置詞 at の目的語 the station を、先行詞として先頭に置きます。
- 次に、the station はものを表す名詞で、もとの文の前置詞 at に続くものですから、  
at に続けて、ものを表す関係代名詞 which を置きます。
- **【重要】〈前置詞＋関係代名詞〉となる場合、which の代わりに that を置くことはできません。**
- the station は前置詞 at の目的語ですから、関係代名詞 which は目的格です。  
目的格の関係代名詞なので、「前置詞と一緒に」省略できることがあります。
- また、〈前置詞＋名詞〉は副詞句ですから<sup>\*3</sup>、この at which 〈前置詞＋(関係代)名詞〉は  
〈関係副詞〉に置き換えることもできます。  
ここでは at the station は場所を表す副詞句ですから、関係副詞は where を使います。
- 最後に、先行詞とその直後で使った前置詞を除いた部分をそのまま続ければ、できあがりです。
- なお、論理的には<sup>△</sup>the station (which / that) Ken saw a person at とすることもできます。

今回は、文を、動詞や前置詞の「目的語」を先行詞とする名詞節に変換した例を説明しました。  
どちらの名詞節も、「名詞の意味のまとまり」であることを念頭に置いて、何度も音読してください。  
関係代名詞と関係副詞の使い方の違いを簡単にまとめておきましょう。

- **【重要】もとの文の、文の要素である主語や(動詞の)目的語(どちらも必ず名詞)を  
先行詞にするときは、関係代名詞を使います。**
- **【重要】もとの文の、副詞句である〈前置詞＋名詞〉において、名詞(前置詞の目的語)を  
先行詞にするときには、関係代名詞を使う〈前置詞＋which〉のかたちになります。  
〈前置詞＋which〉は、副詞句として、関係副詞 1 語で表現できることもあります。**

注

\*1：名詞の〈格〉については、「ルール 07」や「ルール 09」の脚注 \*3 を参照。

\*2：〈前置詞の目的語〉については、「ルール 09」を参照。

\*3：〈前置詞＋名詞〉を副詞句と考えることについては、「ルール 04」を参照。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

文の主語を先行詞にするときの関係代名詞を説明します。前回と同じ例文を使いましょう。

- Ken saw a person at the station. 「ケンは見つかる人を見た。」〈文〉

この文を、主語の名詞 Ken を先行詞とする名詞節に変換します。

- Ken, who saw a person at the station 「見つかる人を見たケン」〈名詞節〉

- まず上の文の主語 Ken を、先行詞として先頭に置きます。
- 次に、Ken は人を表す名詞ですから、関係代名詞 who（ここでは<sup>x</sup> that は不可<sup>\*1</sup>）を置きます。  
Ken は主語ですから、関係代名詞は主格の who しか置けません。そして、
- **【重要】関係代名詞の主格は、目的格と違って、省略することができません。**
- 最後に、先行詞となった Ken を除いた部分をそのまま続ければ、名詞節のできあがりです。

ここで1つ注意しなくてはならないのがコンマ（,）です。ルール 29 をもういちど確認してください。

- コンマは、**固有名詞などのすでに限定された名詞に、情報を追加して説明するときに使います。**
- コンマは、**名詞を限定する必要があるときには使いません。**
- Ken 「ケン」は具体的な名前、つまり固有名詞で、だれを指すのかが明らかになっています。  
このことを言い換えると、Ken がだれなのかはすでに絞り込まれているということです。  
したがって、関係代名詞が導く節によって、Ken をさらに限定することはしないと考えるのです。
- このようなとき、関係代名詞が導く節は、上の名詞節のように、  
先行詞と関係代名詞の間にコンマを置き、先行詞に情報を追加して説明することになります。

対比のために、もう1つ別の文と、その主語を名詞節に変換したものを見てみましょう。

- People saw a strange light in the night sky. 「人々は夜空に奇妙な光を見た。」〈文〉

この文を、主語の People を先行詞とする名詞節に変換します。

- people who saw a strange light in the night sky 「夜空に奇妙な光を見た人々」〈名詞節〉

- まず上の文の主語 People を先行詞として先頭に、次いで人を表す関係代名詞 who<sup>\*2</sup> を置きます。
- 先行詞となった People を除いた部分を続ければ、名詞節のできあがりです。
- 文の主語 people 「人々」は一般名詞です。関係詞以降で限定するので、コンマは不要です。
- 関係代名詞が導く節が、先行詞（名詞）を限定する必要性が高いときはコンマを使いません。
- この用法を〈**限定用法**（あるいは**制限用法**）〉といいます。
- 一方、先行詞が固有名詞などですでに限定されているときは、コンマを使って説明を追加します。
- この用法を〈**継続用法**（あるいは**非制限用法**）〉といいます。

最後にもういちど、もっとも大切なことを確認してください。

- **【重要】関係詞（関係代名詞と関係副詞）は、先行詞を中心とする名詞節を導きます。**  
この名詞節は、そのまま、主語や目的語、補語などの文の要素になることができます。

注

\*1：関係代名詞 that は、which よりも限定する力が強い  
\*2：that でもよい。  
ので、コンマとともに使うことはできない。

ルール 30：関係詞は文を名詞節に変換するときを使う記号

演習 英文を、下線部を先行詞とする名詞節に変換し、その名詞節を和訳しなさい。節なので句点（。）は不要です。

1. The customer was looking for the book. 「  
.....」
2. The customer was looking for the book. 「  
.....」
3. I painted a picture last week. 「  
.....」
4. She was going to take the flight. 「 (take a flight 「飛行便に乗る」)  
.....」
5. Lake Biwa is the largest lake in Japan. 「  
.....」
6. I ate hamburgers at the restaurant. 「 (名詞 hamburger 「ハンバーグ」)  
.....」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. the customer who/that was looking for the book 「その本を探していたお客」 ※先行詞 the customer はもとの文の主語で、人を表すので、関係詞は関係代名詞の主格 who (または that) を使う。あとは動詞 was 以降をそのまま続けることで名詞節になる。これが名詞の意味の1つのまとめ (名詞節) であることを意識する。
2. the book (which/that) the customer was looking for (または the book for which the customer was looking) 「お客が探していたその本」 ※先行詞 the book は、もとの文の句動詞 look for の目的語で、ものを表すので、関係詞は関係代名詞の目的格 which (または that) を使う。目的格の関係代名詞は省略されることも多い。そのあとは、先行詞を除いた部分をそのまま続けられれば名詞節ができる。または、for the book を〈前置詞 + 副詞〉の副詞句 for which のかたちにして、先行詞に続けてもよい。なお、この先行詞はときや場所などを表すものではないので、関係副詞を使うことはできない。
3. a picture (which/that) I painted last week 「私が先週描いた絵」 ※先行詞 a picture はもので、もとの文の動詞 paint 「塗る、描く」の目的語なので、関係詞は目的格の関係代名詞 which または that を使う。目的格なので、省略してもよい。
4. the flight (which/that) she was going to take 「彼女が乗るつもりだった飛行便」 ※先行詞 the flight は動詞 take の目的語。ものを表すので関係代名詞の目的格 which または that を使う。目的格なので省略してもよい。
5. Lake Biwa, which is the largest lake in Japan 「琵琶湖、それは日本で最大の湖」 ※先行詞はすでに限定されている固有名詞なので、関係詞以降はコンマを使う継続用法で説明することになる。先行詞はもとの文の主語 (必ず名詞) なので、主格の which をコンマに続ける。that には継続用法がないので使えない。なお、実際にはこの which is も省略されることがあり、このときの先行詞とコンマの後ろの名詞は内容的にイコールとなる。このときのコンマを〈同格のコンマ〉という。
6. the restaurant (where/at which) I ate hamburgers または the restaurant (which/that) I ate hamburgers at 「私がハンバーグを食べたレストラン」 ※先行詞は場所を表す名詞なので、副詞句として〈前置詞 + (関係代名詞)〉の at which か関係副詞 where が使える。あるいは、前置詞の目的語として関係代名詞の which を使ってもよい。目的語だから、省略することもできる。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

ここでは関係副詞について、関係代名詞と対比しながら確認してみましょう。

- 「**関係代名詞も関係副詞も、先行詞を中心とした名詞節をつくる**」という役割に変わりはありません。
- 関係代名詞は、先行詞が「人」のときには主に who（目的格 whom）を、先行詞が「もの」や「こと」のときには主に which<sup>\*1</sup> を、先行詞を限定する必要性が高いときには that を使います。
- 一方、副詞はときや場所、理由や方法などを表しますから、関係副詞は、先行詞となる名詞が「とき」を表すときに when、「場所」を表すときに where、「理由」(the reason) のときに why、「方法」(the way) のときに how を使います。

ここで、関係代名詞と関係副詞の違いを理解するために、次の2つの名詞節を見比べてください。

- the house where we spent our childhood 「私たちが幼少期を過ごした家」〈名詞節〉
- the house that the hurricane destroyed 「ハリケーンが破壊した家」〈名詞節〉
- 上の名詞節では関係副詞 where が、下では関係代名詞 that が使われています。なぜでしょうか？  
答えは、上の先行詞 the house は「場所」を、下の先行詞 the house は「もの」を表すからです。  
どちらも同じ名詞ですが、品詞としての役割が違うのです<sup>\*2</sup>。それぞれを文になおしてみると、
- We spent our childhood at the house. 「私たちはその家で幼少期を過ごした。」〈文〉
- The hurricane destroyed the house. 「そのハリケーンがその家を破壊した。」〈文〉
- 下の文における the house は、文の要素である目的語となる名詞です。一方、上の文における the house は、at the house という「場所」を表す副詞句の一部となる名詞です。つまり、
- 先行詞がもとの文の「文の要素（主語や目的語）」であるときには関係代名詞を使います。一方、
- 先行詞がもとの文の「副詞句の中の名詞」で、その前置詞も含めるときに関係副詞を使います。  
前置詞を含めないときには、その名詞は前置詞の目的語ですから、関係代名詞を使って、  
the house at which we spent our childhood と表現することになるのです。

このことから、関係代名詞がつくる名詞節と、関係副詞がつくる名詞節には、次の違いが生まれます。

- **【重要】関係代名詞に続く節の中では、先行詞として前に出された主語や目的語が欠落します。**  
関係代名詞は、もとなる文の主語や目的語を先行詞（節の中心となる名詞）にするからです。
- **【重要】関係副詞に続く節の中では、文の要素の欠落はありません。**  
関係副詞は、もとなる文の副詞句〈前置詞＋名詞〉の名詞部分を先行詞にするからです。
- 上の2つの名詞節で確認すると、関係副詞 where に続く節 we spent our childhood 「私たちは幼少期を過ごした」に、主語や目的語の文の要素の欠落はありません（SVO）。  
先行詞が（文の要素ではない）副詞句の一部で、前置詞が関係副詞に含まれるからです。
- 一方、関係代名詞 that に続く節 the hurricane destroyed 「ハリケーンは破壊した」には、「破壊した」目標、つまり目的語が欠落しています。もとの文の目的語（文の要素）が、先行詞として前に置かれているからです。

注

\*1：関係代名詞の which や that にも、名詞だから目的格はある。かたがが主格と変わらないだけである。

\*2：同じ語であっても、役割としての品詞が同じとは限らない（「まとめ2」の解説を参照）。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

where 以外の関係副詞についても、名詞節の例を見ながら確認してみましょう。

□ the day when I was born 「私が生まれた日」〈名詞節〉

- この名詞節は例えば、I was born on the day. 「私はその日に生まれた。」の文の、副詞句中の名詞 the day を先行詞とするものです。前置詞 on は関係副詞 when に含まれます。関係代名詞 which を使って、the day on which I was born とすることもできます。

□ the reason why she got angry 「彼女が腹を立てた理由」〈名詞節〉

- この名詞節は、She got angry for the reason. 「彼女はその理由で腹を立てたのだ。」の文の、副詞句中の名詞 the reason を先行詞とするものです。前置詞 for は関係副詞 why に含まれます。関係代名詞を使って、the reason for which she got angry とすることもできます。

【重要】関係副詞 why が先行詞をとるとき、その先行詞は reason(s) です。

□ the way you eat fish 「あなたが魚を食べる方法」〈名詞節〉

- この名詞節は、例えば You eat fish in this way. 「あなたはこの方法で魚を食べる。」の文の、副詞句中の名詞 this way を先行詞とするものです。前置詞 in は関係副詞 how に含まれます。(※ in the way 「邪魔になる」では意味が不自然になるので、便宜的に this に直しています)

【重要】関係副詞 how の先行詞は way(s) となるはずなのですが、例外的に、  
関係副詞 how と先行詞 way(s) とは、一緒に使うことができません。

つまり、× the way how という表現はしないということです。ただし、the way の代わりに関係副詞 how だけを使って、how you eat fish と表現することもできます。また、関係代名詞を使って、the way in which you eat fish とすることもできます。

ここで大切なことを思い出してください。

- 関係代名詞の目的格は、原則として省略できます (より厳密には、コンマのない制限用法の場合)。関係副詞は、先行詞が副詞句中の名詞、つまり前置詞の目的語なので、すべて目的格です。よって、【重要】すべての関係副詞は、原則として省略できます (制限用法の場合)。

- 具体的には、これまで例に挙げた関係副詞による名詞節は、the house we spent our childhood, the day I was born, the reason she got angry などとも表現できるということです。

実は、関係詞に関する表現には数多くの例外や解釈があります。

関係詞は、疑問代名詞 (who や which など) や疑問副詞 (where や where など) とかたちが同じで、疑問詞疑問文や、あとの課で学ぶ〈間接疑問〉とも密接な関係があるからです。

ただし、これらの関係や例外事項を事細かに説明することは、本書ではしません。

原則を理解し、音読を繰り返すことで、正しい「意味のまとまり」のイメージができてきます。

そのイメージができれば、これらの例外に自分で対処できる応用力が身についているはずですよ。

また、上に述べた関係性も、必要に応じて自分で考え、解釈できるようになるでしょう。

理屈っぽい解説が続きました。次ページの演習で、これまでに学んだ内容の理解を確認してください。

演習 和訳しなさい。

1. The customer who was looking for the book is now gone. (形容詞 gone 「いなくなった」)  
「  
」
2. The book the customer was looking for is out of stock. (out of stock 「在庫切れで」)  
「  
」
3. I'm not at all satisfied with the picture that I painted last week.  
「  
(be satisfied with ~ 「～に満足している」、not at all 「まったく～ない」)  
」
4. The flight that she was going to take was delayed because of the storm.  
「  
(動詞 delay 「遅らせる」)  
」
5. Lake Biwa, which is the largest lake in Japan, is the source of water for the Kansai area.  
「  
(名詞 source 「みなもと」)  
」
6. The restaurant I went to with Ken last month is now very crowded.  
「  
(形容詞 crowded 「混雑して」)  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「その本を探していたお客はもういなくなりました。」 ※書店員の視点で考えるとよい。The customer was looking for the book. の文が、主格の関係代名詞を使って The customer を中心 (先行詞) とする名詞節に変換され、文の主語になったもの。単純化すれば、The customer is now gone. 「客は今はいなくなりました。」ということ。
2. 「お客が探していた本は在庫切れである。」 ※ The customer was looking for the book. の文が、目的格の関係代名詞を使って the book を中心 (先行詞) とする名詞節に変換され、文の主語になったもの。単純化すれば、The book is out of stock. 「その本は売り切れだ。」となる。
3. 「先週描いた絵は、私はまったく満足していない。」 ※ be satisfied with ~ 「(人が) ～に満足している」。この～の部分 (前置詞 with の目的語) に、I painted the picture last week. の文を、その目的語 the picture を先行詞とする名詞節に変換したものが、そのまま組み込まれたかたち。単純化すると、I'm not satisfied with the picture. 「私はその絵に満足してない。」となる。not ~ at all は「まったく～ない」で、at all は not を強調する副詞句。
4. 「彼女が乗るつもりだった飛行便は嵐のために遅れていた。」 ※ She was going to take the flight. の文が、take の目的語 the flight を先行詞とする名詞節に変換され、それがそのまま主語となっているかたち。be delayed は「(遅らせられる→) 遅れる」、because of ~ 「～が原因で」は理由を表す副詞句 (前置詞 + 名詞) のかたちで、because of は前置詞句と解釈する)。
5. 「琵琶湖は、日本で最大の湖だが、関西地方の水源である。」 ※先行詞 Lake Biwa は固有名詞なので、関係代名詞が導く節で限定できない。よって、コンマに続ける関係代名詞以降の節で追加説明することになる。なお、このときの which is は省略されることも多い。
6. 「先月ケンと行ったレストランは、今はとても混雑している。」 ※ I went to the restaurant with Ken last month. の文が、前置詞 to の目的語 the restaurant を先行詞とする名詞節に変換され、それが主語になった文。The restaurant 直後の which / that が省略されている。went to のあとが欠落していることに注意。

|   |   |   |       |
|---|---|---|-------|
| 年 | 組 | 番 | 氏名    |
|   |   |   | 実施日   |
|   |   |   | 年 月 日 |

/6



演習 和訳しなさい。

1. This is the reason why she got angry with him.  
「  
」
2. I know a place where we can see a lot of fireflies. (名詞 firefly 「ホタル」)  
「  
」
3. The way you use chopsticks is very beautiful.  
「  
」
4. Is there a day when you are free next week?  
「  
」
5. This is how a solar eclipse happens. (solar eclipse 「日食」)  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「これが、彼女が彼に腹を立てた理由だ。/ こういうわけで彼女は彼に腹を立てたのだ。」 ※ She got angry with him for the reason. 「その理由で彼女は彼に腹を立てた。」という文が、副詞句 for the reason の (前置詞 for の目的語である) the reason を先行詞として、その先行詞が関係副詞 why 以降によって修飾されることで名詞節に変換されたと考える。つまり、この文の the reason 以降は、主語 This と内容的にイコールの、補語となる名詞。前置詞 for は副詞句の一部なので、関係副詞の中に吸収されたと考える。なお、この関係副詞 why と先行詞 the reason のいずれかは省略することができ、This is why SV. 「これが SV の理由だ / こういうわけで SV だ」という慣用表現もある。また、関係副詞 why は、ここでは関係代名詞を使って for which と表現できる。
2. 「私はたくさんのホタルが見られる場所を知っている。」 ※ We can see a lot of fireflies in a place. 「ある場所でたくさんのホタルを見ることができる。」という文を、副詞句 in a place の (前置詞 in の目的語である) a place を先行詞とする名詞節に変換したものが、動詞 know の目的語となっている。a place 以降が名詞の意味の 1 つのまとまりになっていることに注意する。なお、この関係副詞 where は、関係代名詞を使った in which としてもよい。また、先行詞 a place を省略することもできるが、このときの where は先行詞を含む関係副詞と解釈できる。
3. 「あなたの箸の使い方はとてもすばらしい。」 ※ You use chopsticks in the way. 「あなたはその方法でお箸を

- 使う。」という文が、先行詞を The way とする名詞節に変換され、文の主語となったかたち。The way のあとに関係副詞 how が省略されているのだが、the way と how を一緒に使うことはできないルールがある。ただ、how の代わりに関係代名詞を使った in which と一緒に使うことはできる。この The way は、先行詞を含む関係副詞 How とすることもできる。いろいろ表現のしかたはあるが、be 動詞 is の前が、主語としての、1 つの名詞の意味のまとまりであることを意識する。
4. 「来週、あなたが暇な日はありますか。」 ※ There is / are 構文の疑問文。主語にあたる部分は、先行詞 a day が関係副詞 when 以降に後置修飾される名詞節。You are free on a day. 「あなたはとある日に自由である。」の副詞句の中の目的語 a day が先行詞となり、関係副詞 when 以降で後置修飾されて名詞節になっている。when の代わりに関係代名詞を使って on which としてもよいし、省略してもよい。
  5. 「これが日食が起こる仕組みだ。/ このようにして日食は起こる。」 ※ how 以降は、関係副詞 how が導く名詞節で、主語 This と内容的にイコールになる補語。how の前の先行詞 the way が省略されていると考える (この how は the way と交換できるが、how と the way を一緒に使うことはできない)。1. で解説した This is why SV. と同様、This is how SV. 「これが SV の様子だ / このように SV だ」の慣用表現として覚えてしまうとよい。

年 組 番

氏名

実施日

年

月

日

|  |
|--|
|  |
|--|

検印

5

## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 関係代名詞と関係副詞は、先行詞としての名詞と、それを修飾する形容詞節とをつなぐことで、その全体で先行詞を中心とする名詞節をつくります（「ルール 30」の図を見返してください）。
- とところで、先行詞となる名詞が「もの、こと」そのものを表すことば（thing や something）のとき、あるいは場所・とき・方法・理由などの副詞の性質そのものを表すことば（place, time, way, reason など）のとき、この先行詞が関係詞の中に含まれることがあります。

具体的に例を見ていきましょう。

- I had something that you needed. 「私はあなたが必要とした何かを持っていた。」

- この文の something 以降は動詞 had (have の過去形) の目的語となる名詞節です。
- この名詞節は、You needed something. 「あなたは何かを必要としていた。」という文を、関係代名詞 that を使って、目的語 something を先行詞とする名詞節に変換したものです。
- **【重要】**このとき、something that の部分は、関係代名詞 what の 1 語で表すことができます。

- I had what you needed. 「私はあなたが必要としたものを持っていた。」

- この英文は上の英文とほぼ同じ意味で、名詞節 what you needed が動詞 had の目的語です。訳が多少違いますが、内容的には同じことを確認してください。

- How he escaped from prison is still unknown. 「彼が刑務所から脱獄した方法はまだ知られていない。」

- 関係副詞 How の前に、先行詞 The way が省略されていると考えます。ただし、\* the way how という表現はなく、The way か How のどちらかを使う必要があります。つまり、The way he escaped from prison も、主語として正しい名詞節です。

- Nobody knows when and where the universe will end. 「いつどこで宇宙が終わるのか、だれも知らない。」

- 関係副詞 when の前に the time (when the universe will end) が、同じく関係副詞 where の前に the place が、それぞれ省略されていると考えます。

**【重要】**関係詞が先行詞の内容を含むことで、関係詞自体が先行詞として名詞節を導くことがあります。

この名詞節の表現をものにできると、とても便利です。いくつか例を挙げますのでそのまま覚えましょう。

- what is important 「大切なこと」
- how she passed the exam 「彼女が試験に受かった方法」
- why your suggestion was rejected 「あなたの提案が却下された理由」
- when I should apologize to him 「私が彼に謝るべきとき」
- where she should go 「彼女が行くべき場所」

## 注

演習 和訳しなさい。

1. She didn't know where she should go.  
「  
」
2. Would you let me know how you learned English?  
「  
」
3. I need to understand why he accepted her offer, not mine.  
「  
」
4. Tell me when you'll leave for Germany, please.  
「  
」
5. What I think is important is that you should act so that people can believe in you.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「彼女は行くべき場所を知らなかった / どこへ行くべきかわからなかった。」 ※動詞 know の目的語が、先行詞 the place を含む関係副詞 where が導く名詞節になっているかたち。なお、この名詞節は、where to go 「どこに行くべきか、行くべき場所」のように、〈疑問詞 + to 不定詞〉の名詞句のかたちすることもできる。主節と従属節の主語が同じ (she) だからである。
2. 「あなたがどのように英語を学んだのか私に教えていただけますか。」 ※動詞 know の目的語は、先行詞 the way を含む関係副詞 how が導く名詞節。なお、この名詞節は、疑問詞疑問文を平叙文の語順にした〈間接疑問〉とも解釈できる。間接疑問については次の課で扱う。なお、Would/ Could you ~? は Will/ Can you ~? よりも控えめで丁寧な依頼を表す。
3. 「彼が私の申し出ではなく彼女のものを受け入れた理由を、私は理解する必要がある。」 ※動詞 (need to) understand の目的語が、先行詞 the reason を含む関係副詞 why が導く名詞節になっている。コンマのあとは、動詞 accepted の目的語 her offer に対する情報の追加と考えればよい (mine = my offer)。
4. 「あなたがドイツに向けていつ出発するつもりか教えてください。」 ※動詞 Tell の直接目的語が、先行詞 the time を含む関係副詞 when が導く名詞節。ちなみに、Tell me when you leave for Germany. のとき、when

以降はときを表す副詞節になり、「ドイツに向けて出発するときは教えて(言って)ください。」の意味になる。これは、節中の助動詞 will の有無で判断できる。ときや条件を表す副詞節においては未来の内容でも現在形で表すのが基本で、名詞節においては未来の内容には未来表現が必要だからである。

5. 「私が大切だと思うのは、人々に信用されるように行動すべきだということだ (直訳：人々があなたを信用できるようにあなたは行動すべきだということだ)。」 ※この文の主語 What I think is important は、I think something is important. 「私は何かが大切だと思う。」という文の、動詞 think に続く that 節 (that は省略されている) の主語 something を先行詞とする名詞節に変換したもので、something that I think is important の先行詞と関係代名詞を what の 1 語で表したものだ。この、主節 I think がつながるかたちの関係代名詞を〈連鎖関係代名詞〉といい、think のほかに believe などの that 節を伴う動詞で見受けられる。用語はさておき、何度も音読して覚えること。2 番目の is (述語動詞) に続くのは名詞節となる that 節 (補語)。この that 節はさらに、主節の you should act と副詞節の so that SV 「SV するように」に分かれる。少し複雑に感じるだろうが、これまでの内容が理解できていれば構造はわかるはず。なお、you が「(一般的な) 人、人々」を表すときは「あなた」と訳さない。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

□  
 / 5



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 例えば「あなたは何歳ですか。」と尋ねるとき、How old are you? と表現します。これを、  
「私は彼に、あなたは何歳ですかと尋ねた。」というかたちにするとき、2通りの表現方法があります。
- I asked him, “How old are you?”      「私は彼に『あなたは何歳ですか』と尋ねた。」
- I asked him how old he was.                      「私は彼に、彼が何歳かを尋ねた。」
- 上の文は、尋ねた部分が引用符 (“ ”) で囲まれ、実際の発話そのまま表現されています。  
このような表現を〈直接話法〉といいます。
- 一方、下の文では引用符が外れ、その内容が地の文<sup>\*1</sup>に取り込まれています。  
このような表現を〈間接話法〉といいます。
- どちらの文でも、引用符の内容とそれに対応する部分は、それぞれの動詞の目的語と解釈できます。
- ただし、間接話法では、引用符の内容に対応する部分に相対的な調整が必要になります。  
この例では、直接話法での現在時制が過去時制<sup>\*2</sup>に、you が he に調整されています。
- もっとも大きな調整は〈主語→動詞〉の順序への変換です。  
直接話法では、are you、つまり疑問文の〈(助) 動詞→主語〉の順序ですが、  
間接話法では、he was、つまり平叙文の〈主語→動詞〉の順序になっています。<sup>\*3</sup>
- このように、**疑問詞疑問文が地の文に取り込まれ、名詞節となったものを〈間接疑問〉**といい、  
**間接疑問を含む文を〈間接疑問文〉**といいます。
- 間接疑問文は「間接疑問を含む文」の意味で、疑問符 (?) で終わる疑問文とは限りません。
- **【重要】疑問詞疑問文は、平叙文の語順にすることで名詞節になります。**いくつか確認してみましょう。
- Where am I?                      「ここはどこですか (私はどこにいますか)。」〈疑問詞疑問文〉
- where I am                      「私がどこにいるか / 私のいるところ」〈間接疑問 (名詞節)〉
- What do you need?                      「何が必要ですか。」〈疑問詞疑問文〉
- what you need                      「あなたは何が必要か / あなたに必要なもの」〈間接疑問 (名詞節)〉
- ここで思い出してほしいのが、先行詞を必要としない (先行詞をその中に含む) 関係詞が導く名詞節です。直前のルール 31 を確認してください。
- 例えば、I am in the place. 「私はその場所にいる。」という文を、the place を先行詞とする the place (where / in which) I am という名詞節に変換し、さらに先行詞を関係副詞 where に含めれば、関係詞節 where I am 「私のいるところ」(名詞節) になります。  
これは、上の間接疑問とまったく同じかたちです。
- このような場合、名詞節が間接疑問なのか関係詞節なのかを見定める必要はありません。  
名詞節としての意味のまとまりがわかれば、それでよいのです。

注

\*1：この「地の文」とは、ここでは「会話文」の反対語の意味で使っている。  
\*2：ここではルールに則して主節動詞 asked に合わせて過去時制に変えたが、実際は文脈による。例えば、尋ねたのもこのことばを発したのも「今日」であれば、「彼」の

年齢が変わることはないのだから、I asked him how old he is. (is は現在形) でよい。  
\*3：疑問詞が主語のときの疑問文はもとから〈主語→動詞〉の順になるので、順序は変わらない (「ルール 16」の解説を参照)。

演習 英文を、間接疑問に変換し、その名詞節を和訳しなさい。

1. How much money did he have with him?

「  
 .....  
 」

2. Why was that boy crying?

「  
 .....  
 」

3. What does she study English for?

「  
 .....  
 」

4. When will you come home?

「  
 .....  
 」

5. What brought him here?

「  
 .....  
 」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. how much money he had with him 「彼が（そのとき）いくらお金を持っていたか（ということ）」 ※一般動詞の過去形の疑問文。〈(助) 動詞→主語〉の順序を〈主語→動詞〉に戻すことで名詞節になる。ここでは did he have の順序を he had にすればよい。
2. why that boy was crying 「なぜあの少年は泣いていたのか（ということ）」 ※be 動詞の過去進行形の疑問文。was that boy を that boy was の順序に変えれば間接疑問の名詞節になる。この名詞節は、(the reason) why that boy was crying という、関係副詞 why を伴う名詞節と考えることもできる。
3. what she studies English for 「何のために彼女は英語を勉強するのか（ということ）」 ※一般動詞の現在形の疑問文。does she study を she studies に変えれば間接疑問になる。なお、この疑問代名詞 what は前置詞 for の目的語で、What VS for? 「何のために SV か？」は、

- ここでは理由を尋ねる Why VS? 「なぜ SV か？」とほぼ同じ意味と考えてよい。
4. when you will come home 「いつあなたが帰宅するか」 ※一般動詞の未来表現の疑問文。will you come を you will come の順序に変える。名詞節なので will は必要。名詞節の when は関係副詞と解釈してもよい。
5. what brought him here 「何が彼をここに連れてきたか / 彼をここに連れてきたもの / 彼がここへ来た理由」 ※疑問代名詞 what が主語なので、順序を変えなくても名詞節になる。what は関係代名詞と解釈してもよい。
- ※解説では触れていないが、Yes/No 疑問文も間接疑問にすることはできる。Yes/No 疑問文の〈(助) 動詞→主語〉を〈主語→動詞〉の順序にして、冒頭に従位接続詞 whether 「～かどうか」をつければ間接疑問となる（間接疑問が主語以外の場合は if でもよい）。もっとも、名詞節であることと、その意味がわかっていれば十分である。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

5



凡例： ㊦ 主語、㊧ 動詞、㊨ 目的語、㊩ 補語となる形容詞、㊪ 副詞 など

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

これまでいくつかの種類の名詞節を解説してきました。複雑に見える構造の文は、名詞節を見定めればすっきりすることがよくあります。ここでまとめておきましょう。

- ㊦ [The fact ㊫ that ㊦ the actors ㊧ got ㊩ married] ㊧ surprised ㊨ the whole country. 「その俳優たちが結婚したことに国じゅうが驚いた。」

□ 主語となる名詞が **that 節** で構成されている文です。that 節とは、例えば I think that ~. の、動詞 think の目的語になる that ~の部分で、名詞の意味の1つのまとまり（名詞節）です。接続詞 That から文を始めても文法的に間違いではないのですが、that 節を文頭に置くときは、The fact 「事実、こと」を先に置いてから that 節を続けることがよくあります。

□ このような、名詞（ここでは the fact）と that 以降の名詞節が等しい内容（同格）になるとき、このような that を **〈同格の that〉** といいます。同格の that を導く名詞は、the fact のほか、the news、the rumor 「うわさ」、the evidence 「証拠」などの抽象名詞です。

- ㊦ I ㊧ am ㊩ really sorry ㊪ [ ㊫ for ㊨ { ㊩ what ㊦ I ㊧ have done ㊪ to you } ]. 「あなたにこれまでしてきたことを本当に申し訳なく思います。」

□ 〈前置詞＋名詞〉は副詞句ですが、前置詞 for に続く前置詞の目的語が、先行詞を要さない（その中に含む）**関係代名詞** what 「もの、こと」に導かれる名詞節になっています。つまり、what I have done to you 「私があなたにしてきたこと」が名詞の意味の1つのまとまりです。なお、what が含む先行詞（something など）は、動詞 have done に続く目的語ですから、この関係代名詞 what は目的格です。

- ㊧ [Did ㊦ you know] ㊨ [ ㊪ how far ㊦ it ㊧ is ㊪ from the earth to the sun ]? 「地球から太陽までの距離（どれくらい遠いか）をご存じですか。」<sup>\*1</sup>

□ 動詞 know の目的語に**間接疑問**が組み込まれています。もともとの疑問文 How far is it from the earth to the sun? 「地球から太陽まではどれくらい遠いのですか。」を、〈主語→動詞〉の平叙文の順序（it is）にすることで名詞節としたものです。なお、このときの主語 it は〈距離〉や〈時間〉、〈天候〉、〈明暗〉などを漠然と表すもので、訳す必要はありません。

- ㊦ ㊧ That's ㊩ [ ㊪ why ㊦ I ㊧ left ㊨ school ㊫ and ㊧ started working ]. 「そういうわけで、私は学校をやめて働き始めたのだ（それが、私が学校をやめて働き始めた理由だ。）」

□ 先行詞 the reason を含む**関係副詞** why が導く関係副詞節が、be 動詞 is に続く補語となる名詞（節）として組み込まれています。この名詞節は、疑問文 Why did I leave school and start working? を、間接疑問（名詞節）に変換したものと考えてもかまいません。

注

\*1：この間接疑問に対する答えは、例えば It is eight light-minutes (distant/away) from the earth to the sun. 「地球から太陽までは8光分（光が8分間に進む距離）離れている。」となる。なお、far は具体的な数字と一緒に使うことはないで、ここでは数字を伴える形容詞

distant 「距離がある、遠く離れている」や away 「離れている」が使えるが、よく省略される。ちなみに、過去形 Did you know には仮定的なニュアンスがあり、現在形 Do you know に比べて、より控えめで礼儀正しい表現とされる。

まとめ 5：名詞節

演習 和訳しなさい。

1. I am not sure if his story is true.  
「」
2. Didn't your doctor tell you how often you have to take this medicine?  
「」
3. Do you remember when and where you lost your wallet?  
「」
4. The movie is about a man, Neo, who keeps having the feeling that something is wrong with what he thinks is reality. (北海道大 2021)  
「」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「彼の話が本当か私には定かではない。」 ※ be sure 「確かである」は、その目標を表すのに前置詞 of や about を使って目的語をとることもできるし、that 節や if 節（名詞節）を続けることもできる。この if 節（whether 節でもよい）は、Is his story true? 「彼の話は本当ですか。」という疑問文を平叙文の順序にした、Yes/No 疑問文の間接疑問と判断できる。
2. 「この薬をどのような頻度で服用しなくてはならないのか、医者には教えてくれなかったのですか。」 ※動詞 tell は目的語を 2 つとれる。ここでは直接目的語が間接疑問の how often SV のかたち。もとの疑問文は How often do you have to take this medicine? 「どんな頻度で（どのくらい頻繁に）あなたはこの薬を飲まなくてはならないのですか。」で、〈(助) 動詞→主語〉の疑問文の順序を〈主語→動詞〉の平叙文の順序に直すことで、間接疑問の名詞節となったもの。
3. 「財布をなくしたときと場所を覚えていますか。/ いつどこで財布をなくしたか、覚えていますか。」 ※動詞 remember の目的語が、関係副詞 when と where が導く名詞節。the time when and the place where you lost your wallet の、それぞれの関係副詞の先行詞が省略された（関係副詞に含まれた）ものと考えられる。あるいは間接疑問と解釈すれば、When and where did you lose your wallet? の疑問文が、疑問文の順序 did you lose を平叙文の順序 you lost にすることで、名詞節に変換したものといえる。
4. 「その映画はネオという男性についてのもので、彼は自分が現実と考えるものがなにかおかしいという感覚にとらわれている。」 ※文構造は、主The movie 動is 副[about a man, Neo, 「その映画はある男性、ネオについてのものだ」 関代who 動keeps having 「彼は持ち続ける」 目{the feeling that something is wrong with 目[[what he thinks is reality]]}]. 「彼が現実と考えるものがなにかおかしいという感覚を」というかたち。文全体の構造は SV の第 1 文型だが、最初のコンマ以降はすべて、関係代名詞 who の非制限用法（「ルール 30」を参照）が a man を追加説明しているものと考えられる。keeps having 「持ち続ける」の目的語の中心は the feeling で、この名詞が同格の that（左ページ最初の例文の解説を参照）に続く部分によって説明されている。something is wrong with ～は「～には何か違うところがある / 何かがおかしい」の意味。この前置詞 with の目的語 what he thinks is reality は、例えば He thinks (that) something is reality. の文を、従属節（that 節）中の主語 something を先行詞とする名詞節に変換し、その先行詞と関係代名詞（that / which）を 1 語の関係代名詞 what にしたもの。he thinks がつながってくる連鎖関係代名詞である（「ルール 31」演習 5. の解説を参照）。少し難しいだろうが、これまで学んだことが理解できていれば必ずわかる。意味のまとまりを意識して、何度も音読しよう。ちなみに、この文の内容はアメリカ映画『マトリックス (The Matrix)』について説明するもの。

年 組 番 氏名

実施日 年 月 日

4

検印

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

□ 分詞（現在分詞と過去分詞）に名詞を修飾する〈**形容詞用法**〉があることはすでに学んでいます。<sup>\*1</sup>

ここでは、**名詞以外**を修飾する、分詞の〈**副詞用法**〉を見ていきましょう。次の例を見てください。

□ As I didn't know what to say, I remained silent.

「何を言うべきかわからず、私は黙っていた。」

□ この文は、ときや理由を表す接続詞 As が導く従属節と、コンマ後の主節から成り立っています。

□ この従属節は副詞節で、現在分詞を使って次のように変換できます。

□ Not knowing what to say, I remained silent.

「(訳はほぼ上と同じ)」

□ この変換で起こっていることは、副詞節において、① **主節と同じ主語 (I) が省略される**、

② **動詞が現在分詞形 (knowing) になる**、③ **接続詞 (As) が省略される**——の3点です。

□ 副詞節を変換してこのかたちが成立するとき、この現在分詞を〈副詞用法〉といい、文の主節を修飾していると考えます。このような副詞の意味のまとまりを〈**分詞構文**〉といいます。

□ Encouraged by her friends, Kate decided to apply for the audition.

「友人たちに励まされて、ケイトはそのオーディションに応募することにした。」

□ 過去分詞 Encouraged で始まるこの副詞も分詞構文です。もとの副詞節のかたちは、

As she was encouraged by her friends で、〈be 動詞 + 過去分詞〉の受動態です。

□ 主節と同じ she (Kate) と、接続詞 As が省略されています。

本来は、現在分詞 Being encouraged というかたちで始まるのですが、

この Being は省略されるので、結果、過去分詞から始まるというわけです。

□ While raising her twin sons, she works as director of TV dramas.

「双子の息子を育てるかたわら、彼女はテレビドラマのディレクターとして働いている。」

□ 分詞構文となる副詞に、接続詞 While が残っているかたちです。接続詞が省略されるのは

なくても文意に疑問が生じないからで、常に省略されるとは限りません。

□ 分詞構文においては、省略される副詞（節）の主語は主節の主語と「同じ」であることが条件です。

ただし、**主節の主語とは「異なる」主語が分詞構文の主語になることがあります。**

このような副詞を〈**独立分詞構文**〉といいます。

□ 文頭にくる独立分詞構文は非常に硬い表現とされ、一部の文学作品などで目にする程度です。<sup>\*2</sup>

□ ただ、いくつかの慣用表現は頻出します。

ここでは、独立分詞構文の慣用表現をいくつか挙げて、解説を終わりにしましょう。

□ frankly / generally speaking

「率直に / 一般的に言うと」

□ weather permitting

「天候が許せば」

□ judging from ~

「～から判断すると」

注

\*1：分詞の形容詞用法は「ルール 15、16」を参照。

\*2：本書では扱わない。

演習 和訳しなさい。

1. Seeing clouds slowly move, he fell asleep on the grass. (名詞 grass 「草」)  
「  
」
2. Judging from his appearance, he may be a bank worker. (名詞 appearance 「外見」)  
「  
」
3. Surprised by a sudden noise, the cat fell off the sofa.  
「  
」
4. Her self-evaluation is, honestly speaking, too low. (名詞 self-evaluation 「自己評価」  
副詞 honestly 「正直に」)  
「  
」
5. She ran away, feeling someone following her.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「雲がゆっくりと動くのを見ながら、彼は草むらの上で眠ってしまった。」 ※分詞構文をもとの副詞節にすると、例えば As he saw clouds move, he fell asleep ～. となる。see は知覚動詞で、目的語 clouds を意味上の主語として、原形不定詞 (slowly) move を続けて、「雲が (ゆっくりと) 動くのを見る」の意味となる。なお、分詞構文は基本的に分詞から始まるので、〈主語＋動詞〉構造を中心とせず、よって定義として副詞節とはいえない。ただ、節かそうでないかにこだわる必要はなく、もともとのかたが副詞節であることを覚えておけばよい。
2. 「その風貌からすると、彼は銀行員かもしれない。」 ※ judge 「判定する」主体、つまり主語は「私」だが、これは主節の主語 he とは異なる。よって、独立分詞構文で、これはよく使われる慣用表現。副詞句としてそのまま覚えればよい。ちなみに、助動詞 may は 50% の推量「～かもしれない (し、そうでないかもしれない)」のイメージで覚えておくとよい。
3. 「突然の音に驚いて、そのネコはソファから落ちてしまった。」 ※動詞 surprise 「驚かせる」は受動態 be surprised で「(主語が) 驚く」の意味になる。冒頭の分詞構文は、例えば As the cat was surprised by a sudden noise の副詞節を変換したもの。本来の分詞構

- 文は Being surprised ～となるが、この Being は省略され、過去分詞から始まると考える。
4. 「彼女の自己評価は、正直言って低すぎる。」 ※副詞は文の要素ではないので、置き場所が比較的的自由なのが特徴。この文では、独立分詞構文の慣用表現 (副詞) がコンマの間に挿入されている。この speaking の主語は「私」と考えられるが、主節の主語 her self-evaluation とは異なる。独立分詞構文の慣用表現は、副詞としてそのまま覚えること。
  5. 「彼女は、だれかに追われているのを感じて、走って逃げた。」 ※分詞構文は副詞なので文末にくることもできる。この分詞構文のもとの副詞節は、例えば as she felt someone following her 「彼女はだれかが自分を追いかけているように感じたので」のようになる。この文のように、副詞がとくに主節と同時あるいは継続的な内容を表すとき、「異なる状況を付け加える」という意味で〈付帯状況〉という。付帯状況については、次の課で改めて扱う。  
【重要】分詞構文で接続詞が省略されるときは、文脈に応じた適切な意味を頭の中で補えばよい。省略しても意味が通じると判断されるから、省略されるのである。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

5



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

前回は分詞の副詞用法、つまり分詞構文を確認しました。

- 分詞構文は、文の分詞構文以外の部分、主に文の主節全体を修飾していると考えます。
- また、副詞は比較的自由的な場所に置けますから、分詞構文も文頭、文中、文末に置けます。
- 分詞構文などが主節との同時または継続的な内容を表すとき、  
「(主節とは異なる) 状況を付け加える」という意味で、〈付帯状況〉と呼ぶことがあります。

- He was sitting in a white room then, looking around.

「そのとき彼はキョロキョロしながら白い部屋の中で座っていた。」

- この文のコンマに続く部分は、例えば while he was looking around といった副詞節に書き換えられるので、分詞構文が文末にきているかたちと判断できます。
- 内容的には、「キョロキョロしていた」は主節の「座っていた」動作との同時を表す付帯状況で、構造的には、コンマに続く部分として、情報が追加されていると考えます。<sup>\*1</sup>
- ただ、コンマはもともと発声されませんし、書くときに抜け落ちることもよくあります。  
このようなとき、分詞が副詞用法なのか形容詞用法なのかは、文脈で判断する必要があります。  
分詞が名詞を修飾していれば形容詞用法、名詞以外を修飾していれば副詞用法ということです。

- The fans groaned, with their hands covering their faces.

「ファンは両手で顔を覆いつつ、うめいた。」

- 例えば、ひいきにしているチームが敗れたときのファンの反応を思い浮かべてください。
- この文の、コンマに続く with を伴う副詞句も、付帯状況の典型的なかたちです。
- まず、コンマは情報の追加を表します。前置詞 with はその目的語を伴って副詞句を作ります。  
ここでは、その目的語の中心が their hands で、続く covering 以降がその名詞を後置修飾します。  
つまり、covering を分詞の形容詞用法と解釈するわけです。  
直訳は「顔を覆っている両手を伴って」といった感じです。状態をイメージしてみてください。
- 前置詞 with のあと、現在分詞 covering の前にその動作主 their hands があって、  
これが主節の主語 The fans とは異なっていることから、この表現を独立分詞構文の一種とする解説もあるようです。ですが、わざわざそんな難しい考え方をする必要はないでしょう。  
いずれにしても、繰り返し音読して、イメージで覚えてしまうのがいちばんです。

- Hearing the news, he sat back, with his arms on the armrests.

「そのニュースを聞いて、彼は両腕を肘掛けに置いて、深く座った。」

- Hearing the news は分詞構文で、例えば副詞節 After he heard the news 「彼はそのニュースを聞いたあと」などを言い換えたものと判断できます。この動作は主節 he sat back 「彼は深く座った」につながりますから、この分詞構文は主節に対する連続的な付帯状況と解釈できます。
- また、文末の with 以降の副詞句も、主節との同時を表す付帯状況と考えてかまいません。  
この部分に分詞は含まれていませんが、分詞は付帯状況を表す必要条件ではありません。<sup>\*2</sup>

注

\*1：コンマの使い方については「ルール 29」を参照。

\*2：意味がとれれば、用語にこだわる必要はまったくない。

演習 和訳しなさい。

1. The project, starting today, will help improve the world food situation.  
「」
2. On a train, I saw a boy reading with tears running.  
「」
3. The fans groaned with their faces covered with their hands.  
「」
4. She has just rushed out, without a coat on. (rush out 「飛び出す」)  
「」
5. He has fallen asleep, holding his cell phone in his hand.  
「」
6. Surprised, he stood up straight. (副詞 「まっすぐに」)  
「」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「そのプロジェクトは、今日から始まるのだが、世界の食糧問題を改善するのに役立つだろう。」 ※分詞構文が文中に挿入されているかたちで、その省略されている主語は主節と同じ The project. help (O to) do 「(O が) ~するのに役立つ」。ここでは O がないので、文の主語がそのまま improve の主語となる。
2. 「電車の中で少年が涙を流しながら読書しているのを見た。」 ※ see O doing 「O が~しているところを見る(知覚表現)」。with 以降は付帯状況を表す副詞 (running は、直前の名詞 tears を後置修飾によって説明する、現在分詞の形容詞用法と考える)。
3. 「ファンは両手で顔を覆いつつ、うめいた。」 ※解説での2番めの文を、内容は同じで、付帯状況の部分だけを調整したもの。この文では、their faces (were) covered with their hands. 「彼らの顔は両手で覆われていた。」という受動態がもとになっているので過去分詞 covered だが、解説の文では、their hands (were) covering their faces. 「彼らの両手が顔を覆っていた。」という能動態がもとになるので現在分詞 covering なのである。意味上の主語と分詞との関係が能動か受動かに注意すること。
4. 「彼女はたった今、コートも着ずに飛び出していたと

- ころだ。」 ※主節が現在完了形で、コンマのあとは前置詞 without を伴う付帯状況の副詞句。前置詞 without は with の逆のイメージでとらえればよい。with her coat on ならば「(自分の) コートを着て」という副詞句になる。
5. 「彼は、携帯電話を手に握ったまま眠ってしまった。」 ※コンマのあとが情報を追加する分詞構文で、同時を表す付帯状況。主節は現在完了形。
  6. 「驚いて、彼は背筋を伸ばして起立した。」 ※ Surprised は過去分詞の分詞構文で、もとの副詞節は As/After he was surprised 「彼は驚いたので / 驚いたあと」などが考えられる。同時を表す付帯状況、あるいは理由を表すものと解釈できる。ただ、分詞構文において接続詞が省略されるとき、その接続詞の意味はあいまいになることが多いので、文脈に応じたほんやりとした判断でよい。付帯状況かそうでないかを追究することに、あまり意味はない。意味が自然なイメージで理解できればそれでよい。
- 【重要】分詞の副詞用法(分詞構文)においては、分詞の主語が何なのかを、またその主語と分詞との関係が能動なのか受動なのかを意識しておくことが大切。音読を繰り返していれば、すぐに意識しなくて済むようになる。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

6



## コラム 私たちが生きていく世界

かつて国家が裕福になる手段は戦争に勝って他国から富を略奪することでした。現在、多くの先進国で、戦争は武力を介さない外貨の争奪戦、つまり国際的な経済活動へと姿を変えています。

天然資源の乏しい日本は、いわゆる加工貿易で外貨を獲得することで経済的に急成長しました。ただ、それも1980年代終わりごろまでのことです。近年は資源も人材も豊富な中国が「世界の工場」として台頭し、米国もGAFAM (Google, Apple, Facebook (現 Meta), Amazon, Microsoft)などのIT企業の成長によって世界中から巨額の外貨を手に入れています。日本経済の輝かしい成長も今は昔で、多くのメディアは現在に至る日本の不況を「失われた30年」と評しています。

現在の国内に目を向ければ、少子高齢化は社会保障制度の根幹を揺るがし、長引く不況は通貨の循環を妨げ、さらなる少子高齢化や貧困を招いています。外交においては、海洋や開発途上国における覇権を目指す中国とそれを牽制する米国との間で板挟みになり、また、近隣諸国との国境問題や政治的反感に直面しています。自然環境に関しては、異常気象による40度近い高温や、数十年に一度といわれる豪雨や水害が毎年のように起こっています。専門家の中には、世界的な地球温暖化を回避するにはもう手遅れだという悲観的な人もいます。パンデミックによって人々の活動は規制され、企業活動や人間関係に大きな負の影響を与えています。

私たちが生きているのは、このような閉塞感漂う日本です。あなたはこれから、どのように生きていきたいですか？——あなたが自分で決める選択肢は無限にあり、また、尊重されるべきものです。

だれにとっても自分が世界の中心で、だれにとっても自分がいちばん大切です。でも、自分を大切にすることは自分を甘やかすことではないのでしょうか。なりたいた自分になるために何をすべきなのかを具体的に考え、行動していく。あなたが憧れる人も、おそらくそうしてきたはずです。誇れる自分になるためには、自分自身を客観視し、肯定できるように努力しなくてはならないでしょう。

そして、自分がいちばん大切であるからこそ、他人を尊重することも大切です。他人にとっても自分がいちばん大切で、大切にしている世界があるからです。自分が世界の中心であっても、その世界は1つではありません。私たちは、家族、学校や会社、日本、地球などのさまざまな世界に同時に属し、それぞれの世界で役割と感情を持って生活しています。隣の家族より自分の家族、隣の国より自分の国に対して共感が強いのは、それらが自分が属している世界だからです。しかし、あなたが属さない世界に属している人も当然いるわけで、その事実を想像できない人は、その世界観において未成熟といえます。浅慮から他人を攻撃するのは幼い子どもにも多いものです。そして、残念ながら、世の中には未成熟なおともたくさんいます。

自分を大切にすることは、自他ともに誇れる自分になれるよう努力することです。これは、自分と自分の属する世界が信用を獲得することにもつながります。逆に、信用を失うと、その世界そのものが崩壊することもあります。身近な世界を考えれば、あなたは身勝手な犯罪を起こすことで、簡単に家族を崩壊し、世間の信用を失わせることができます。現実の地球規模の世界を考えれば、先進国は温暖化の原因になることで地球を崩壊させつつあります。裕福になるために外貨を獲得することは日本にとって大切なことかもしれません。私たちが国策として英語を学ぶ理由もそこにあります。ただ、同時に、他国や地球全体を思いやる必要もあるのです。

社会に出れば、あなたの世界はどんどん広がっていきます。自分が属するそれぞれの世界で、自分と他者とを大切にしながら信用を獲得していくためにはどう行動すべきか。考えてみてください。

# 構文

ルール 35：主語や目的語を代用する代名詞 it

ルール 36：強調構文

さまざまな構文や語法



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

これまで見てきたとおり、名詞にはさまざまな句や節のかたちがあります。例えば、

- 関係詞、間接疑問、接続詞 that や whether などは、名詞節をつくります。
- to 不定詞（名詞的用法）や動名詞などは、名詞句をつくります。
- これらの名詞の意味のまとまりは、文の要素としての主語、目的語、補語になります。  
ただ、長い句や節をそのまま組み込むと、文全体の構造がわかりづらくなってしまいます。
- このようなとき、**代名詞 it** で名詞句や名詞節を代用していったん**文構造**を作ってしまう、  
あとでその **it** の内容を改めて述べる**構文**があります。〈形式主語構文〉と〈形式目的語構文〉です。
- **It is hard for me to do it by myself.** 「私がひとりでそれをするのはたいへんだ。」
  - この文の冒頭の It が〈形式主語（仮主語）〉です。主語として、文の要素の先頭にきています。
  - 形式主語に対する実質上の主語を〈真主語〉といいます。この文では、to do it by myself 「それを自分ひとりですること」が真主語で、to 不定詞の名詞的用法が導く名詞句です。よって、To do it by myself is hard for me. としても、文法的に間違いではありません。
  - to 不定詞の前にある for me は、形式的には〈前置詞＋名詞〉の副詞句ですが、内容的には続く to 不定詞の意味上の主語になっています。つまり、文全体の内容は、I do it by myself 「私がひとりでそれをする」ことが、hard 「難しい」ということです。
  - この文全体は、SVC の第 2 文型（補語 C は形容詞 hard）となります。
- **I find it hard to believe that teenagers seldom watch TV these days.** 「十代が最近ほとんどテレビを見ないことは信じがたい。」
  - 動詞 find の目的語 it が〈形式目的語（仮目的語）〉で、〈真目的語〉が名詞節の that 節です。文全体は、SVOC の第 5 文型（目的語 O = it, C = 形容詞句 hard to believe）です。  
なお、seldom 「ほとんど～ない」は副詞で、否定語の副詞 not に近い〈準否定〉を表します。
  - この長い that 節を it の部分にそのまま代入することはできません。  
find that とくると、find の目的語となる that 節と判断されてしまうからです。  
cf. I find that teenagers seldom watch TV these days.  
「十代は最近ほとんどテレビを見ない（ということに私は気づいている）<sup>\*1</sup>。」
- 形式主語や形式目的語の it を含む文において、真主語あるいは真目的語になる名詞は、to 不定詞や that 節のほかに、間接疑問や動名詞などになることもあります。
- **It is no use crying over spilled milk.** 「覆水盆に返らず（こぼれた牛乳を嘆くことは役に立たない）。」〈真主語が動名詞以降〉
- **It doesn't matter what you did in the past.** 「あなたが過去に何をしたのかは重要ではない。」〈真主語が間接疑問あるいは関係詞節〉
- **Japanese people take it for granted that freshwater is easily available.** 「日本人は、真水は簡単に手に入れられることが当然だと思っている。」〈真目的語が that 節〉

注

\*1：動詞 find 「気づく」は自然な日本語に訳すのが難しい。表現上、主語の主観的なイメージが残せればよいだろう。

演習 和訳しなさい。

1. It is a lot of fun talking with people from different countries.  
「  
」
2. He makes it a rule never to lie to himself. (make it a rule to do 「～するようにしている」)  
「  
」
3. It is necessary that he study at least three hours a day.  
「  
」
4. No wonder we fear the virus. (動詞 fear 「恐れる」、名詞 virus 「ウイルス」)  
「  
」
5. It is nice of you to let me stay here.  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「さまざまな国の人々と話しをすることはとてもおもしろい。」 ※形式主語 It の真主語が動名詞 talking が導く名詞句のかたち。to talk の不定詞にしてもほとんど意味は変わらない。
2. 「彼は自分自身に決して嘘をつかないことを信条としている。」 ※ make it a rule ～は「～(すること)を信条とする/～するようにしている」の意味で、個人的な習慣を表す。～の部分には to 不定詞がくることが多い。
3. 「彼は1日に少なくとも3時間は勉強する必要がある。」 ※形式主語の It の真主語が that 節のかたち。この文構造は、It is necessary が主節、that 節が従属節(名詞節)と解釈できるが、主節に〈必要〉や〈主張〉、〈当然〉などを意味する表現が使われるとき、従属節の動詞には助動詞 should の〈当然〉の意味が含まれるのが原則。主に米語ではこの should が省略されて、動詞の原形(原形不定詞)になるのが基本。この文の従属節において、主語が he で現在形なのに、続く study が(三単現形 studies ではなく)原形不定詞になっているのは、助動詞 should が省略されているからと考えるとよい。1つ別の例文を挙げておく。I insisted that she go without me. 「私を置いて行けと彼女に強く言った。」(※過去形の文だが、原形不定詞の go となる)
4. 「私たちがそのウイルスを恐れるのも無理はない。」 ※もとのかたちは It is no wonder that ～「～ということとは不思議ではない/もつともである」で、It は真主語である that 節を代替する形式主語。ただし、ここでは It is と that 節の接続詞 that が省略されている。このような定型表現の変形は数多くあるが、定型表現を見た経験がなければその応用としての変形は理解しづらいだろう。できるだけ多くの典型的な表現に触れ、意味をイメージしながら繰り返し音読することを心がけてほしい。変形に対応できる応用力が自然と身につくはずである。
5. 「ここにいさせてくれて、ありがとう(私をここに留まらせてくれるとは、あなたはやさしい)。」 ※ it is C for S to do 「Sが～するのはCである」のかたちは、左ページ解説の最初の英文で確認できる。この補語 C の部分が「人の性質」を表す形容詞のとき、意味上の主語 S を導く前置詞は、for ではなく of を使うのがルール。このような形容詞には、wise 「賢い」、sweet/kind 「やさしい」、careless 「不注意な」、stupid 「バカな」などがある。It's very kind/nice of you. で「本当にありがとう。」の意味になることを覚えておくといよい。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

5



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 文は、文の要素と副詞の「意味のまとまり」から成り立っています。
  - この「意味のまとまり」を、強調するために文の前半に抜き出す文を〈強調構文〉といいます。
    - We saw the car accident in front of the station.
      - 「私たちは駅前でその自動車事故を見た。」
      - これは SVO（第 3 文型）の文で、in front of the station という副詞句を伴っています。この文をもとに、意味にまとまりごとに強調して、強調構文に変換してみましょう。具体的には、
        - 〈It is ~ that ...〉のかたちで、～の部分に強調する意味のまとまりを入れれば変換できます。
    - It was we that/who saw the car accident in front of the station.
      - 「駅前でその自動車事故を見たのは私たちだった。」
      - これは、もとなる文の主語 We を強調した文です。
        - 過去形なので be 動詞は was です。もとなる文の主語が複数形（We）であっても、強調構文での主語はあくまで It ですから、動詞は常に It に対応する be 動詞になります。
        - 強調する部分が人を表すとき、that の代わりに who や whom が使われることもあります。<sup>\*1</sup>ただし、作文をするときには、原則はすべて that と覚えておけば十分です。
        - 強調構文は、強調する部分を先行詞とし、それを関係詞 that 以降で後置修飾する構造に似ています。ただ、関係詞の先行詞が名詞である一方、強調構文においては強調する部分に副詞がくることもあります。やはり、繰り返しによって構文のかたちを身につけるのが最善です。
    - It was the car accident (that) we saw in front of the station.
      - 「駅前で私たちが見たのはその自動車事故だった。」
      - もとなる文の、動詞 saw の目的語 the car accident を強調した文です。
      - 動詞 saw の目的語を抜き出して文の前半に置くので、saw の直後の目的語は欠落します。
      - 動詞の目的語を強調するときの that は省略されることがあります。目的格の関係代名詞が省略されることがあるのと、感覚的には同じです。
    - It was in front of the station (that) we saw the car accident.
      - 「私たちがその自動車事故を見たのは駅前だった。」
      - もとなる文の、場所を表す副詞句 in front of the station を強調した文です。
      - 副詞句が文の前半に置かれますが、後半の節の中に文の要素の欠落はありません。
      - 〈It is ~ that ...〉のかたちは、前の課で学んだ形式主語の構文と類似することがありますが、
        - 形式主語の文では、～の部分にくるのは、続く節の補語としての形容詞か名詞になります。
        - 強調構文では、～の部分にくるのは、続く節の主語や目的語となる名詞か、副詞になります。
      - これらの違いを内容から判断することは容易です。正しく意味がとれれば追究する必要はありません。

注

\*1：強調構文では、強調するものの直後に that を続けるのが原則ではあるが、実際には that 以外に which や who、whom を使うこともあるし、副詞句を強調するときには when や where を使うこともある。また、強調するものが例えば主語の代名詞 I であっても、It was me that

saved him from drowning. 「溺れかけた彼を助けたのは私だった。」のように、本来主格の I とすべきところを目的格の me とすることもある。要は、It is と that（関係詞）の間に「意味のまとまり」を挟むことで、それが強調されるという感覚をつかむことが大切である。

ルール 36：強調構文

演習 和訳しなさい。

1. It was his bad attitude that drove her mad. (名詞 attitude 「態度」、drive O mad 「O をひどく怒らせる」)
2. It was at midnight that I heard ambulance sirens. (名詞 siren 「サイレン」)
3. Was it only by chance that you met Mr. Brown here? (by chance 「偶然、たまたま」)
4. It was not until the president entered the room that the meeting began. (名詞 president 「社長」)
5. We don't know what it is we all want. (鹿児島大 2020 改)

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「彼女をひどく怒らせたのは彼の悪い態度だった。」  
※ His bad attitude drove her mad. 「彼の悪い態度は彼女をひどく怒らせた。」の文が、主語を強調する文に変換されたもの。
2. 「私が救急車のサイレンを聞いたのは深夜 12 時だった。」  
※ I heard ambulance sirens at midnight. 「私は深夜 12 時（真夜中）に救急車のサイレンを聞いた。」の文が、副詞句を強調する文に変換されたもの。
3. 「あなたがここでブラウン氏に会ったのはただの偶然だったのですか。」 ※ You met Mr. Brown here only by chance. 「あなたはただの偶然で、ここでブラウン氏に会った。」の文を、副詞句 (only) by chance を強調すると It was only by chance that you met Mr. Brown here. 「あなたがここでブラウン氏に会ったのはただの偶然だった。」となる。問題文は、この強調構文を Yes/No 疑問文にしたもの。
4. 「社長が部屋に入ってきてようやく会議が始まった。」  
※ It is not until ~ that SV は強調構文の定型表現。直訳「SV (ということ) は～までない」を意識すると「～してようやく (はじめて) SV」となる。もとの文 The meeting didn't begin until the president entered the room. 「社長が部屋に入るまで会議は始まらなかった。」の副詞節 until the president entered the room

「社長が部屋に入ってきたときまで」が強調され、否定語 not がこの節に移動したものと考え。\* It was until the president entered the room that the meeting didn't begin. とはいわない。参考までに、強調構文ではないが、It is not long before SV 「SV (の前) まで長い時間はかからない / まもなく SV」も一緒に覚えておくとよいだろう。It won't be long before/until the singer becomes famous all over the world. 「(その歌手が世界中で有名になるまでに長い時間はかからないだろう→) その歌手はまもなく世界中で有名になるだろう。」

5. 「だれもが望むものがいったい何なのかはわからないものだ。」 ※動詞 know の目的語が間接疑問 (名詞節) で、その間接疑問が強調構文のかたち。この間接疑問を疑問文に直すと、〈主語→動詞〉が〈動詞→主語〉の順序となり、What is it (that) we all want? 「だれもが望むものはいったい何なのだろう。」となる。これは、What do we all want? という疑問文の、動詞 want の目的語にあたる疑問代名詞 What を、it is と that の間に挟んだ強調構文。疑問詞なので節の冒頭に移動している。やさしい語しか使われていないが、構造的には難しい。ただ、これまでに学んだ内容で理解はできるはず。書き出して構造を確認し、意味のまとまりを理解した上で、音読を繰り返すことをお勧めする。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

5



## 解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

この課では、付録として、構造がわかりづらいと思われる文をいくつか紹介します。

□ これまで学んだ基本が身につけていれば、その多くは自力で文構造を理解できるはずですが、

解説を読む前に、必ず自分で構造を考えてみてください。

□ He regards his work as a hobby, not as labor.

「彼は自分の仕事を、労働としてではなく、趣味としてとらえている。」

□ 動詞 regard 「見なす」の目的語 his work と、前置詞 as に続く名詞 a hobby (labor) が内容的にイコールになっています。regard O as C の語法で、SVOC の変形と判断できます。<sup>\*1</sup>

□ The police think of the case as unusual. 「警察はその事件を異常だと見なしている。」

□ The more you know, the more you want to learn.

「知れば知るほど学びたくなるものだ。」

□ 〈The + 比較級～(SV), the + 比較級... (S'V')〉「～すればするほど、より…」の構文です。

2つの節のうち、前の節が条件的で、内容的には後ろの節に重点が置かれます。

どちらの節にも SV (S'V') がいないことも多く、慣用的に使われることが多いようです。

□ The sooner, the better. 「早ければ早いほどよい。」

□ As is often the case, the solution is far simpler than we think.

「よくあることだが、解決策は考えるよりずっと単純だ。」

□ as is often the case (with ～) 「(～には) よくあることだが」は、慣用的な副詞節です。

この as は関係代名詞とされ、その先行詞は主節全体になります。そのまま覚えましょう。

□ He was anxious, as is usual for newcomers, about his new workplace.

「新入りにはふつうのことだが、彼は自分の新しい職場のことを心配していた。」

□ cf. He has no moral compass, which is often the case with politicians.

「彼に道徳的指針は一切ないが、それは政治家にはよくあることである。」

□ There is no denying he has star quality.

「彼にスターの素質があることは否定できない。」

□ There is no doing 「～することは(でき)ない」は、there is/are 構文の慣用表現で、主語の中心となる動名詞 doing 以降を形容詞 no で否定するかたちです。

この文では、he 以降は接続詞 that が省略された that 節と考えます。

□ There's no turning back. 「もう後戻りできない。」

□ There is no telling what will happen tomorrow.

「明日何が起こるかはわからない(言えない)。」

## 注

\*1: 同様の語法をとる動詞には、think of O as C 「O を C と(して)考える」、define O as C 「O を C と(して)定義する」、view O as C 「O を C と(して)みなす」など数多い。この as はふつう前置詞と解釈するが、

補語 C の部分には例外的に形容詞がくることもある。Most preservatives are recognized as safe. 「たいいていの保存料(防腐剤)は安全だと認められている。」(※ safe 「安全な」は形容詞)

演習 和訳しなさい。

1. Mr. Murakami is highly thought of as a great novelist.  
「」
2. As is usually the case, bigger is not always better.  
「」
3. The farther away you look, the farther back in time you're seeing.  
「」
4. Socrates said there is no learning without remembering. (名詞 Socrates 「ソクラテス」)  
「」
5. There is no talking constructive ideas with him. (形容詞 constructive 「建設的な」)  
「」
6. NASA recognizes their engineers as important as their scientists.  
「(名詞 NASA 「米航空宇宙局」)」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「ムラカミ氏は偉大な小説家と高く評価されている。」  
※ think of O as C 「OをCと(して)考える」。ここは目的語 O を主語に変換した、受動態 O is thought of as C のかたちになっている。of と as の間の境目を正しく把握すること。
2. 「ふつうのことだが、より大きいことが常によりよいとは限らない。」 ※副詞節を作る as if often the case with 「～にはよくあることだが」の応用表現と考える。なお、主節の主語 bigger は形容詞の比較級。主語は必ず名詞なので、ここはより大きい「こと」の意味で使われていると考える。直感的にわかるだろう。また、「すべて」や「常に」、「必ず」などの副詞を not を前に置いて否定すると「～とは限らない」という意味の〈部分否定〉になる。
3. 「より遠くを見るほど、より時をさかのぼって見えていることになる。」 ※例えば、「今見ている太陽は8分前の太陽の姿であり、今見ている北極星は約400年前の北極星の姿である」、といった内容を表す文。〈The + 比較級～(SV), the + 比較級... (S'V')〉「～すればするほど、より…」の構文。なお、主語の you が「(一般的な)人」を表すときには訳す必要はない。
4. 「覚えることなしに学ぶことはできないとソクラテスは言った。」 ※動詞 said の目的語が there is no doing 「～することはできない」の名詞節(接続詞 that が省略された that 節)のかたち。主節が過去形、従属節(that 節)が現在形で、時制にずれが生じている。これは、従属節の内容がいつの時代もあてはまる〈普遍の真理〉と解されるからである。時制の一致は常にあてはまるとは限らない。
5. 「彼と建設的な考えを話すことはできない。」 ※ there is no doing 「～することはできない」のかたち。there is/are 構文は be 動詞のあとに主語がくる倒置構文で、主語の存在を表す。つまり、no doing 以降は主語となる名詞句。
6. 「NASA (米航空宇宙局) は、エンジニア (技術者) を科学者と同じくらい重要と見なしている。」  
※ recognize O as C 「OをCと(して)見なす」で、補語 C が原級比較の形容詞 important になっているかたち。SVOC の変形と考えればよい。この as は前置詞で、例外的に補語としての形容詞の前に置くことができる。

|   |   |   |     |
|---|---|---|-----|
| 年 | 組 | 番 | 氏名  |
|   |   |   | 実施日 |
|   |   | 年 | 月   |
|   |   | 日 | 日   |

6



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- It is worth remembering how he helped people in Afghanistan.  
「彼がアフガニスタンの人々を助けた方法は覚えておく価値がある。」
- 形容詞 worth 「価値がある」は、後ろに名詞を続けて「～の価値がある」の意味になります。  
ここでは、動名詞 remembering と、その目的語である関係副詞節（名詞節）が続いています。  
It に remembering 以降を代入して意味が通ることから、この It は形式主語と解釈します。
- cf. The information is worth a lot of money. 「その情報には大金の価値がある。」
- I wish I had more time for gardening.  
「ガーデニングのための時間がもっとあればいいのに（実際はない）。」
- I wish ～. 「私は～を願う。」の表現では、～の部分には to 不定詞（名詞的用法）や  
仮定法の節（名詞節）がきます。
- (助) 動詞を過去形にすることで「実際はそうではない」現在を表せます（〈仮定法過去〉）。  
典型的な仮定法過去の例文を挙げておきますので、動詞部分をよく観察してください。<sup>\*1</sup>
- cf. If I had more time for gardening, I would grow my own vegetables.  
「もっとガーデニングのための時間があれば、自分の野菜を育てるのが（実際は違う）。」
- The earth is four times the size of the moon. 「地球は月の大きさの4倍である。」
- 比較するときには形容詞や副詞の比較級を使いますが、とくに大きさや重さ、速さなどを  
倍数や分数で比較するとき、size や weight、speed などの名詞を使って比較できます。
- This fighter plane can fly at twice the speed of sound.  
「この戦闘機は音速の2倍の速さで飛ぶことができる。」
- cf. The moon is four times smaller than the earth. 「月は地球より4倍小さい。」  
= The moon is one-fourth as small as the earth. 「月は地球の4分の1の小ささだ。」
- Were I to go back to school, I would undoubtedly study hard.  
「学校に戻れるならば、間違いなく一生懸命勉強するのが（実際は違う）。」
- 仮定法の if 節（副詞節）は、倒置をすることで接続詞 if を消すことができます。
  - Were I you (= If I were you), I wouldn't tell him the truth.  
「私があなたなら、彼に真実を教えることはないのだが。」
- be 動詞に to 不定詞を続けることで、可能・予定・義務・運命などを表すことがあります。  
2つ上の例文では可能を表すと判断しました。
  - The President is to meet with the Russian president in a week.  
「大統領は1週間後にロシアの大統領と会う予定だ。」（予定）

注

\*1: 「実際はそうではない」という事実に反する含意のある表現を〈反実仮想〉と呼ぶ。現在の反実仮想は過去形で表すが（仮定法過去）、過去の反実仮想は過去完了形で表し、完了の助動詞 have の過去形 had を使う（仮定法過去完了）。I wish I had had more time for

gardening. 「(過去に) ガーデニングのための時間がもっとあったらなあ（実際は違う）。」 I wished I had had more time for gardening. 「(過去に) ガーデニングのための時間がもっとあったらなあと願った（実際は違った）。」仮定法は「(巻末) 動詞のかたちの総まとめ」も参照。

演習 和訳しなさい。

1. It would be worth your while to read some of his books.  
「」
2. If you were in my shoes, you would feel the same way.  
「」
3. Not a single person was to be seen in the mountain village.  
「」
4. His actions are worth remembering.  
「」
5. A snake has two lungs, one of which is so long as to reach almost half the length of its entire body. (名詞 lung 「肺」 形容詞 entire 「全体の」)  
「」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「彼の本の中にはあなたが読む価値のあるものがあるかもしれない。」 ※ worth (one's) while doing/to do 「(人が) ~する価値がある」。このかたちするときには to 不定詞を使うことができる (動名詞でもよい)。直訳は「彼の本のいくつかを読むことには、あなたの時間に価値があるかもしれない。」となる。この while 「時間、期間」は名詞。It は形式主語で、真主語は to read 以降。would は現在の控えめな推量を表す。
2. 「あなたが私の立場なら、あなたも同じように感じるかもしれないのに (実際は違う)。」 ※ 仮定法過去の基本的な文。「現在」の反実仮想を表していることに注意する。in my shoes は「(私の靴を履いて→) 私の立場にいて」の意味のイディオム。仮定法でよく使われる。
3. 「その山村では人っ子ひとり見受けられなかった。」 ※ 可能を表す (be to do) で、ここでは to 不定詞が受動態になっている。前置詞 to の「~に向かう」イメージから判断して、適した訳をあてはめるとよい。いくつか例を挙げておく。No one was to blame for the accident. 「その事故はだれの責任でもなかった。」 The space shuttle was only to be used for human missions. 「そのスペースシャトルは人間の任務にのみ使われることになっていた。」 The refugees were driven from their homeland, never to return. 「その難民は祖国から追い出され、二度と戻ることはなかった。」 (※コンマのあとは、and they were never to return の副詞節を、副詞句の付帯状況にしたものと考え)
4. 「彼の活動は覚えておく価値がある。」 ※ 形容詞 worth をこのかたちで使うとき、続く部分に to 不定詞を使うことはできない。また、動名詞を使うときにはその主語の内容に注意すること。ここでは、remembering の目的語 His actions が主語の位置にきている。なお、Remembering his actions is worthwhile. 「彼の行動を覚えていることは価値がある。」と言い換えて表現することもできる。
5. 「ヘビには肺が2つあるが、そのうちの1つは全身のほぼ半分に達するほど長い。」 ※ half the length of ~ 「~の半分」は、half as long as ~ 「~の半分と同じくらい長い」と同様の意味を、名詞 length 「長さ」で表す表現。which は two lungs を先行詞とする関係代名詞で、コンマを伴う非制限用法として先行詞を追加説明している。(so ... as to do) は「~するほど (極端に) ...」の意味で、…の部分には形容詞や副詞がくる。She has gone so far as to buy everything online. 「彼女はあらゆるものをオンラインで買うほどまでになってしまった (直訳: 遠くまで行ってしまった)。」

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

5



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- Rowan spoke so fast (that) no one was able to understand him.  
「ローワンはとても速くしゃべったので、だれも彼を理解できなかった。」
- 中学校で学ぶ、いわゆる〈so ~ that ...〉構文です。  
「とても～なので、… / …なほど～」の意味です。接続詞 that は省略されることもあります。
- ～の部分にくるのは、主に形容詞か副詞です。
- The apartment was so small we could not sit down.  
「そのアパートの部屋はとても狭かったので、私たちは座れなかった。」
- Rowan spoke so fast as to bite his tongue. 「ローワンは舌をかむほど速く話した。」  
「話す」の「舌をかむ」の「も」主語が同じなので、that 節の代わりに to 不定詞になっています。
- We were on the island for such a long time (that) we fully enjoyed the spirit of life there. 「私たちはその島にとっても長くいたので、そこでの生活を満喫した。」
- 〈such ~ that ...〉構文で、〈so ~ that ...〉構文と同様、  
「とても～なので、… / …なほど～」と訳せます。また、that も省略されることがあります。
- ただし、～の部分にくるのは名詞になります。〈so ~ that ...〉構文と対比して覚えましょう。
- He is such a smart guy (that) he solved the math problem in a second.  
「彼はとても賢いヤツなので、その数学の問題をあっという間に解いてしまった。」
- Rowan spoke too fast for anyone to understand him.  
「ローワンはとても速くしゃべったので、だれにも理解できなかった。」
- 〈so ~ that ...〉構文と一緒に中学校で学ぶ、いわゆる〈too ... to do〉構文です。  
「～するには…すぎる / …すぎて～できない」と訳せます。
- 副詞 too のあとには形容詞か副詞がきます。上の例文では副詞、次の例文では形容詞です。
- The apartment was too small for all of us to enter.  
「そのアパートの部屋は私たち全員が入るには狭すぎた (狭すぎて全員は入れなかった)。」
- Rowan spoke slowly so (that) everyone was able to understand him.  
「みんなが理解できるように、ローワンはゆっくりと話した。」
- この〈so (that)〉は副詞節を導く接続詞 (句) で、「～するように」の意味と考えます。  
〈so ~ that ...〉構文とかがたが似ており、that が省略できることも同じですが、意味はまったく違います。
- この副詞節の動詞部分では、意志や可能を表す will や can (に相当する語句) がよく使われます。
- Rowan spoke cheerfully so everyone would want to listen to him.  
「ローワンはみんなが聞きたくなるように、楽しげに話した。」
- なお、接続詞 so から始まるこの副詞節が文頭に置かれることはあまりありません。<sup>\*1</sup>

注

\*1：文法的には誤りではないが、慣用的にあまり表現されない。文頭の So は、順接の副詞として「だから、それで」の意味を表すことが多いからだと思う。

演習 和訳しなさい。

1. Please make a to-do list so you won't forget what you should do.  
 「 (to-do list 「To-Do リスト、すべきことの一覧」 )  
 」
2. The bird was so strange that there was debate among scientists over whether it was really a bird at all.  
 「 (at all 「(強調して) 一体全体、本当に」 )  
 」
3. He told us such a good story that I almost cried.  
 「  
 」
4. His story is too good to be true.  
 「  
 」
5. Their financial situation was such that they had to leave their house in a week.  
 「 (financial situation 「経済状態」 )  
 」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「すべきことを忘れないよう、To-Do リストを作ってください。」 ※「～するように」を意味する副詞節を導く接続詞 so (that) で、that が省略されているかたち。副詞節中の動詞 forget の目的語は、先行詞を要さない（その中に含む）関係代名詞 what が導く名詞節。what you should do 「あなたがすべきこと」で 1 つの名詞の意味のまとめりである。
2. 「その鳥はとても奇妙だったので、それがいったい本当に鳥なのかについての議論が科学者の間で起こった。」 ※「とても～だったので…」という因果関係を表す <so ~ that ...> 構文。among ~ 「～の間で」と、over ~ 「～に関して」はどちらも <前置詞 + 名詞> の副詞句。whether ~ 「～か（どうか）」以降は名詞節（まとめ 4：従位接続詞と従属節）を参照。
3. 「彼は私たちにとてもいい話をしてくれたので、私は泣きそうになった。」 ※因果関係を表す <such ~ that ...> 構文「とても～なので、… / …なほど～」。参考までに、この such a good story は so good a story とも表現でき

4. 「彼の話は出来すぎている（←本当であるには良すぎる）。」 ※ too good to be true は熟語で覚えるとよい。肯定的な「この上なく良い」でも、否定的な「良すぎて疑わしい」でも、文脈によってどちらでも使える。
5. 「彼らの経済状態は、1 週間後に家を立ち退かなくてはならないほどだった（たいへんだった）。」 ※ such は「そのような、とても～な」の意味の形容詞。形容詞は必ず名詞を修飾（形容）するが、ここでは「悪い状態」などの意味の名詞が文脈から推測でき、冗長になるのを避けるために省略されていると考える。

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

□  
 / 5



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- All she wants to do is (to) dance. 「彼女がしたいのは踊ることだけだ。」
  - この文の主語は All she wants to do で、All の直後に関係代名詞 that が省略されています。この All は「すべて」と訳せる名詞（関係代名詞の先行詞）ですが、everything 「すべて」とは違い、「(～だけが) すべて」という否定的なニュアンスを含んでいます。
  - be 動詞 is のあとには不定詞が続きます。to 不定詞（名詞的用法）のほうが補語としてわかりやすいのですが、do の部分だけに対応する原形不定詞が自然とを感じる人も多いようです。
  - All you have to do is just listen to me. 「あなたはただ私の言うことを聞いていればいい。」
  
- You have only to consider how you can build trust with the people around you. 「あなたは周囲の人々とどう信頼を築くかについてだけよく考えればいい。」
  - have only to do で「～さえすればよい」の意味になります。構造をよく見てみると、have to do 「～しなければならない」の間に、副詞 only 「～だけ」が入り込んでいます。副詞は文の要素ではないので、比較的自由な場所に置けることがわかる好例です。
  - cf. He only had 60 yen with him. 「彼は 60 円しか持っていなかった。」
    - ※副詞は修飾する対象の直前に置くのが原則です。ここでは had only 60 yen とする方が日本人にはわかりやすく、また、英文として間違いでもありません。
    - ただ、とくに会話では、only を had 60 yen (with him) 全体を修飾するものとして、例文のように動詞の前に置くことがよくあります。
  
- Of great interest is the fact that water vapor is the largest contributor to the greenhouse effect. 「非常に興味深いのは、水蒸気は温室効果にもっとも大きな影響を与えるということだ。」
  - 補語となる形容詞を文頭に置いて強調することで、倒置が起こることがあります。<sup>\*1</sup> この文の主語は the fact 以降で、続く that 節が the fact の具体的な内容を表しています。
  - 〈of + 抽象名詞〉が形容詞の意味になる場合があります。つまり、この文の Of great interest は主格補語で、very interesting とほぼ同じ意味です。〈前置詞 + 名詞〉は原則として副詞と考えますが、これは例外として覚えたほうがいいでしょう。<sup>\*2</sup>
  - a person of great importance 「重要人物」⇔ a very important person
  - 〈動詞 + 副詞〉の表現を、その動詞の派生名詞を使って〈形容詞 + 名詞〉のかたちで表現できることがあります。例えば、He swims well. 「彼は上手に泳ぐ。」は、He is a good swimmer. としてもほぼ同じ意味になります。上の例文の名詞 the largest contributor 「最大の原因（貢献者）」は、動詞を使って contribute (the) most 「もっとも大きく原因となる（貢献する）」とも表現できるということです。
  - 以上から、上の例文をわかりやすく書き換えると、The fact that water vapor contributes the most to the greenhouse effect is very interesting. 「(訳は上とほぼ同じ)」などとなります。

注

\*1：倒置については、「ルール 13、24」などの解説を参照。 「ルール 04」の解説を参照。

\*2：〈前置詞 + 名詞〉を副詞句と考えることについては、

演習 和訳しなさい。

1. Looking at your life from a different perspective is of great significance when we are in trouble. (名詞 perspective 「視点、見通し」、名詞 significance 「重大さ」)
- 「  
」
2. All he could do was hide behind the wall, shivering. (動詞 hide 「隠す、隠れる」、動詞 shiver 「(体が) 震える」)
- 「  
」
3. Do you think you have only to listen to what you are told?
- 「  
」
4. Prior to the 18th century, wild places such as mountains and forests were seen as hostile and of no use unless mined or cut down. (prior to ~ 「～より前」、形容詞 hostile 「敵意のある、不適な」、接続詞 unless = if not、動詞 mine 「採掘する」)
- 「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「人生を異なる視点から見るとは、困っているときにはとても重要である。」 ※ 〈of + 抽象名詞〉の of great significance は、形容詞の「とても重要である」を意味する (= very significant)。ここでは主格補語と考える。主語は動名詞 Looking at 以降 perspective まで。接続詞 when 以降はときを表す副詞節。なお、you (本文中は your) や we はどちらも「(一般的な) 人」を表し、この文のように混在することもある。
2. 「彼にできることは、震えながら壁の後ろに隠れることだけだった。/ 彼には震えながら壁の後ろに隠れることしかできなかった。」 ※主語は All (that) he could do で、hide 以降 the wall までは補語となる名詞句 (hide は名詞的用法の (原形) 不定詞)。コンマに続く shivering は、主節を修飾する現在分詞の副詞用法 (「ルール 33」を参照) で、主節との同時を表す付帯状況 (「ルール 34」を参照)。
3. 「あなたは言われることをただ聞いていればいいと考えているのですか。」 ※主節の動詞 think の目的語である that
- 節 (that は省略) 中に、have only to do 「～さえすればよい」の慣用句が組み込まれたかたち。what you are told は、先行詞を要さない関係代名詞 what 「こと、もの」が導く名詞節で、「あなたが言われること」の意味。
4. 「18 世紀より前、山地や森林のような原野は、採掘あるいは伐採されなければ、(利用に) 適さず役に立たないと考えられていた。」 ※ 〈of + 抽象名詞〉の of no use 「役に立たない」は、形容詞 useless とほぼ同じ意味で、ここでは seen as ~ 「～と見なされる」に続く、形容詞 hostile と並列になっている。前置詞は名詞の前に置くものだが、as 「～として」は補語となる形容詞の前にも置くことができる (付録：さまざまな構文や語法 (1) の脚注 \*1 を参照)。接続詞 unless は if not ~ 「もし～でなければ」の意味を表し、副詞節を導く。ここでは主節の主語と同じ wild places と be 動詞 were が省略され、過去分詞 mined と cut down が並列になっていると考えればよい。つまり、この文の unless 以降は、if they (= wild places) were not mined or cut down の意味。

年 組 番 氏名

---

実施日 年 月 日

4



解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

ここでは基本的な比較表現として、比較級、最上級、原級を使ったものをまとめます。

- 比較を表現する品詞は、形容詞と副詞です。  
形容詞は名詞を比較し、副詞は名詞以外を比較します。これまで学んだルール通りです。
- 比較級や最上級のかたちは、原則として語の音節が2つまでのとき、語末に **-er** や **-est** をつけます。  
音節が3つ以上のとき、その語の前に **more** 「より多く」や **most** 「もっとも多く」を置きます。
- なお、音節とは、1つの単語を、母音を伴う1音のまとまりで区切るものです。  
例えば、日本語で言う「ストロング」は、文字ごとに1つずつ母音があるので5音節です。一方、英語の **strong** に母音は **o** の1つしかありませんから、1音節で一気に読まなくてはなりません。  
簡単な基準として、「短い単語は語末変化させ、長い単語は **more** や **most** を前に置く」と考えます。

基本的な例文をまとめて挙げましょう。よく見比べてください。

- **Meg is tall.** ー① 「Megは背が高い。」
- **Meg is much taller than Tom.** ー② 「Megはトムよりもはるかに背が高い。」
- **Meg is almost as tall as Jack.** ー③ 「Megはジャックとほぼ同じくらい背が高い。」
- **Jack is the tallest of the three.** ー④ 「ジャックは3人の中でいちばん背が高い。」

□ ①の文は、Megが「背が高い」とただ主観的に形容しているだけで、比較表現ではありません。

□ ②の文は、MegがTom「よりも背が高い」と、原級の形容詞 **tall** を比較級 **taller** にして、比較対象 Tom を **than** のあとに続けています。副詞 **much** 「はるかに」は比較級を強調します。この **than** は、実は従位接続詞です。従位接続詞は従属節を導くので、〈主語＋動詞〉構造が続きます。ですから、本来は **Meg is taller than Tom is.** とするのが文法的に正しい表現です。ただし、比較表現においては、**誤解のない限り、最小限の部分と比較する**という原則があります。よって、Tomに続く **is** はふつう省略されます。

□ では、比較対象がTomではなく、「私」だったらどう表現するでしょうか。本来ならば、**Meg is taller than I (am).** 「Megは私よりも背が高い。」とするのが正しい表現です。Megが主語ですから、比較対象も主語です。よって、**than** に主格の **I** 「私(は)」が続くのです。ただ、実際には、**Meg is taller than me.** のように、目的格 **me** が続くこともよくあります。このとき、接続詞である **than** は、目的語が続く定義上、前置詞と解釈されることになります。

□ 比較対象が「1年前の本人」のときには、例えば次のように表現します。

- **Meg is five centimeters taller than she was a year ago.**  
「Megは1年前よりも5センチ背が高い。」

動詞 **is** と **was** の時制の違いが大切です。音読を繰り返して、ぜひ暗記してください。

□ ③の文は、MegがTomとほぼ「同じくらい背が高い」と、原級の形容詞 **tall** を2つの **as** の間に挟んで表現するものです。前の **as** は副詞「同じくらい」、あとの **as** は接続詞「同じように」の意味です。②と同様、Jackの直後には **is** が省略されています。  
**almost** 「ほぼ、ほとんど」は副詞で、「わずかに届かない」イメージです。  
直訳すると「Megはジャックがそうであるのとほぼ同じくらい背が高い。」となります。

- 
- 
- many 「(数が) 多い」 や little 「(量が) ほとんどない」 などの一部の形容詞を使うとき、  
それらが形容する名詞を 〈as ~ as〉 の間に一緒に挟んで表現することがあります。

- Bill doesn't have **as much** money as Elon.

「ビルはイーロンほどは (と同じくらいは) 多くのお金を持っていない。」

Elon のあとには、代動詞 does (あるいは動詞 has) が省略されていると考えます。

- また、否定語を含む 〈not as ~ as ...〉 で 「…ほどは～ない」 の意味になります。

- Please move **as many** chairs as possible.

「できるだけ多くの椅子を運んでください。」

文末の possible は「可能な限り」の意味の副詞です。これは S can 「S ができる限り」の  
代わりに使うことができます。ここは主語 you を省略する命令文なので you can の代わりです。

- Please move **as many** chairs as you can. 「(訳は上と同じ)」

- ④の文は、Jack が「3人」という複数の個の集団の中で、「もっとも背が高い人」であることを  
表す最上級表現です。最上級の「もっとも～」で修飾する名詞は1つに限られますから、  
その名詞を限定するために、定冠詞の the を付けることになります。この文には形容詞 tallest で  
修飾する先の名詞が見当たりませんが、(the tallest) person などが省略されていると考えます。

- ただ、この例文のように形容詞が補語となる叙述用法の場合、the を付けなくてもあります。  
一方、the tallest person のように形容詞が限定用法の場合は the が必要です。

- Jack is the tallest **in** the class. 「ジャックはクラスでいちばん背が高い。」

この文では、比較対象となる集団が、複数個 (3人) ではなく、範囲 (クラス) になっています。  
このような1つの範囲の中で比較するとき、前置詞は of ではなく、in を使うのが原則です。

ここまで形容詞の比較表現を確認してきました。次は、副詞の比較表現の例です。

- Doug eats **fast**. ⑤ 「ダグは早食いだ。」  
□ Doug eats **far faster than I**. ⑥ 「ダグは私よりもはるかに速く食べる。」  
□ Doug eats **as fast as Ken**. ⑦ 「ダグはケンと同じくらい速く食べる。」  
□ Doug eats **second fastest in the class**. ⑧ 「ダグはクラスで2番めに早食いだ。」

- ①の文では、tall は主語 Meg を形容する形容詞ですから、主格補語 (Meg = tall) でした。

⑤～⑧の文では、fast は動詞 eats を修飾するので、副詞と判断します。

- 形容詞でも副詞でも、比較の表現の基本はほとんど変わらないことがわかると思います。

- ④の文では、形容詞の最上級の前に定冠詞 the が付いていましたが、⑧の文にはありません。

the は本来、限定された名詞の前にかんむりとして置くものです。

ここは動詞を修飾する副詞ですから、修飾すべき名詞がないのです。

ただ、最上級の表現に慣用的に引っ張られて、副詞の前に the を置くこともあります。

- ⑧の文では、「2番めに速く」と表現されています。「～番めにもっとも」を表すときには、  
最上級の前に second や third のような序数を置きます。これは、形容詞の最上級でも同様です。

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

比較表現の基本的なかたちを確認してきました。次からは応用的な文を1つずつ見ていきましょう。

何と何をどのように比較しているのか、文の要素の品詞と副詞を意識しながら確認してください。

□ **He likes tulips better than roses.** 「彼はバラよりもチューリップが好きだ。」

□ 副詞 **well** 「よく」の比較級 **better** が動詞 **like** を修飾し、文の目的語である「チューリップ」と「バラ」について、どちらの方が「好き」かを比較しています。

では、前の文を踏まえて、次の2つの文の意味の違いを考えてみてください。

□ **I like him better than you.** 「私はあなたよりも彼の方が好きだ。」

□ **I like him better than you do.** 「私の方があなたよりも彼が好きだ。」

□ 上の文では、動詞 **like** の目的語である **him** と **you** が比較されていると考えます。

よって、「私」が「あなた」に対して、「あなたよりも彼の方が好きだ」と言っている内容です。

このときの **than** は、名詞（目的語）が続いていますから、前置詞と解釈できます。

□ 一方、下の文では、**I** と **you** の主語が比較されていると考えます。よって、「私」が「あなた」に対して、「あなたが彼を好きであるよりも、私の方が彼を好きだ。」と言っています。

**you** に代動詞 **do** が続くことによって、この **you** が主語であることがわかるというわけです。

このときの **than** は、節（〈主語＋動詞〉構造）が続いていますから、接続詞です。

□ **Call me as soon as possible.** 「できるだけ早く私に電話しなさい。」

□ 原級比較の中でも、**as soon as possible** 「できるだけ早く」はよく **ASAP** と短縮表現され、使用頻度の高さがうかがえます。副詞句としてそのまま覚えてしまうとよいでしょう。

**possible** はここでは **you can** と交換できますが、そのときの **as soon as** は接続詞（句）です。

□ **As far as I know, Ben, as well as Mike, was at the party.**

「私の知る限りでは、マイクだけでなくベンもそのパーティにいた。」

□ **as far as** ～も副詞節を導く接続詞句で、「～する範囲で」の意味を表します。

類似表現の **as long as** ～ 「～する条件で」も一緒に覚えておきましょう。

□ **You can stay here as long as you keep quiet.** 「静かにしている限り、ここにいていいよ。」

どちらも「～する限り」と訳せますが、範囲と条件のニュアンスの違いを覚えておきましょう。

□ **A as well as B** は「**B** だけでなく **A** も / **A** も **B** も（同様）」の意味で、**A** に重点があります。

この文ではコンマに挟まれた追加情報としてはたらき、前置詞句として副詞句を導いています。

接続詞句として節を導くこともあります。

□ **This old sewing machine didn't work as well as I expected.**

「この古いミシンは期待したようにはうまく動かなかった。」

□ **He is junior to me by three years.** 「彼は私よりも3歳年下だ。」

□ **junior** 「より年下の」、**senior** 「より年上の」、**major** 「より大きい」、**minor** 「より小さい」、

**superior** 「より優れている」、**inferior** 「より劣っている」などの形容詞はラテン語に由来し、

---

その中に more 「より多い」 や less 「より少ない」 の意味を含みます。

比較対象は、than 「～よりも」 の代わりに to を使います。

- 比較表現における「(主に数の) 差」は、前置詞 by が導く副詞句で表すことがあります。

これは、ラテン語比較だけに限りません。

- He is younger than I **by** three years. 「(訳は同じ)」

= He is three years younger than I.

= He is three years junior to me.

- prefer [prɪfəɹ] 「より好む」 は、ラテン語に由来する比較の意味を含む動詞です。

ついでに覚えてしまいましょう。

- I **prefer** soft-boiled **to** hard-boiled eggs. 「固ゆでよりも半熟卵の方が好きだ。」

- **Nothing is more important than** asking for help when in trouble.

「困っているときに助けを求めることよりも大切なことはない。」

- 比較表現では nothing や、no を伴う名詞句がよく現れます。日本語で直訳してもなかなか

意味がとりづらいですが、繰り返し音読して、イメージで意味をとらえるようにしましょう。

繰り返しているうちに、自分でも表現できるようになります。原級比較の例も挙げておきます。

- **Nothing is as important as** asking for help when in trouble.

「困っているときに助けを求めることほど大切なものはない。」

- **This comic book affects me more than anything else** in my life.

「このマンガは私の人生で、ほかの何よりも私に大きな影響を与えている。」

- 比較表現では anything や、any を伴う名詞句もよく現れます。

- Mt. Fuji is **higher than any** other mountain in Japan.

「富士山は日本のほかのどの山よりも高い。」

- この any other に続く名詞は、原則として単数形になります。ちなみに、ふつう山などの

横幅のある「高い」は high、ビルなどの横幅のない「高い」は tall で表します。

- I found the cost of the event **less expensive than** expected.

「そのイベントの費用は意外と (予想されたよりも) 高くなかった。」

- less 「より少ない / より少なく」 は、little の比較級で、more の反意語です。

この例文では形容詞 expensive を修飾しているので副詞ですが、

less expensive で形容詞句 (目的格補語) になっています (目的語は the cost of the event)。

形容詞の less は、数えられない名詞 (不可算名詞) を修飾するときに使います。

数えられる名詞 (可算名詞) を修飾するときには fewer 「より少ない」 を使います。

- This new chemical has **less** impact on the environment **than** the traditional one.

「この新しい化学物質は従来のもよりも環境への影響が少ない。」

- The company has recently hired far **fewer** workers **than** before.

「その会社は最近、社員の雇用を以前よりもずっと減らしている。」

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- **I would rather die than break my word.**  
「自分の約束を破るくらいなら死んだ方がましだ。」
- **A rather than B / rather A than B** 「Bよりも（むしろ）A」ではAに重点があります。  
この文は、動詞 die と break を対比している表現です。
- **Art is a creative activity rather than a product.**  
「芸術とは、成果というよりむしろ創作的な活動である。」  
この文では、a creative activity と a product の2つの名詞を比較しています。
- **I couldn't agree more with the plan to help the refugees.**  
「その難民を助ける計画に大いに賛成する。」
- **couldn't agree more** で「（より賛成することはできないだろうに→）大賛成だ」の意味です。  
この助動詞の過去形 **could** は仮定法で、「仮に多少（条件などが）変わっても」という含みから、「強く賛成する」という現在の意味になるのです。よく使う表現ですから、そのまま覚えましょう。  
参考までに、比較表現は含みませんが、**not** を伴う最上級に近い表現を挙げておきます。
- **I can't thank you enough for all that you've done for me.**  
「あなたがこれまで私にしてくれたことに感謝してもしきれません。」
- **Our plan went well more or less.** 「私たちの計画はある程度うまくいった。」
- **more or less** で「多かれ少なかれ、ある程度」の、多少の幅を許容する意味の副詞になります。  
この表現が **nothing** や **no** などを伴うと、「ほかでもない、まさにその」の意味になります。
- **He was a journalist, nothing more or nothing less.**  
「彼はジャーナリストであり、それ以上でもそれ以下でもなかった。」
- **More and more people came to know the importance of education.**  
「ますます多くの人々が教育の大切さを知るようになった。」
- 〈比較級 + **and** + 比較級〉で「ますます～」の意味になります。  
この例では名詞 **people** を修飾するので形容詞ですが、下の例のように副詞にもなります。
- **I'm more and more concerned about the future of this country.**  
「私はこの国の未来がますます心配になっている。」
- **Why don't you at least try some on, instead of just looking?**  
「ただ見てるだけじゃなくて、（少なくとも）試着ぐらいしてみたら。」
- 〈**at** + 最上級表現〉の副詞句は「もっとも～でも」の意味で、多くは慣用的に使われます。  
この例では、**try on** 「試着する」という動作を副詞句 **at least** 「少なくとも」が修飾しています。  
**least** は、**little** の最上級ですが、**at least** で熟語としてそのまま覚えましょう。
- **Come home by eight at the latest.** 「遅くとも8時までには帰ってきなさい。」
- **Her painting skill is average at best.** 「彼女の絵画の腕前はよくて平均的だ。」

演習 和訳しなさい。

1. Australia is almost as large as the United States.

「

」

2. The United States is 25 times as large as Japan.

「

」

3. What is the third largest country in the world?

「

」

4. Please contact me as soon as you read this.

「

」

5. My uncle has as many as 2,000 CDs.

「

」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- 「オーストラリアはほぼアメリカと同じ大きさである。」 ※原級比較の〈as ~ as〉「同じくらい〜」。この表現は相対的な大きさを比較しているだけで、これらの国が絶対的に大きいことを表しているわけではない。つまり、as large as とするか as small as とするかは表現する人の主観によるということ。なお、この英文は、Australia is almost the (same) size as the United States. としてもほぼ同じ意味。
- 「アメリカは日本の25倍の大きさである。」 ※原級比較による倍数表現。「2倍」は twice、「(3以上の)〜倍」は〈~ times〉で表す。「半分」は half、「3分の1」は one-third、「3分の2」は two-thirds で表す（「3分の1」が2つと考える）。なお、この英文は The U.S. is 25 times larger than Japan. とも表現できる。
- 「世界で3番目に大きな国はどこですか。」 ※「〜番めに」を含む最上級表現は、最上級の前に second, third, fourth などの序数を置く。なお、和訳は「どこですか」だが、この英文の疑問詞が where にはならない理由は理解できているだろうか。問題の疑問文を平叙文にすると、例えば China is the third largest country in the world. となるが、この疑問文は主語の China の部分を問うものだからである。主語は必ず名詞だから、「もの」を問う疑問代名詞の what を使わなくてはならない。
- 「これを読んだらすぐに私に連絡してください。」 ※ as

- soon as SV「SVしたらすぐに」はときを表す副詞節。ときや条件を表す副詞節においては、未来のことも現在形で表すのが原則。この as soon as は、例えば接続詞 when「〜のとき」と置き換えても大きく意味が変わらないので、接続詞と判断できる。
- 「私の叔父は2,000枚ものCDを持っている。」 ※多寡や大小などを表す形容詞を〈as ~ as〉の間に挟むことで、その形容詞を強調する表現。本編での解説は割愛したから、ここで覚えてほしい。この英文を直訳すると「私の叔父は2,000枚と同じくらいCDを持っている。」となるが、このときの as many as は「〜もの多くの(数の)」という数の多さを強調している。不可算名詞を強調するときには as much as「〜もの多くの(量の)」となる。「わずか〜しか」という少なさを強調するときには、可算名詞では as few as、不可算名詞では as little as となる。また、これらはそれぞれ〈no + 比較級 + than〉とも表現できる。例えば5.の英文は My uncle has no fewer than 2,000 CDs. 「私の叔父は(2,000枚よりもまったく少なくないCDを持っている) → 2,000枚にも及ぶCDを持っている。」とも表現できる。例文をもう少し挙げておく。I have no more than 50 cents with me. = I only have 50 cents with me. = I have as little as 50 cents with me. 「私はいま、たった50セントしか持っていない。」

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

□  
 / 5



演習 和訳しなさい。

1. Nothing is more important than your health.  
「  
」
2. There was a vast snowfield as far as the eye could reach. (形容詞 vast 「広大な」)  
「  
」
3. Fewer and fewer young people read books.  
「  
」
4. This milk is far superior in quality to the milk I drink daily.  
「  
」
5. He should know better than to believe such nonsense. (名詞 nonsense 「ばかげたこと」)  
「  
」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「健康よりも大切なものはない。」 ※主語に nothing が使われている比較表現の文。この英文は、Nothing is as important as your health. としてもほぼ同じ内容である。なお、内容が一般的なものなので、この your は「あなたの」と訳さない。
2. 「見渡す限り広大な雪原だった。」 ※ there is/are 構文で、be 動詞に続く主語の存在を初めて述べるときに使われる。as far as 以降は、この接続詞句が導く場所を表す副詞節で、直訳すると「目の届く限りと同じくらい遠く」、意訳すると「見渡す限り」となる。よく使われる表現なので、同じ意味の as far as S can see と一緒に、そのまま覚えるとよい。
3. 「本を読む若者はますます少なくなっている。」 ※〈比較級 + and + 比較級〉で「ますます～/次第に～」の意味になる。It gets darker and darker. 「次第に暗くなってきた。」 more and more 「ますます多い/多く」の反対の意味を表す fewer and fewer 「ますます少ない/少なく」は、修飾する対象が可算のときに使う。不可算を修飾するときには less and less となる。例えば、Young people are reading less and less. 「若者はますます本を読まなくなりつつある。」という文において、less and less は述語動詞の are reading を修飾しているので不可算の副詞と考える。
4. 「この牛乳は私が日々飲んでいる牛乳よりも、質の点ではるかに優れている。」 ※ラテン語比較の be superior to ～ 「～よりも優れている」。間に in quality 「質の点で」という副詞句が入り込んでいる。比較対象の the milk は省略された関係代名詞に続く、I drink daily という形容詞節によって後置修飾される先行詞。the milk 以降の全体が名詞節である。
5. 「彼にはそんなばかげた話を信じない分別があるはずだ。」 ※ know better than to do で「(～することよりもよりよく知っている→) ～しない分別がある/～するほど愚かではない」の意味になる。助動詞 should に「～すべき」の訳がうまく当てはまらないときには、「当然」のイメージに適した訳をあてはめるとよい。また、この表現は仮定法過去完了でもよく使われる。She should have known better than to cheat on the exam. 「彼女は試験でカンニングをしない分別があるべきだった(実際にはカンニングしてしまった)。」

年 組 番 氏名  
 \_\_\_\_\_  
 実施日 年 月 日

□ / 5



演習 和訳しなさい。

1. He would rather read than sing in a karaoke room.  
「」
2. I prefer to create games rather than play them.  
「」
3. I couldn't care less what other people say about me.  
「」
4. Science is nothing more or less than the realization that nothing can keep you from making discoveries into reality. (名詞 realization 「実現」)  
「」
5. A good example of something that's worked better than we expected, or at least worked as well as we expected, is the policy of water quality improvement. (名詞 policy 「政策」、water quality improvement 「水質の改善」)  
「」

演習：解答・解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

1. 「彼は、カラオケボックスで歌うよりも、読書をした。」  
※ would rather A than B 「Bよりも(むしろ)Aをしたい」で、AとBの動詞を比較している文。この過去形の助動詞 would は仮定法の一つで、would like to do 「(できれば)～したい」と同様、控えめな現在の意志を表している。
  2. 「私はゲームをするよりもむしろ作る方が好きだ。」  
※ prefer A to B 「BよりもAの方を好む」の応用で、prefer A rather than B のかたち。AとBの(to)不定詞を比較している。
  3. 「ほかの人が私について何を言おうと私はまったくかまわない。」 ※ 〈not + 比較級〉を使った強調表現。couldn't care less で「(より少なく気にすることはできないだろうに)→まったく気にしない」の意味になる。I don't care what other people say about me. を強調した表現と考えればよい。what以降は動詞 care の目的語となる名詞節(関係代名詞 what が導く名詞節と考えても、間接疑問と考えてもよい)で、less は動詞 care を修飾する副詞。
  4. 「科学とは、発見したものを現実のものに変えるという、何ものにも止められない実現にほかならない。」
- ※ nothing more or less than ～ 「(～よりも多くて少ないものは何もない)→～だけだ/～にはかならない」の意味。本文は抽象的な内容なので理解しづらいかもしれないが、要は「科学とは発見したもの(概念)を実在するもの(製品など)に変えることであり、人々がそれを実現することは何ものにも邪魔できない」ということ。that は〈同格のthat〉で、抽象的な名詞 the realization が nothing can ～以降の節で具体的に説明されている。keep O from doing 「Oが～することを妨げる」、make O into ～ 「Oを～に作り変える」
5. 「私たちが期待していたよりもよく機能してきたもの、あるいは少なくとも期待していたのと同じくらい機能してきたもののよい例は、水質改善の政策である。」 ※長い主語の構造がわかれば文全体の意味がわかる。that's は that has で、直後の worked better than we expected と(at least) worked as well as we expected が or で等位接続され、比較級 better than と原級 as well as の2つの比較表現が対比されている。これら2つの節は、関係代名詞 that によって、先行詞 something を後置修飾している。つまり、文の述語動詞は is で、その前はすべて主語となる名詞の意味のまとまりである。

|     |   |   |    |       |
|-----|---|---|----|-------|
| 年   | 組 | 番 | 氏名 |       |
| 実施日 |   |   |    | 年 月 日 |

検印

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

動詞のさまざまなかたちと意味が比較できるよう、動詞 study「勉強する」を使ってまとめます。

動詞部分にあてはまる意味や訳から、違いや共通点をイメージでつかむよう心がけてください。

□ **She studies hard.** 「彼女は（ふだんから）一生懸命勉強する（人だ）。」

□ もっとも基本的とされる現在形「勉強する」ですが、

「性質として、ふつうは」といったイメージが含まれていることに注意してください。

□ この例文は、語末に -s がつく三単現（主語が三人称で単数、時制が現在）になっています。

□ **He studied hard last night.** 「彼は昨晚、一生懸命勉強した。」

□ 過去形「勉強した」です。動詞を過去形にすることで、過去の動作や存在を表します。

□ **She is now studying in her room.** 「彼女は今、自分の部屋で勉強している。」

□ 現在進行形は「現時点で（まさに）勉強している」という臨場感を含む表現ですが、

その「時点」にはある程度の幅があります。「今このときの瞬間」を表すこともあれば、

「(かつてはそうではなかったが、相対的に) このごろは」という幅のある時点も表せます。

□ **She said she hated studying before, but now she is studying hard daily.**

「彼女は以前、勉強することが大嫌いだったと言ったが、今は日々、一生懸命勉強している。」

□ be 動詞を過去形にすることで「過去のある時点で勉強していた」という意味の

過去進行形になります。ふつう過去の時点を表す副詞を伴います。

□ **She was studying when I visited her.** 「私が訪ねたとき彼女は勉強していた。」

□ 文脈によって、進行形は確実性の高い近い未来の予定を表すことがあります。

□ **She is leaving for Tokyo tomorrow morning.** 「彼女は明朝、東京へ出発する予定だ。」

□ **He is going to study hard for the exam after the competition is over.**

「その大会が終わったら彼は試験に向けて勉強をがんばるつもりだ。」

□ be going to do 「～するつもりだ」は、あらかじめ計画している未来を表します。

ここでは、「大会が終わったら勉強をがんばる」ことをあらかじめ彼が決めている、ということです。

なお、この文の「大会が終わる」のは未来のことですが、時や条件を表す副詞節においては、

未来表現を使わないのがふつうです。

□ 状況を踏まえた主観的な未来を表し、「～だろう」という意味になることもあります。

□ **It is going to rain pretty soon.** 「もうまもなく雨が降るだろう。」

□ 進行形に to 不定詞が続くので、「～することに向かっているところ」をイメージしましょう。

□ **She will study hard to make her dream come true.**

「彼女は自分の夢を実現するために一生懸命勉強するだろう。」

□ 助動詞 will は、名詞 will が「意志」を表すこともあり、意志を含む未来を表します。

□ あらかじめ計画されていた予定を表す be going to do とは違い、その場での決断も表せます。

□ **Wait here. I'll go get you some water.** 「ここで待ってて。水を持ってきてあげる。」

- 
- 
- 疑問文では、相手の意図を尋ねることで、依頼「～してもらえますか」を表せます。
    - **Will you do this job for me?** 「私の代わりにこの仕事をしてもらえますか。」
  - また、比較的客観的な未来の推量も表せます。
    - **It will rain** tonight according to the forecast. 「予報によると今夜は雨が降るらしい。」  
※客観的データに基づく天気予報では、**be going to** よりも多く使われる傾向があるようです。
  - **He has to study hard to pass the exam.**  
「試験に合格するには、彼は一生懸命勉強しなくてはならない。」
    - **have to do** は、「(客観的な状況を踏まえて) ～しなくてはならない」という義務や、「(当然) ～に違いない」という推量を表します。共通する意味をイメージでつかんでください。
      - **He has to be** over 80. 「彼は80歳を超えているに違いない。」
    - 否定語を加えた **not have to do** は「～する必要はない」という意味になります。
      - **He doesn't have to study** that hard. 「彼はあんなに一生懸命勉強する必要はない。」
  - **He must study hard.** 「彼は一生懸命勉強しなくてはならない。」
    - 助動詞 **must** は主観的な義務を表し、「～しなくてはならない」と訳せます。  
主語が **you** のときは高圧的なニュアンスで、命令文「～なさい」の意味に近くなります。
    - 文脈によっては強い推量を表し、「～に違いない」という意味になります。
      - **He must know** who she is. 「彼女がだれか、彼は知っているに違いない。」
    - 否定形 **must not** は強い禁止「～してはいけない」を表します。
      - **You must not eat or drink** here. 「ここで飲食してはいけません。」
    - 推量の意味では、過去を表すために、完了の助動詞 **have** を加えます。
      - **He must have known** who she was. 「彼女がだれか、彼は知っていたに違いない。」
    - 義務の意味では、過去を表すために、**must** を **had to** に変換します。
      - **He had to study** hard. 「彼は一生懸命勉強しなくてはならなかった。」
    - 他の助動詞、例えば **will** と組み合わせるときにも、義務を表す **have to** に変換します。
      - **He will have to study** not just English but also German.  
「彼は英語だけでなくドイツ語も勉強しなくてはならないだろう。」
  - **You can study abroad if you take part in the program.**  
「そのプログラムに参加すれば、留学することもできる。」
    - 助動詞 **can** は、可能「～できる」や推量「～かもしれない/可能性がある」、許可「～してもよい」などと訳せます。共通する意味をイメージでつかんでください。
      - The same thing **can happen** to you. 「同じことがあなたにも起こるかもしれない。」
      - **You can call** me Al. 「僕のことはアルと呼んでいいよ。」
    - 疑問文では依頼「～してくれますか」や提案「～しましょうか」を表すこともできます。
      - **Can you help** me with this? 「これ、手伝ってくれないか。」
      - **Can I help** you? 「お手伝いしましょうか。/(お店で) いらっしゃい。」

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

※ May I help you? の方が、より丁寧なニュアンスがあります。

- 他の助動詞と組み合わせるときには、可能を表す be able to に変換します。
  - Once you learn the rules, you **will be able to apply** them to all English sentences.  
「いったんルールを覚えれば、それをすべての英文にあてはめられるようになるだろう。」
- You **may study** here as long as you keep quiet.  
「静かにしているかぎり、ここで勉強してもいいでしょう。」
- 助動詞 may は、(正式な) 許可「～してよい」や推量「～かもしれない」の意味を表します。  
推量の意味では、確率は半々のイメージです。
  - You may be right. 「あなたの言うとおりかもしれない (50% の確率で)。」
  - may を使って許可を肯定することはあまりありません。権威的なニュアンスが出るからです。
    - May I come in? — <sup>△</sup>Yes, you may. 「入室してもいいですか。」 — 「許可しよう。」
    - cf. — Sure./Go ahead./Certainly./Of course./Why not? 「もちろん (いいですよ)。」
- He **used to study** hard as a high school student.  
「彼は高校生のときに一生懸命勉強したものだ (今は違う)。」
- used to do は比較的長い期間における過去の習慣を表し、  
「よく～したものだ (が、今はそうではない)」という、現在とは反する意図を含みます。  
この used to は助動詞と考えるとよいでしょう。used は [jú:st | ユースト] と発音します。
- She **would often study** in the school library.  
「彼女はよく学校の図書館で勉強したものだ。」
- 助動詞 would は断続的な過去の習慣を表し、「～したものだ」の意味になります。
  - used to とは違って現在に反する意図は含みません。また、よく often を伴います。  
「(毎日とは言わないまでも) よく図書館で勉強した」という感じです。
- He **has studied** hard for as long as he can remember.  
「彼は物心ついてからずっと (彼が思い出せるのと同じくらい長く)、一生懸命勉強してきた。」
- 現在完了形 (have + 過去分詞 (-ed 形)) は、過去が影響を与えている現在を表します。  
文脈によって、上の例のような継続、下の例のような経験、完了などを表します。
  - He **has just finished** his homework. 「彼はちょうど宿題を終えたところだ。」 (完了)
  - He **has never been** abroad. 「彼は海外に一度も行ったことがない。」 (経験)
- この have は、過去分詞が続く点と、他の助動詞と一緒に使える点で、例外的な助動詞です。
- なお、過去完了形 (had + 過去分詞 (-ed 形)) は、過去の時点のさらに過去が、  
その過去の時点に影響を与えていることを表します。現在完了の〈現在←過去〉の時間を、  
〈過去←さらにその過去〉の時間へとスライドさせたものと考えるとわかりやすいでしょう。
  - He **had just finished** his homework when I dropped in on him.  
「私が彼のところに寄ったとき、彼はちょうど宿題を終えたところだった。」

---

---

□ She **should study hard** to pass the exam.

「彼女は試験に合格するために一生懸命勉強するべきだ。」

- 助動詞 **should** は当然を表し、「(当然) ~するべきだ」という提案や忠告、  
「当然~だろう / ~のはずだ」という推量を表します。共通する意味をイメージでつかんでください。

□ She **should be studying hard now**. 「彼女は今、一生懸命勉強しているはずだ。」

- **should** は助動詞 **shall** の過去形ですが、実現が確認されていない現在の仮定の意味合いです。  
2つ上の例文では「実際は勉強していない / 勉強していることが確認できない」ということです。  
これを過去形「するべきだった」にすると、実現されなかった過去を表すことになり、  
〈**should have + 過去分詞**〉のかたちで表現されます (仮定法過去完了)。

□ She **should have studied hard**. 「彼女は一生懸命勉強するべきだった (実際は違った)。」

□ She **would / could / might study hard** if she had her own room.

「自分自身の部屋があれば彼女は一生懸命勉強するのだろうが  
/ できるのだろうが / するのかもしれないが (実際は違う)。」

- 仮定法の基本文は、**if** が導く従属節 (副詞節 / 条件節) と主節 (帰結節) からなります。  
「もし~ならば、…なのだが (実際は違う)。」という「現在」の反実仮想を表すとき、  
従属節の動詞は〈過去形〉を、主節の動詞は〈助動詞の過去形 + 原形不定詞〉を使います。  
これを仮定法過去といえます。つまり、現在の反実仮想を表すために過去形を使うわけです。
- 「もし~だったならば、…だったのだが (実際は違った)。」という「過去」の反実仮想を表すには、  
仮定法過去の時制をずらします。具体的には、従属節の動詞は〈**had + 過去分詞形**〉、  
主節の動詞は〈助動詞の過去形 + **have + 過去分詞形**〉を使います。  
これを仮定法過去完了といえます。過去を表すために完了の助動詞 **have / had** を使うのです。

□ If we hadn't had the blackout, I **could have studied** enough for the test.

「もし停電が起こらなければ、十分にテスト勉強できたはずなのに (実際は違った)。」

□ **Could I study here?**

「ここで勉強してもいいでしょうか。」

- 仮定表現「もし、もしかして」には異なる実現の度合いがあります。  
実現がありえないときには、仮定法過去を使って反実仮想を表現しますが、  
実現がありえるときには、過去形を使うことで、控えめで丁寧な現在の内容を表現できます。  
この文は、**Can I study here?** 「(私は) ここで勉強できますか。」をより控えめで丁寧にした、  
「(もしかして) ここで勉強してもいいでしょうか。」というニュアンスになるわけです。
- 推量を表す助動詞の **will** や **may** も、その過去形 **would** や **might** を使うことで、  
それぞれ **will** や **may** の意味をより控えめにした現在を表すことができます。
- **Would you let me know something?** 「ちょっと教えていただきたいのですが。」
- **Would I lie to you?** 「(ひょっとして) 私があなたに嘘をつくとも思っているのですか。」
- **You might think she's quiet, but she's not.**

「(もしかしたら) あなたは彼女がおとなしいと思っているかもしれないが、そんなことはない。」

解説

英語の部分は暗唱できるまで繰り返し音読すること。

- **He had better study harder.** 「彼はもっと一生懸命勉強したほうがいい。」
- **had better do** 「～したほうがいい」の **had better** は助動詞と考えるとよいでしょう。  
ただし、使用には注意が必要で、脅しを含むかなり強い忠告を表すことがあります。  
とくに主語が **you** になると、命令文とほとんど変わらない高圧的なニュアンスになります。  
たいていの場合、**should** 「～すべきだ」を使う方が、忠告には適しています。
- **You had better study harder.** 「もっと一生懸命勉強するがいい（勉強したまえ）。」
- **You may as well study harder.** 「あなたはもっと一生懸命勉強したほうがいいかもね。」
- **may as well do** は、推量の助動詞 **may** と原形不定詞の間に **as well** 「同様に」の副詞句が入り込んだものです。「～したほうがいいかもしれない」という控えめな推量の意味を表します。  
**A as well as B** 「**B** と同じくらい **A**」の、**as B** の部分が意識されていると考えられます。
- **You might as well study as watch that silly TV program.**  
「あのバカなテレビ番組を見るくらいなら勉強した方がまだましかもね。」  
※ **may** が過去形 **might** になるとわずかに控えめなニュアンスになりますが、  
ほぼ同じ意味と考えてかまいません。

増補改訂版 初版2刷発行：2023年2月25日

増補改訂版 初版発行：2022年3月31日

初版発行：2021年11月18日

編著者 上原美和

編集協力 William Lawrenz

発行者 上原美和

発行所 武里出版

〒344-0021 埼玉県春日部市大場 1166

<https://tkst2020.com>

[uehara@tkst2020.com](mailto:uehara@tkst2020.com)

本書の一部または全部の営利利用を禁じます。

© 武里出版 2020—2023